

GOTANBATA

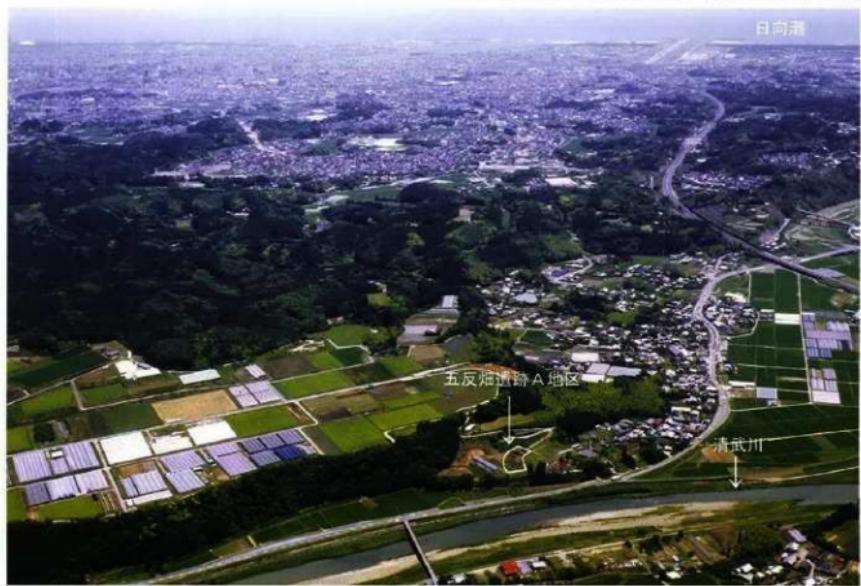
五反畠遺跡A地区

県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書

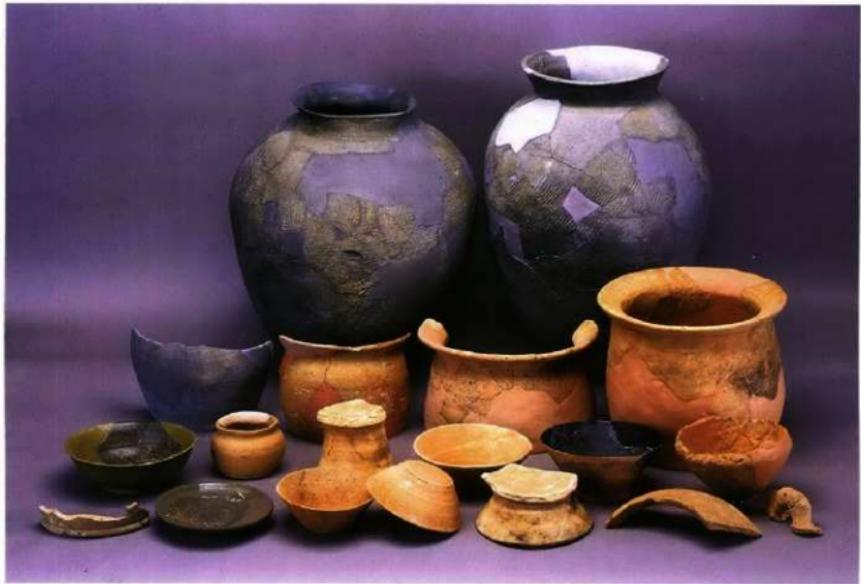
2009

清武町教育委員会

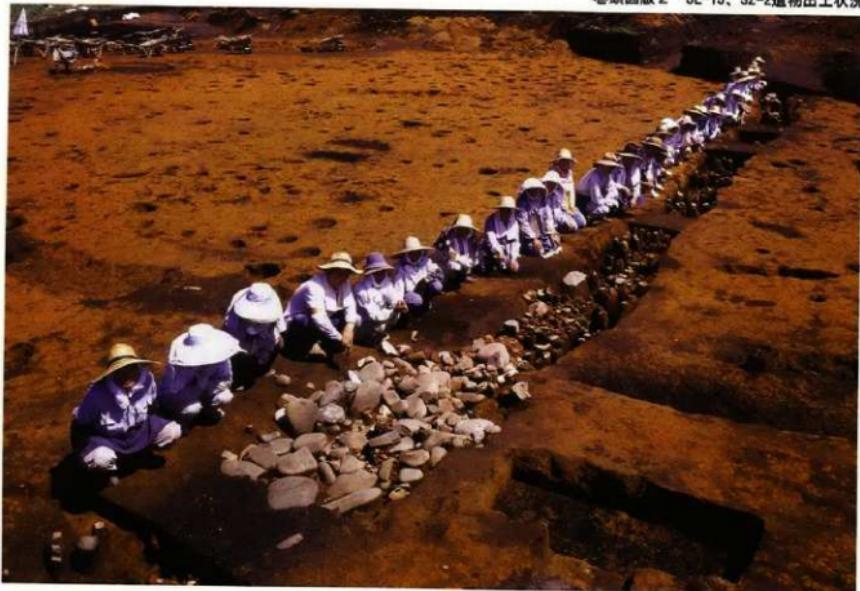
白向灘



1 五反畠遺跡周辺から日向灘を望む風景



2 五反畠遺跡A地区出土の主な古代の遺物



1 SE-13遺物出土状況(北西から)



2 SZ-2検出状況(北西から)

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、平成19年度事業区で実施した五反畠遺跡A地区の発掘調査報告書です。

調査の結果、五反畠遺跡A地区では縄文時代から近世に至る幅広い時期の遺物や遺構が確認されました。なかでも、古代の資料が充実しており、貿易陶磁や墨書き土器などこれまで本町で発見例の少なかった貴重な資料が幾つも得られております。

今後は、これら先人達の残した貴重なメッセージを学校や地域と十分な連携を図り、学校教育や生涯学習の場などをとおして伝えていきたいと考えております。そして、先人達が使用した道具やその知恵など太古の暮らしの一端に触れることで、郷土の歴史を見つめ直すきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり多大な御協力をいただきました中部農林振興局及び地元の皆様、そして夏の暑い時期に作業に従事してくださった発掘作業員の皆様に對し、心より厚く御礼申し上げます。

平成21年8月

清武町教育委員会
教育長 神川 孝志

例　言

1. 本書は県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、平成19年度に実施された五反畠遺跡A地区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間、調査の経過、調査組織については、本文中「第Ⅰ章」「第Ⅱ章」の中に記している。
3. 本遺跡の遺跡略号は「G T B」とする。なお、本遺跡は調査区が複数あるため、本調査区については「G T B-A」を略号とする。
4. 発掘調査は井田篤、秋成雅博の協力を得て、今村結記が担当した。なお、本調査に従事した発掘作業員は下記のとおりである。

(以上、発掘作業員) ※60音順

5. 発掘調査における測量・実測については、秋成、今村及び実測補助員が行なった。
(以上、実測補助員) 関谷隆志(宮崎大学学生) ※50音順
6. 遺物・図面の整理及び報告書作成業務については、井田・秋成の協力を得て、今村が担当した。なお、本報告書作成業務に従事した整理作業員は下記のとおりである。

(以上、整理作業員) ※50音順

7. 石器実測及びトレースについては、一部を(株)埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。なお、これらの委託業務の監修については秋成、今村が行なった。
8. 本書で使用した写真については今村が撮影した。
9. 遺構の番号については、検出順に通し番号で付けた。なお調査後、遺構でないと判断したものについては欠番とした。欠番はSX-1、SE-6、SI-12である。
10. 基本土層番号は、発掘調査時、これまで調査が行なわれてきた船引台地における基本土層に対応させ付けていた。しかし、今回の報告書中においては便宜を図るために下記のように統一した。基本土層の詳細は本文中「第Ⅱ章 第1節」に記している。なお、出土遺物へのナンバーリングは旧番号で記している。

新番号	I層	II層	III層	IV層	V層	VIa層	VIb層	VIc層	VI層	VIb層	IX層	X層	XI層
旧番号	Ia層	I b層	I c層	II層	III層	IVa層	-	IV b層	V層	VI層	IX層	XIII層	-

11. 本書で使用した土層および土器等の色調については、『新版 標準土色帖(1997年後期版)』の土色に準拠した。
12. 放射性炭素年代測定及び樹種同定については、(株)古環境研究所に委託した。分析結果については、本文中「第Ⅳ章」に掲載している。尚、本書で使用している放射性炭素年代測定値については、加速器質量分析法による補正¹⁴C年代である。
13. 本書では、磁北と座標北の2種類の方位を使用している。(座標北を用いる場合のみG.Nと表示する。)

14. 標高は海拔絶対高である。
15. 本書に使用した記号は次のとおりである。
SB : 摺立柱建物跡 SC : 土坑（貯蔵穴も含む） SD : 土壇墓 SE : 槽状遺構 SZ : 土器集積遺構 P : ピット
16. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、図版と一致する。
17. 本書で使用した土層番号(ローマ数字で記載しているもの)については、「第8図基本土層図」の番号を使用している。
18. 土器の器種名について、本来であれば「壺形土器」「壺形土器」などのように「○○形土器」と表記すべきであるが、本書中では「壺」「壺」などのように略して表記している。
19. 本書の執筆と編集については今村が担当した。
20. 報告書作成にあたり、柴田博子先生(宮崎産業経営大学)から墨書き土器、堀田孝博氏(宮崎県埋蔵文化財センター)から古代～近世の遺物についてご助言・ご所見をいただき本文に利用させていただいている。また、下記の方々にもご助言・ご協力をいただいた。ここに厚く謝意を表する。今塙屋義行(宮崎県埋蔵文化財センター)、加賀淳一(都城市教育委員会)、竹中克繁(宮崎市教育委員会)、中村友昭(都城市教育委員会)、藤木聰(宮崎県埋蔵文化財センター) ※50音順 敬称略 所属は当時
21. 出土遺物その他諸記録は、清武町埋蔵文化財センターに保管している。
22. 観察表・計測表記凡例は下記のとおりである。
 - ・「文様及び調整」における部位の表現〔口：口縁部、頸：頸部、体：体部、胴：胴部、脚：脚部、高：高台部、底：底部（なお、残存している部位すべてが、同じ文様・調整の場合は部位名を記載していない。）〕
 - ・「残存部位」における口縁部～底部まで残存している資料の表現〔完形：残存率が100%の場合、ほぼ完形：残存率が90%以上100%未満の場合、口縁部～底部：残存率が90%未満の場合〕
 - ・観察表の「法量」において、括弧内に記載している数字は復元径の値である。
 - ・計測表の「法量」「重量」において、括弧内に記載している数字は残存値である。
 - ・遺構出土遺物のうち、「層位」の欄で空欄のものは搅乱坑から出土した資料もしくは表採資料である。
23. 図中表記凡例は下記のとおりである。
 - ・石器実測図中の網掛け範囲は、磨面を示す。
 - ・石器実測図(平面図)中の斜線は節理面、点描は自然面、黒のベタ塗りは新しい傷(ガジリ)を示す。
 - ・陶磁器実測図において、一点破線は釉薬のライン、二点破線は化粧土のラインを示す。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 五反畠遺跡周辺の環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査の概要と基本土層	
第1節 基本土層	7
第2節 調査の概要と方法	10
1 発掘調査の経過と概要	10
2 発掘調査の方法	10
3 整理作業の経過	10
第Ⅲ章 調査成果について	
第1節 繩文時代の成果について	13
1 遺構および遺構内出土遺物	13
2 遺構外出土遺物	14
第2節 弥生時代の成果について	18
第3節 古代～中世の成果について	20
1 遺構および遺構内出土遺物	20
2 遺構外出土遺物	53
第4節 近世以降の成果について	69
第5節 時期不明の遺構・遺物について	71
1 遺構	71
2 遺物	73
第Ⅳ章 自然科学分析	
第1節 五反畠遺跡A地区における放射性炭素年代測定	76
1 はじめに	76
2 試料と方法	76
3 測定結果	76
第2節 五反畠遺跡A地区における樹種同定	77
1 はじめに	77
2 試料	77
3 方法	77
4 結果	77
5 所見	78
第Ⅴ章 まとめ	
第1節 本調査区で確認された遺構の年代について	81
1 土師器	81
2 須恵器	82
3 旗軸陶磁器	83
4 黒色土器	83
5 各遺構の年代について（総括）	83
第2節 古代における五反畠遺跡A地区の位置付け	84
1 SE-13の性格について	84
2 古代における本調査区の利用変遷	84
3 古代における本調査区の位置付けについて	85
調査抄録	109

挿図目次

第1図 発掘調査前の状況①(北から) ······ 1	第41図 S E -13出土遺物実測図③ ······ 36
第2図 発掘調査前の状況②(西から) ······ 1	第42図 S E -13出土遺物実測図④ ······ 37
第3図 船引地区の石塔群(船引神社の北西) ··· 4	第43図 S E -13出土遺物実測図⑤ ······ 38
第4図 船引神楽 ······ 4	第44図 S E -13出土遺物実測図⑥ ······ 39
第5図 遺跡位置図 ······ 5	第45図 S E -13出土遺物実測図⑦ ······ 40
第6図 遺跡周辺地形図 ······ 6	第46図 S E -13出土遺物実測図⑧ ······ 41
第7図 表土除去後調査区削平状況図 ······ 7	第47図 S E -13出土遺物実測図⑨ ······ 42
第8図 基本土層図 ······ 8	第48図 S E -13出土遺物実測図⑩ ······ 43
第9図 基本土層(A地点) ······ 8	第49図 S E -13出土遺物実測図⑪ ······ 44
第10図 基本土層(C地点) ······ 8	第50図 S E -13出土遺物実測図⑫ ······ 45
第11図 グリッド間土層断面図 ······ 9	第51図 S E -3出土遺物実測図 ······ 46
第12図 グリッド図 ······ 11	第52図 S E -3~5平面図 ······ 47
第13図 トレンチ配置図 ······ 11	第53図 S E -3~5土層断面図 ······ 48
第14図 遺構配置図 ······ 12	第54図 S Z -2実測図 ······ 49
第15図 繩文時代遺構配置図 ······ 13	第55図 S Z -2出土遺物実測図① ······ 50
第16図 S C -11出土炭化種子(倍率任意) ··· 14	第56図 S Z -2出土遺物実測図② ······ 51
第17図 S C -11実測図 ······ 14	第57図 S Z -2出土遺物実測図③ ······ 52
第18図 S C -15実測図 ······ 15	第58図 S Z -2出土遺物実測図④ ······ 53
第19図 繩文時代遺物実測図① ······ 16	第59図 S Z -2出土遺物と包含層出土の 古代遺物との接合関係図 ······ 54
第20図 繩文時代遺物実測図② ······ 17	第60図 古代~中世遺構外出土遺物実測図① ··· 55
第21図 弥生時代遺物実測図 ······ 19	第61図 古代~中世遺構外出土遺物実測図② ··· 56
第22図 S B -7実測図 ······ 20	第62図 古代~中世遺構外出土遺物実測図③ ··· 57
第23図 S B -18・S B -19実測図 ······ 21	第63図 古代~中世遺構外出土遺物実測図④ ··· 58
第24図 挖立柱建物跡・ピット群出土遺物実測図 ··· 21	第64図 近世以降の遺物実測図① ······ 69
第25図 P -12実測図 ······ 21	第65図 近世以降の遺物実測図② ······ 70
第26図 古代~中世遺構配置図 ······ 22	第66図 時期不明の遺構配置図 ······ 71
第27図 SD-14実測図及び SD-14出土遺物実測図 ······ 23	第67図 S C -10実測図 ······ 71
第28図 S C -20・S C -21実測図及び S C -20・S C -21出土遺物実測図 ··· 24	第68図 S C -7・9・16・17実測図 ······ 72
第29図 S E -13実測図 ······ 25	第69図 時期不明の遺物実測図① ······ 73
第30図 S E -13遺物出土状況図① ······ 26	第70図 時期不明の遺物実測図② ······ 74
第31図 S E -13遺物出土状況図② ······ 27	第71図 発掘調査・整理作業風景 ······ 75
第32図 S E -13遺物出土状況図③ ······ 28	第72図 試料No. 3 S E -13 マツ属複管束亞属 ····· 79
第33図 S E -13土師器杯出土状況図 ······ 28	第73図 試料No. 2 S C -11 クリ ······ 79
第34図 S E -13遺物出土状況図④ ······ 29	第74図 試料No. 4 S C -15 ツブライ ······ 79
第35図 S E -13遺物出土状況図⑤ ······ 30	第75図 試料No. 1 S Z -2 コナラ属アガシ亞属 ····· 80
第36図 S E -13遺物出土状況図⑥ ······ 31	第76図 五反畠遺跡A地区遺構内出土土師器杯と周 辺遺跡遺構内出土土師器杯との法量比較 ····· 82
第37図 S E -13遺物出土状況図⑦ ······ 32	第77図 古代における五反畠遺跡A地区及び 上猪ノ原遺跡第4・5地区的様相 ······ 86
第38図 S E -13遺物出土状況図⑧ ······ 33	
第39図 S E -13出土遺物実測図① ······ 34	
第40図 S E -13出土遺物実測図② ······ 35	

図版目次

巻頭図版1 遺跡周辺の空中写真及び主な古代の遺物		
巻頭図版2 S E - 13, S Z - 2 遺物出土状況		
図版1 遠景及びアカホヤ上面完掘状況	88	
図版2 繩文時代の遺構①	89	
図版3 繩文時代の遺構②	90	
図版4 古代～中世の遺構①	91	
図版5 古代～中世の遺構②	92	
図版6 古代～中世の遺構③	93	
図版7 古代～中世の遺構④	94	
図版8 古代～中世の遺構⑤	95	
図版9 古代～中世の遺構⑥、時期不明の遺構	96	
図版10 繩文時代の遺物	97	
図版11 弥生土器、古代～中世の遺物①	98	
図版12 古代～中世の遺物②	99	
図版13 古代～中世の遺物③	100	
図版14 古代～中世の遺物④	101	
図版15 古代～中世の遺物⑤	102	
図版16 古代～中世の遺物⑥	103	
図版17 古代～中世の遺物⑦	104	
図版18 古代～中世の遺物⑧	105	
図版19 古代～中世の遺物⑨	106	
図版20 古代～中世の遺物⑩、近世の錢貨	107	
図版21 近世以降の陶磁器、時期不明の石器	108	

表目次

第1表 繩文土器観察表	17
第2表 繩文時代の石器計測表	17
第3表 弥生土器観察表	19
第4表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表①	58
第5表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表②	59
第6表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表③	60
第7表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表④	61
第8表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑤	62
第9表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑥	63
第10表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑦	64
第11表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑧	65
第12表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑨	66
第13表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑩	67
第14表 土製紡錘車観察表	68
第15表 繩の羽口観察表	68
第16表 用途不明粘土塊観察表	68
第17表 土鍾計測表	68
第18表 古代～中世の石器計測表	68
第19表 近世以降の陶磁器観察表	70
第20表 近世錢貨計測表	70
第21表 時期不明の石器計測表	75
第22表 五反畠遺跡における樹種同定結果	80
第23表 五反畠遺跡A地区で確認された遺構の年代とその根拠	83

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成17年度より実施されている県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、事業区に五反畠遺跡（A地区）の一部を含むことが宮崎県教育委員会文化課の試掘結果により明らかになった。遺跡の取り扱いについて、宮崎県中部農林振興局と慎重に協議を重ねた結果、清武町教育委員会が宮崎県中部農林振興局の委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成19年度（平成19年6月1日～平成19年10月18日）に行なわれた。調査面積は約1,370m²であった。

第2節 調査組織

五反畠遺跡A地区的調査組織は以下のとおりである。

調査主体：清武町教育委員会

発掘調査(平成19年度)

事務局	
教育長	神川 孝志
教育次長	小城 員久（～H.19.8）
生涯学習課長	児玉 秀樹（H.19.9～）
〃 課長補佐	落合 兼雄（～H.19.8）
〃 係長	長友 公春（H.19.9～）
〃 主任	窪田 清士（～H.19.8）
〃	内藤 和弘（H.19.9～）
〃	伊東 但
〃	井田 篤

調査員

生涯学習課主事	秋成 雅博
〃嘱託職員	今村 結記

整理作業(平成20・21年度)

事務局	
教育長	神川 孝志
教育次長	児玉 秀樹
生涯学習課長	日高 貞幸
〃 課長補佐	川越 健（H.21.4～）
〃 係長	伊東 但（～H.21.3）
〃 主査	井田 篤

調査員

生涯学習課主任	秋成 雅博
〃嘱託職員	今村 結記



第1図 発掘調査前の状況①（北から）



第2図 発掘調査前の状況②（西から）

第3節 五反畠遺跡周辺の環境

1 地理的環境

五反畠遺跡A地区は宮崎郡清武町大字船引字五反畠に所在し、標高約35～36mの河岸段丘上に位置している。清武町は、県内最大の宮崎平野の南端に位置し、宮崎市の南西に隣接している。宮崎平野の基盤にあたる地層は、「宮崎層群」と呼ばれているが、この地層は第三紀末期(700万年前)～第四紀初頭(150万年前)に九州山地から河川により運ばれた砂礫や泥が浅い海に堆積してきた地層である。

また、宮崎市から清武町にかけて分布する丘陵及び台地状の地形のうち大淀川より南の丘陵は大淀川南岸丘陵と呼ばれている。丘陵の高さは西方の高岡山地から東へ向かってだいに低くなり、標高約100mの平坦な台地状地形に変わる。本遺跡上段に存在する船引台地も大淀川南岸丘陵の一部を形成している。

本遺跡西側には清武川が流れている。清川両岸には段丘地形が顕著に発達している。この段丘地形は宮崎平野が第四紀洪新世に数次の隆起をくり返した結果、形成されたものである。清川両岸の段丘崖には礫層が露出しているが、これは旧河床や氾濫源に堆積した砂礫が、地盤の隆起により崖に現れたものである。

なお、本遺跡の北側の崖面には湧水点が数多く点在しており、遺跡が立地する上で好条件の一つであったと考えられる。

2 歴史的環境

本項では、五反畠遺跡A地区が所在する清武町船引地区及び周辺地域の各時代の様相について、概観していく。

【旧石器時代】

周辺地域の成果から始良・丹沢火山灰層上位の包含層中において、ナイフ形石器文化期と細石器文化期、大きく二つの文化層の存在が確認できる。

当時期の注目すべき遺跡として下猪ノ原遺跡第1地区が挙げられる。下猪ノ原遺跡第1地区では槍先形尖頭器や国府型ナイフ形石器のほか、数点の角錐状石器や敲石、500点以上の剥片・碎片を含む角錐状石器の製作跡と考えられるブロックが確認されている。

【縄文時代】

草創期の遺構・遺物が確認された遺跡として椎屋形第1遺跡が県内の代表的な遺跡として知られている。また、清武上猪ノ原遺跡第5地区では当概期の住居跡が14基確認されたほか、典型的な例としては九州初となる矢柄研磨器も出土したことなどで注目されている。早期の遺構・遺物は周辺のほとんどの遺跡で確認されているが、特に集石遺構に関しては椎屋形第2遺跡で69基、山田第1遺跡で71基、清武上猪ノ原遺跡第2地区で92基、清武上猪ノ原遺跡第5地区で147基など数多く検出されており、周辺遺跡全体では1000基を上回る数が確認されている。集石遺構のほか炉穴や陥し穴も確認されており、坂元遺跡や下猪ノ原遺跡第2地区などで確認されている埋設土器も注目される遺構として挙げられる。前期で注目される遺跡として、轟B式土器、野口・阿多タイブ、曾畠式土器が多く出土した滑川第1遺跡、中期で注目される遺跡として春日式期～大平式期の堅穴式住居跡が確認された上の原第1遺跡が挙げられる。しかし、早期と比較すると遺跡の数は激減し、その規模も縮小する。後期になると上の原第3遺跡で47軒、竹ノ内遺跡で51軒の堅穴式住居跡が確認されており、前段階に比べ遺跡の規模が拡大していることが窺える。また、竹ノ内遺跡では軽石製岩偶や土偶も出土しており、当時の精神文化の一端を垣間見ることができる。晩期は白ヶ野第2遺跡などで孔列文土器や黒色磨研土器が出土しているが、再び遺跡の数が減少し、規模も縮小する。上記のような遺跡数や遺跡の規模の変化は本遺跡の周辺だけではなく、宮崎平野全城を見ても同様な状況が窺える。

【弥生時代】

当概期の注目される遺跡として、滑川第2遺跡と椎屋形第1遺跡、下猪ノ原遺跡第1地区が挙げられる。滑川第2遺跡で出土した前期末～中期初頭の刻目突窓土器は、宮崎県下でも出土例がさほど多くなく、包含層中ではあるものの一定量出土していることから注目される資料である。椎屋形第1遺跡では中期後半～末頃の多様な遺構が検出された。堅穴式住居跡は円形や方形プランの住居、花弁状住居、発展松菊里型住居など多様な住居跡が19軒確認されている。また、掘立柱建物跡も6軒確認されており、うち

4軒が独立棟持柱を有する。さらには、箱式破碎土器棺墓も検出されている。下猪ノ原遺跡第1地区では終末期の土壙墓が4基検出されており、うち1基からは鉄鎌が出土している。

周辺遺跡の傾向としては、中期後半以降の時期には一定量の遺跡が確認されているが、それ以前の時期の遺跡はほとんど確認されていない状況が窺える。

【古墳時代】

本遺跡周辺では現在高塚古墳は確認されていない。近隣の高塚古墳となると前期の古墳群で宮崎平野南部、最初の盟主墳と考えられる権1号墳を含む宮崎市権古墳群、前期～中期初頭、中期末の前方後円墳をもつ宮崎市生目古墳群、後期を中心に営まれた宮崎市下北方古墳群、宮崎市木花古墳群などが挙げられる。高塚古墳群以外の墓制に目を向けてみると周辺地域では唯一五反畝遺跡B地区¹¹で木棺墓、石棺墓、地下式横穴墓が確認されているのみである。

住居跡は山田第1遺跡で前期後半の竪穴式住居跡が1軒、上の原第3遺跡で中期後半の竪穴式住居跡が10軒、権現原第1遺跡で中期後半の竪穴式住居跡が1軒確認されている。しかし、全体的に当時期に該当する遺跡数はさほど多くない。また、その他の遺構として上の原第1遺跡で確認された布留系の甕形土器を伴う土器埋納遺構が注目される。

【古代】

清武町内を通る官道として、広田駅へ球磨駅に至るルートがある。球磨駅は現在の宮崎市熊野に当てる説と清武町査掛に当てる説がある。また、『長門本平家物語』によれば、日向灘を海路南下してきた藤原成経・俊寛らは「日向の国あや部の港わかの津」に上陸し「鉄輪三足のさか(かなは坂)」を上り、「室野」「船引」「大山」を経由して「日向国西方が島津の庄」に到着したとある。「かなは坂」の「かなは」は現在の清武町加納に、「船引」は現在の清武町船引に当たるとされている。この藤原成経・俊寛らの通ったルートが駅路を踏襲したものかどうかは分からず、駅路だと仮定すれば「船引」を経由して球磨駅の比定地の一つである現在の清武町査掛へ通るルートが自然であり、駅路も現在の国道269号線に近いルートが予想される。

発掘調査の成果としては、墨書き土器や巻付き竪穴式住居跡が確認された白ヶ野第2遺跡、掘立柱建物跡が6軒確認された清武上猪ノ原遺跡第1地区などが挙げられる。本遺跡周辺で確認されている古代の遺跡は9～10世紀代のものがほとんどである。その他の時期の資料は確認されていない。

【中・近世】

本遺跡の所在する船引地区は、建久8年(1197)に作成された『建久の団田帳』によると古代末～中世には宇佐神宮別当寺弥勒寺領であったことが理解できる。ただし、船引地区が弥勒寺領となった時期については不明である。その後承久2年(1220)までは石清水八幡宮領、室町・戦国期になると伊東氏の領地となり、江戸時代初期には幕府領(天領)となっている。

伊東氏48城の一つとして知られている清武城は、南北朝期に伊東氏と関係の深い清武氏が築城したとされる。延文6年(1361)6月29日付の『一色範感謝状』では「清滝城」という文字が出てくるがおそらく清武城を指しているものと推測される。文明17年(1485)には伊東祐国と祐昌の飫肥城攻めの後詰めとして伊東祐堯が入り、当城で死去している。永禄年間には長倉伴九郎、上別府宮内少輔が清武地頭として当城に在城していた。元亀3年(1572)の木崎原の合戦で伊東氏が島津氏に敗れると、当城には伊集院久宣が入ったが、天正15年(1587)の豊臣秀吉の九州征伐の功により、再び伊東氏の所領となつた。また、関ヶ原合戦にはいわゆる「稻津騒動」が起こり、当城主であった稻津掃部助が宮崎城を攻めたことにより裁きを受け、当城で誅されている。

清武城跡は発掘調査が行なわれておらず、掘立柱建物跡や通路に伴う石積み列、溝状遺構などが検出され、輸入陶磁器なども出土している。

なお、近世飫肥藩の家老であった平部嶺南が編纂した『日向地誌』によれば、近世の船引地区には常妙寺や神宮寺などの寺院が5つ存在していたとされている。現在でも、船引地区には五輪塔や板碑などを含む石塔群が多数存在しており(第3図)、当時の様子を忍ばせている。

発掘調査の成果としては、上の原遺跡第2地区の成果が挙げられる。近世を主体とする時期の掘立柱建物跡や土壙墓、五輪塔や板碑で構成される集落が確認されており、肥前系などの陶磁器類も多数出土している。

【近・現代】

明治維新後は船引村として清武郡治所の管轄下となり、明治24(1891)年には清武村、昭和25(1950)年には清武町の一地区として現在も発展を続けている。また江戸時代の中期には定着していた「船引神楽」(第4図)は、主に稲作豊穰と子孫繁栄を祈願して春(春分の日)に奉納される作祈祷神楽であり、数多くの番数が今も尚伝承されていることから、県の無形民俗文化財に指定されている。

【第1章 注釈】

1) 五反原遺跡B地区は清武町教育委員会が平成19~20年度に調査を行なっており、報告書は年度刊行予定である。

【第1章 引用・参考文献】

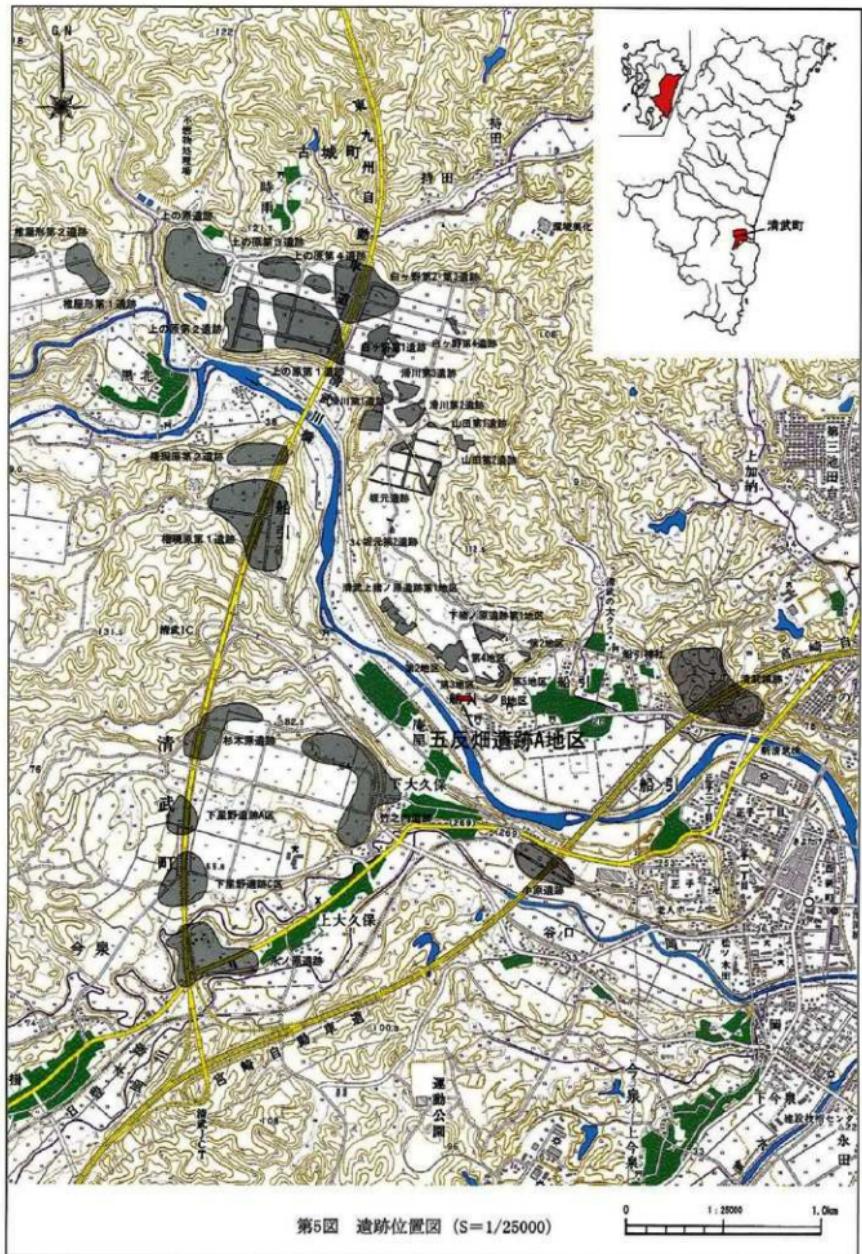
- 秋成雅博 2009 『清武上猪ノ原遺跡第5地区』清武町埋蔵文化財調査報告書 第27集 清武町教育委員会
秋成雅博・今村結記・若杉知和 2006 『上猪ノ原遺跡第5地区』清武町埋蔵文化財調査報告書 第19集 清武町教育委員会
秋成雅博・富田卓見 2004 『上猪ノ原遺跡-3- 下猪ノ原遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書 第14集 清武町教育委員会
石川恒太郎・面高哲郎 1979 「VI. 清武町の歴史的概観」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』 宮崎県教育委員会
井田篤・秋成雅博 2006 『坂元遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書 第15集 清武町教育委員会
井田篤・秋成雅博 2006 『上猪ノ原遺跡-4- 下猪ノ原遺跡-2-』清武町埋蔵文化財調査報告書 第17集 清武町教育委員会
井田篤・秋成雅博 2009 『清武上猪ノ原遺跡-2-』清武町埋蔵文化財調査報告書 第26集 清武町教育委員会
井田篤・秋成雅博・今村結記 2006 『山田第1遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書 第18集 清武町教育委員会
井田篤・秋成雅博・今村結記 2006 『滑川第1遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書 第21集 清武町教育委員会
井田篤・秋成雅博・今村結記 2007 『滑川第2遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書 第22集 清武町教育委員会
伊東組 1990 『清武町遺跡詳細分布調査報告書』清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集 清武町教育委員会
金九武司 2007 『宮崎県田野盆地における縄文遺跡の変遷』『南九州縄文通信』No.18 南九州縄文研究会
菅付和樹・重山郁子 1996 『椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡』 宮崎県教育委員会
高山富雄・山田洋一郎 2000 『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第27集 宮崎県埋蔵文化財センター
竹中克第 2003 「3. 南部平野部の古墳と古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』第29回九州古墳時代研究会資料集 九州古墳時代研究会
島原孝仙 2001 「椎原第1遺跡 下星野遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第47集 宮崎県埋蔵文化財センター
水山修一 1999 「特論1 日向国の官道』『宮崎県史 通史編 古代2』 宮崎県
早田努 1997 「第一節 県内の地形と地質』『宮崎県史 通史編 原始・古代1』 宮崎県
東嶽草 1999 『上の原第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第13集 宮崎県埋蔵文化財センター
山口隼正 1999 「— 土持氏の動向』『宮崎県史 通史編 中世』 宮崎県
吉本正典 2000 『上の原第2遺跡 上の原第1遺跡 上の原第4遺跡 白ヶ野第3遺跡A地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第25集 宮崎県埋蔵文化財センター
吉本正典(編) 1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II解説編』 宮崎県教育委員会

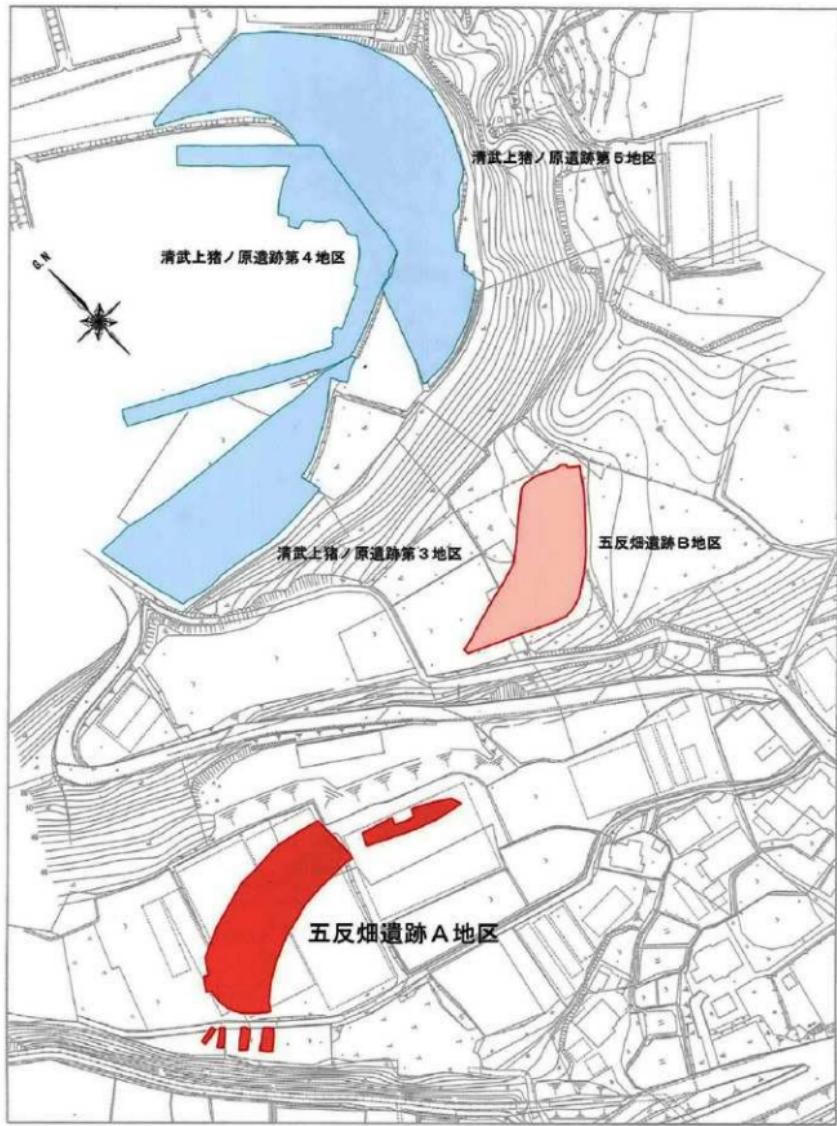


第3図 船引地区の石塔群(船引神社の北西)



第4図 船引神楽





第6図 遺跡周辺地形図 (S=1/1500)

第Ⅱ章 調査の概要と基本土層

第1節 基本土層

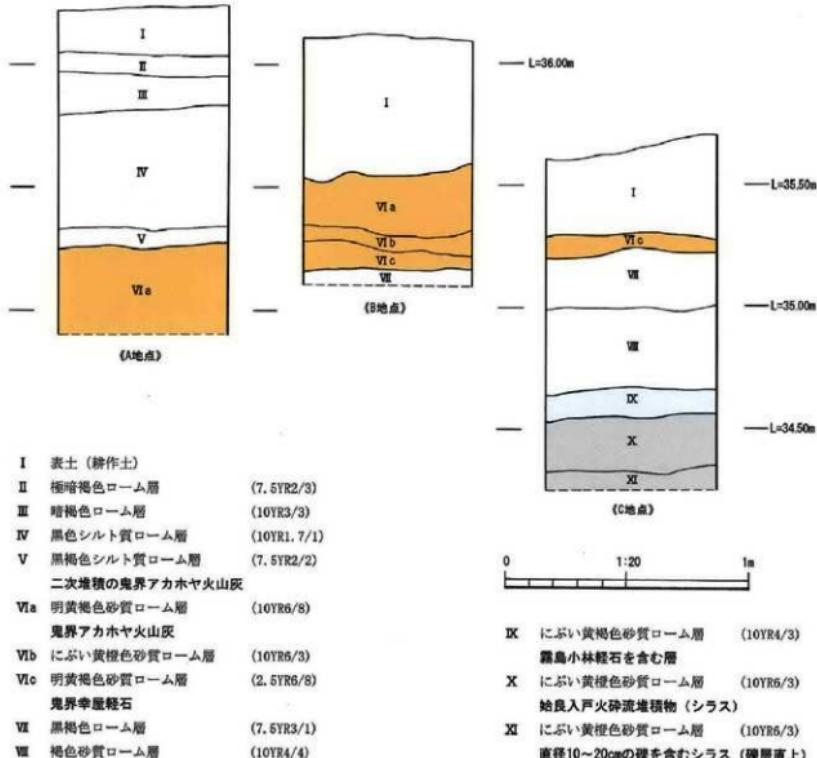
五反畠遺跡A地区における基本的な土層はI～XII層までの13枚の層に分層された(第8図)。土層中にはアカホヤ火山灰層(VI層)、始良入戸火砕流堆積物(X・XI層)等、広域火山灰が堆積しており、およその年代を推測することができる。霧島小林軽石層については、始良入戸火砕流堆積物に混ざって堆積しており(IX層)、これまで多くの調査が行なわれてきた船引台地とは異なる堆積状況であった。

遺物包含層はII～IV層であり、縄文時代後期～近世までの遺物が出土した。アカホヤ火山灰層下位からは石器が1点出土したのみであった。また、調査区は最近まで耕作地であったためか、遺物包含層であるII～IV層は一部削平を受けており、調査区西側と東側には残っていないかった(第7図)。

なお、現在調査区はほぼ平坦な地形であるが、アカホヤ上面における測量結果(第14図)及びグリッド間の土層堆積状況(第11図)からアカホヤ火山灰降下直後の旧地形を復元すると、南側へ緩やかに下るもののはほぼ平坦な地形であったものと推測され、今まで大きな地形の変化は起きていないものと考えられる。



第7図 表土除去後調査区削平状況図 (S=1/600)



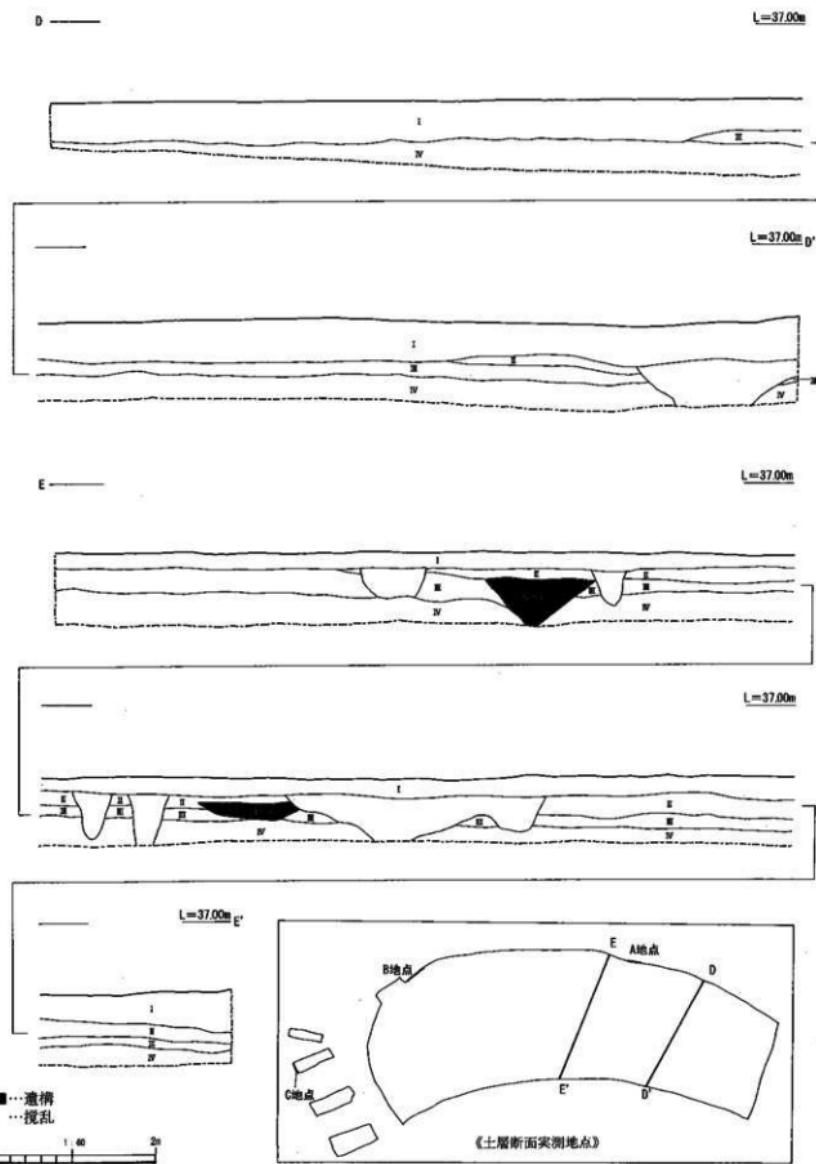
第8図 基本土層図 (S=1/20)



第9図 基本土層 (A地点)



第10図 基本土層 (C地点)



第11図 グリッド間土層断面図 ($S=1/60$)

第2節 調査の概要と方法

1 発掘調査の経過と概要

発掘調査は平成19年6月1日～10月18日まで行なわれた。6月1日に調査区内の草刈など発掘調査への準備を済ませたあと、6月4日より本格的な調査を開始した。まず、調査区内の土層確認及び遺物の堆積状況を知るために先行トレンチを4本設定し、掘り下げを行なった(第13図)。その結果、アカホヤ火山灰層より上層の褐色土(Ⅱ・Ⅲ層)から古代を中心とした遺物が多量に出土したほか、溝状遺構や土器集積遺構が検出された。また、先行トレンチの掘り下げと並行して基準杭の設定、レベル移動及びグリッドの設定を行なった。なお、各グリッドの名前は第12図のとおりである。

先行トレンチの調査結果を参考に6月20日よりグリッドA・B区の調査、7月19日よりC区の調査、9月3日よりD・E区の調査、9月20日よりF区の調査を行なった。本来であれば調査区全面を同時に調査するべきであるが、排土置場が狭かつたため1つないしは2つのグリッドごと調査を進めていく方法をとった。

調査の結果、先行トレンチ同様Ⅱ・Ⅲ層を中心に古代を主体とした遺物が多量に出土した。また、遺構の検出作業についてはⅡ・Ⅲ層及びアカホヤ火山灰層(VI層)上面で行なった。その結果、調査区全体で掘立柱建物跡3棟、土墻基1基、土坑9基、溝状遺構4条、土器集積遺構1基が確認された(第14図)。アカホヤ火山灰層上面での調査が終了後、縄文時代早期以前の文化層確認のため、トレンチ調査によるアカホヤ火山灰層下位の調査を行なった(第13図)。しかし、縄文時代早期に属する石器が1点確認されたのみで、遺構も検出されなかった。また、散縄も確認できたが集石遺構に伴うような被熱を受け赤化した縄ではなく、自然堆積したと思われる疊であった。おそらく、近隣斜面の礫層に起因するものであろう。

10月16日に全ての調査を終了し、調査区の埋め戻しが完了した10月18日をもって本調査区の発掘調査に関する全ての業務を終了した。

2 発掘調査の方法

本調査区における調査方法は下記のとおりである。

表 土 等 の 剥 ぎ 取 り : グリッドA～C区・F区は人力により掘り下げ、D・E区は調査員の指示のもと重機を使用して実施した。

基 準 杭 の 設 定 :すべて調査員が行なった。

遺 物 包 含 層 の 堀 り 下 げ 作 業 :主にジョレン・ねじり鎌で行なった。包含層中に存在する遺構の検出作業も兼ねているので、一枚一枚包含層を剥ぐ意識を作業員に徹底させ丁寧に行なった。

遺 構 実 測 :測定のサイズに応じて1/10または1/20で作図した。
遺 構 量 測 :光波測量器及びデータコレクタを使用し、現場でデータを収集した後、清武町埋蔵文化財センターにおいてAUTOCADを利用してデジタルデータとして整理・管理した。

写 真 摂 影 :6×9版モノクロ・リバーサル、35mmモノクロ・リバーサル写真を併用して行なった。

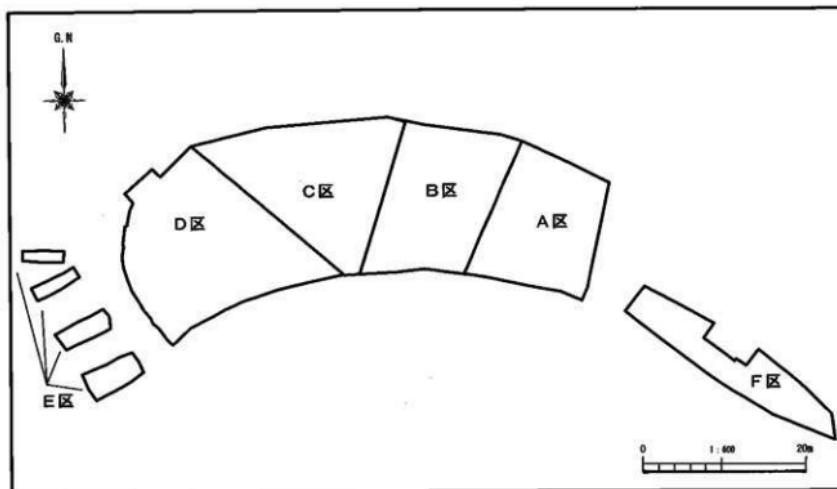
3 整理作業の経過

調査が進み、取り上げた遺物が増加したため、調査に並行して清武町埋蔵文化財センターにおいて整理作業を行なうこととなった。

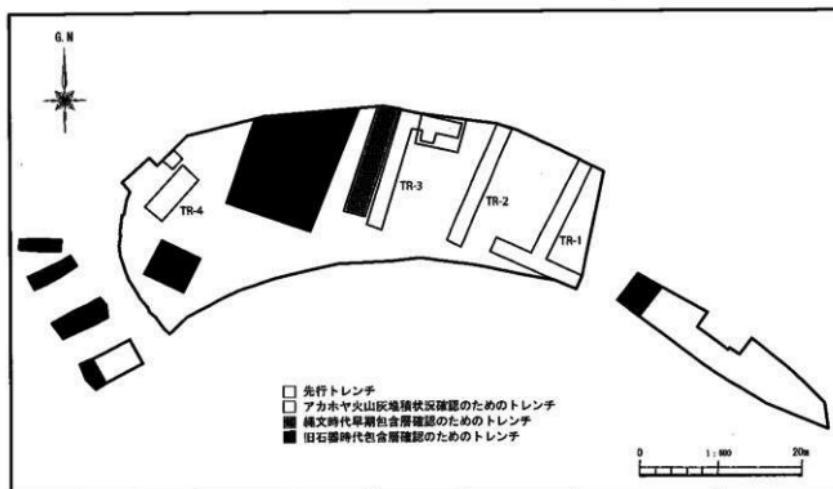
まず、平成19年9月10日～平成19年11月26日まで出土遺物の水洗洗浄および遺物注記作業を行ない、平成19年11月27日～平成20年5月23日、平成20年6月17日～平成20年8月28日まで遺物の接合・復元作業を行なった。これらの作業は調査員の指導のもと整理作業員が行なった。

次に平成20年8月26日～平成21年1月8日まで遺物の実測作業を行なった。実測作業は調査員のほか、調査員の指導のもと整理作業員が行なった。なお、石器実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。製図作業は平成20年6月5日～平成20年8月4日、平成20年12月1日～平成21年2月5日まで行なった。製図作業は調査員の指導のもと整理作業員が行なった。

その後、本文作成、レイアウト、表作成、遺物写真撮影などの業務を整理作業員の補助を得ながら調査員が行ない、今回の報告書刊行に至った。



第12図 グリッド図 (S=1/600)



第13図 トレンチ配置図 (S=1/600)



第14図 遺構配置図 (S=1/400)

第Ⅲ章 調査成果について

第1節 繩文時代の成果について

1 遺構および遺構内出土遺物

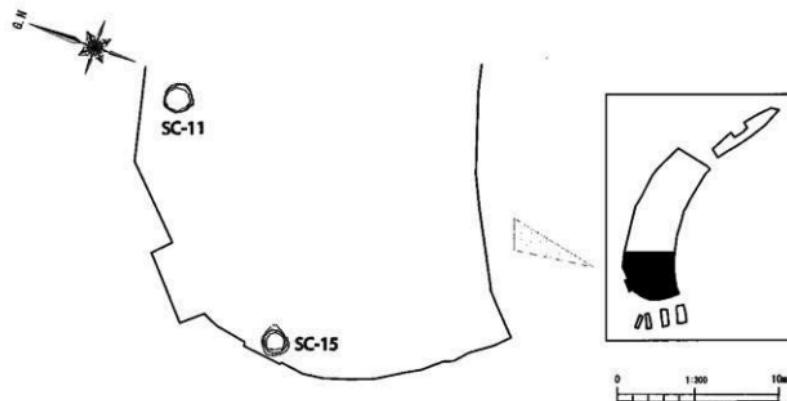
繩文時代に該当する遺構は貯蔵穴と考えられる土坑が2基確認された(第15図)。以下に各遺構の詳細について述べていくこととする。

【SC-11】(第17図)

SC-11はグリッドC区、調査区の北西部に位置する。VI層上面において検出された。平面形態は不整円形、断面形態は袋状を呈する。床面はほぼフラットである。規模は長軸1.86m、短軸1.78m、検出面から床面までの深さは1.16mである。平常時、床面および床面近くの壁面から水が湧き、床面から約15cm程度の深さまで水が溜まる。

埋土の堆積状況は、まず霧島小林輕石層の崩落土(もしくは整地層か?)が堆積したのちに、黒色の粘質土が堆積している。調査時この黒色の粘質土層から有機物を確認することはできなかったが、この黒色の粘質土層が腐植土層である可能性は否定できない。本遺構の断面形態と床面からの湧水状況、腐植土の可能性がある黒色の粘質土の存在からSC-11は貯蔵穴であった可能性が高いものと思われる。その後、3度の砂粒の流れ込みが確認できるが、そのうち2度目までは砂層の上に炭化物を伴う黒色の粘質土が存在する。つまり、2度目の砂層の堆積後までは貯蔵穴として利用されていたものと推測されるが、3度目の砂層の堆積以後は貯蔵穴として利用されなくなり廃棄に至ったものと思われる。なお、第16図は埋土中位において出土した炭化種子である。樹種同定を行なっていないため、詳細は不明である。第16図で示している炭化種子ではないが、同じく埋土中位から出土した炭化材を樹種同定及び放射性炭素年代測定の分析にかけた。その結果、分析した炭化材はクリであり、 3160 ± 40 年B.P.という年代値が得られている。

埋土中からは数点の繩文土器片の出土があった。第19図1~3がSC-11より出土した遺物である。1は口縁部片である。ナデ調整で外面に沈線文を施す。2・3は胴部片である。2はナデ調整で外面に沈線文を施す。3は条痕調整で外面に沈線文を施す。



第15図 繩文時代遺構配置図 (S=1/300)

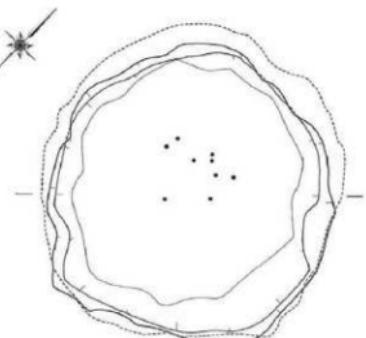
【SC-15】 (第18図)

SC-15はグリッドD区、調査区の西部に位置する。VI層上面において検出された。平面形態は不整円形、断面形態は袋状に近い箱形を呈する。床面は中央がやや陥る。規模は長軸1.75m、短軸1.64m、検出面から床面までの深さは1.50mである。平當時は水が湧かないものの、雨天直後は北側壁面より水が染み出していた。

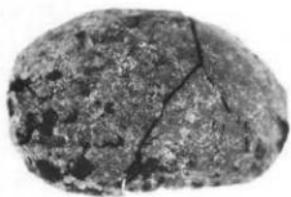
本遺構の形態はSC-11に類似するが、土層堆積状況を比較するとSC-11のように黒色の粘土質土が発達しておらず、炭化物の量も少ない。そのため、本遺構の性格についてSC-11同様貯蔵穴と位置付けるには、やや根拠に乏しい印象を受ける。なお、埋土中位から出土した炭化材を樹種同定及び放射性炭素年代測定の分析にかけた。その結果、分析した炭化材はツブライジであり、 3190 ± 40 年BPという年代値が得られている。

2 遺構外出土遺物 (第19・20図)

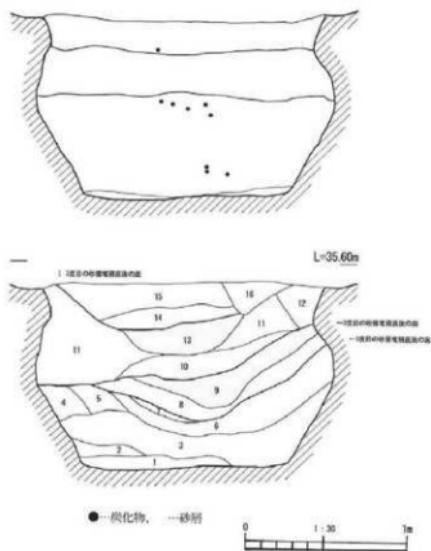
縄文時代の遺物はIII～IV層から出土した。しかし、その量はさほど多くはない。なお、古代の遺構に混入していた縄文土器片もここで紹介することとする。



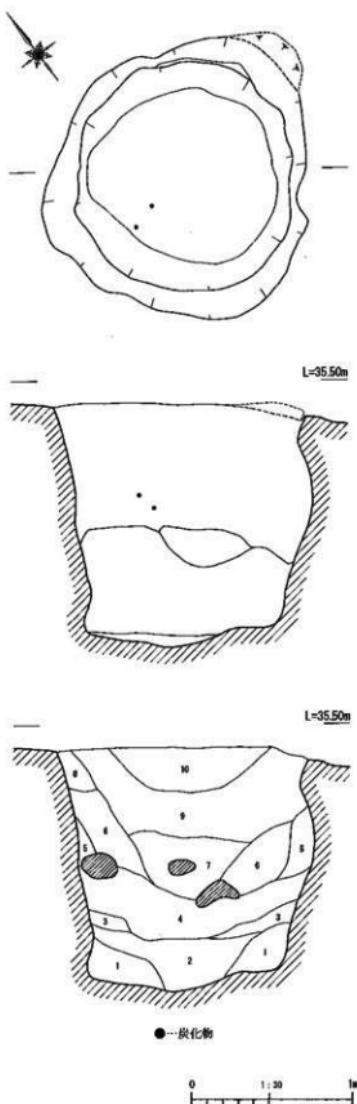
L=35.60m



第16図 SC-11出土炭化種子 (倍率任意)



第17図 SC-11実測図 (S=1/30)



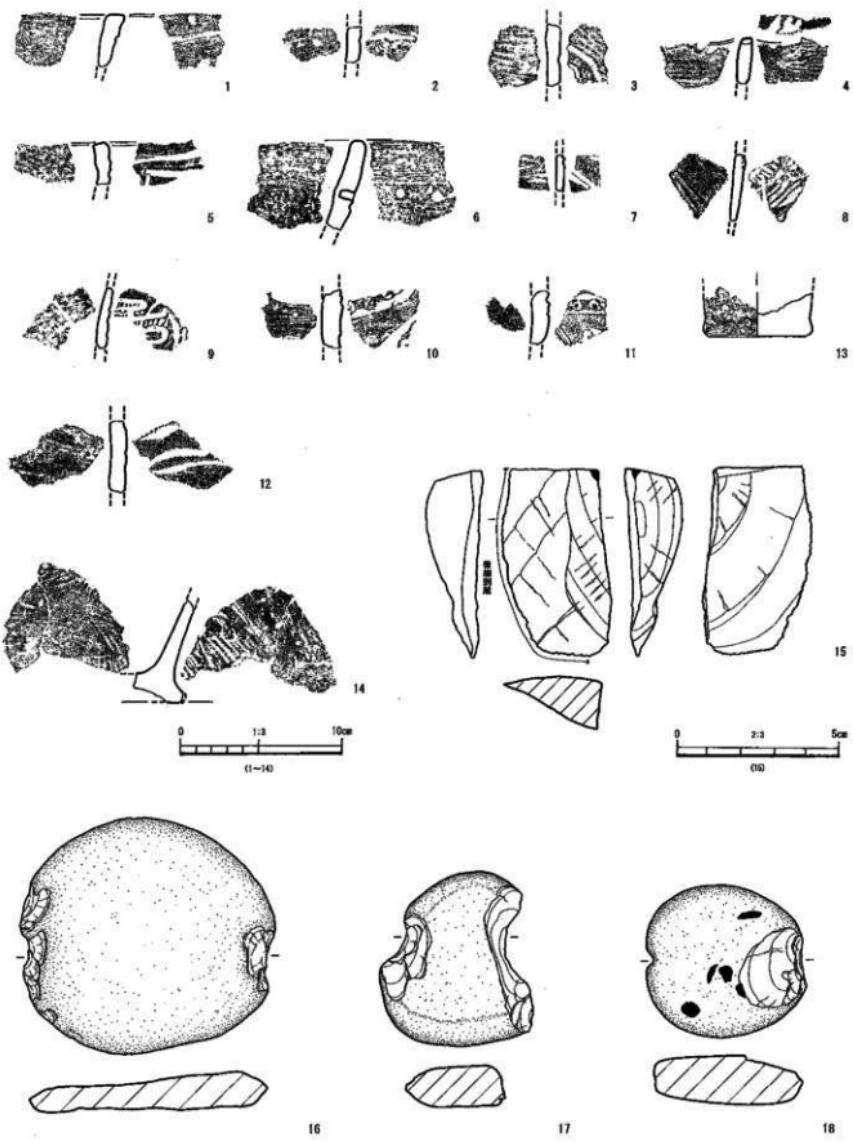
土器 (4~14) 4・5・6は口縁部片である。4は波状口縁と思われ、その頂部に刻目が施される。5は靴形文と思われる文様が施される。6は孔列文土器である。7~11は胴部片である。7は撚糸文と沈線で文様を施す。8は外面に刻みをついた隆起線を貼り付けている。9は沈線で区画された範囲にヘラ状工具による刺突文を充填している。10・11は沈線で区画された範囲に竹管状工具による刺突文を充填している。13・14は底部片である。13は内外面ともナデ調整である。14は内外面とも条痕調整で端部が大きく張り出す。

石器 (15~19) 15はスクレイパーである。剥片をそのまま使用したものである。左側縁部には微細剥離が確認できる。出土した層位から縄文時代早期のものと考えられる。16~18は石錘である。いずれも砂岩の円礫を素材とする。16・17は相対する二箇所に数回の加撃を行ない、抉りを作出している。18は右側縁部を加撃により抉りを作出している。これに相対する位置は切目状を呈する。しかし、人為的なものか、もともとこのような形状だったのかは判断できなかった。18は弥生時代~古代の遺物がほとんど出土しなくなるIV層からの出土であることから縄文時代の遺物である可能性が高いと思われる。16・17は搅乱坑からの出土ではあるが、他の時期に該当する石錘が出土していないことから18に近い時期ではないかと考えている。19は石斧である。刃部を欠損する。敲打及び研磨によって全体を整えている。

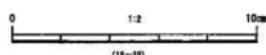
SC-15土層注記

1. にぶい黄褐色粘土質ローム (10YR6/3) しまり良し。直層のブロックを含む。
2. 棕褐色シルト質ローム (10YR4/6) しまりやや良し。直層とシラスの混生層。
3. 棕褐色シルト質ローム (10YR3/4) しまりやや良し。シラスブロックを少量含む。
4. 棕褐色シルト質ローム (10YR3/3) アカホヤ (以下、Ah) 、直層、直層、シラスブロックの混生層。
5. 棕褐色シルト質ローム (7.5YR3/3) しまり良し。直層ブロック、シラスブロックを多く含む。
6. 黒褐色ローム (7.5YR2/2) しまり良し。Ah粒、炭化物を微量含む。
7. 棕褐色ローム (7.5YR2/3) しまり良し。Ah粒、炭化物を微量含む。
8. 黑褐色シルト質ローム (7.5YR2/2) しまり良し。Ahブロックを多く含む。
9. 黑褐色ローム (10YR2/2) しまり良し。Ah粒、炭化粒を微量含む。
10. 黑褐色ローム (7.5YR3/2) しまり良し。Ah粒、炭化粒を微量含む。直層ブロックを少量含む。

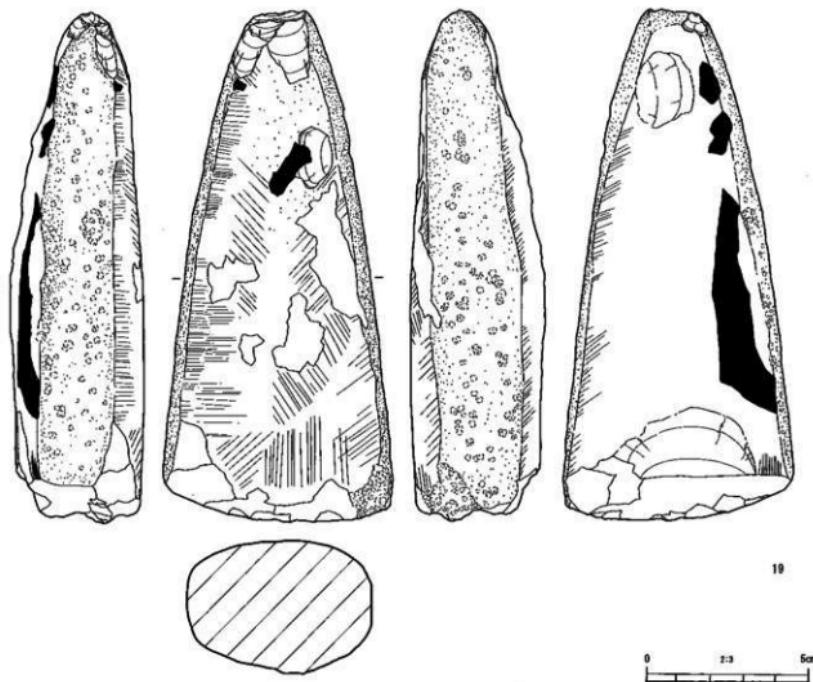
第18図 SC-15実測図 (S=1/30)



1~3 : SC-11
4~18 : 遺構外出上遺物



第19図 縄文時代遺物実測図① (S=1/3、2/3、1/2)



第20図 縄文時代遺物実測図② (S=2/3)

第1表 縄文土器観察表

報告書番号	器種	保存状況	出土地名	層位	色調		文様及び網目						出土 地點・小標	参考 文献	
					外縁	内面	外縁	内面	内縁	外縁	内縁	内縁	外縁		
1	縄縦	口跡有	SC-21		に伝い矢張り(1975/6)	灰褐色(1975/6)	ナメ・縦縞文	ナメ	口					□1m6LT	447
2	縄縦	無跡	SC-21		に伝い矢張り(1975/6)	灰褐色(1975/6)	ナメ・縦縞文	ナメ	口					□1m6LT	448
3	縄縦	無跡	SC-21		に伝い矢張り(1975/6)	灰褐色(1975/6)	貝腰毛条文のナメ・縦縞文	貝腰毛条文	口					□1m6LT	449
4	縄縦	口跡有	SC-22		灰褐色(1975/6)	灰褐色(1975/6)	貝腰毛条文・波紋文	貝腰毛条文	口	口				山形県に野村、既 出土壤文テテ	283
5	縄縦	口跡有	SC-22		灰褐色(1975/6)	灰褐色(1975/6)	波紋文	ナメ	口	口				□1m6LT	294
6	縄縦	口跡有	SC-22		灰褐色(1975/6)	灰褐色(1975/6)	ナメ・丸神文	ナメ	口					□1m6LT	295
7	縄縦	縫合	SC-22		に伝い縫(1975/6)	灰褐色(1975/6)	波紋文・縫合文	貝腰毛条文	口	口				□1m6LT	296
8	縄縦	縫合	SC-22	底	に伝い縫(1975/6)	灰褐色(1975/6)	縫合文(縫目)・貝腰毛条文	貝腰毛条文	口	口				□1m6LT	297
9	縄縦	縫合	SC-22		に伝い縫(1975/6)	灰褐色(1975/6)	波紋文・縫合文	ナメ	口	口				□1m6LT	298
10	縄縦	縫合	SC-22		に伝い縫(1975/6)	灰褐色(1975/6)	波紋文・縫合文(打穿孔工具)	貝腰毛条文	口	口				□1m6LT	299
11	縄縦	縫合	SC-22		に伝い縫(1975/6)	灰褐色(1975/6)	波紋文・縫合文(打穿孔工具)	ナメ	口					□1m6LT	300
12	縄縦	縫合	SC-22	底	に伝い縫(1975/6)	に伝い縫(1975/6)	波紋文	貝腰毛条文	口					□1m6LT	301
13	縄縦	縫合	SC-22		に伝い縫(1975/6)	-	ナメ	-	口	口				□1m6LT	302
14	縄縦一底折	口跡有	SC-23		に伝い矢張り(1975/6)	に伝い矢張り(1975/6)	貝腰毛条文	ナメ	貝腰毛条文	口	口			□1m6LT	303

記号上に記される数値の値を表の記号で示す。△—波紋、□—縫合、○—口縁、◎—多角

第2表 縄文時代の石器計測表

報告書番号	器種	出土地名	層位	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考	参考文献
					最大径	最小径	最大幅			
15	スクライバー	DK	VII	砂岩	5.5	3.4	1.7	26.1		142
16	心型	DK	Ⅵ	砂岩	9.7	16.6	1.6	249.0		161
17	石刀	DK	Ⅵ	砂岩	7.2	6.4	1.7	106.7		162
18	石刀	DK	IV	砂岩	6.3	6.5	2.0	126.7		163
19	石刀	DK	Ⅵ	砂岩	10.7	17.6	4.1	(866.6)	刀根大頭	164

第2節 弥生時代の成果について

弥生時代に該当する遺構は確認されなかった。遺物についてはⅡ～Ⅲ層にかけて数点出土したが、出土量はあまり多くなかった。遺物はⅡ～Ⅲ層が残存しているグリッドのうち、B・C区から出土した。以下、本調査区において出土した弥生時代の遺物について説明する（第21図）。なお、古代の遺構に混入していた弥生時代の遺物についても本節で紹介することとする。

壺（20～26）

20・21は口縁部～胸部まで残存する土器片である。いずれも頸部で「く」の字状に屈曲し、外反して立ち上がる。口唇部形態はいずれも平坦である。口縁部の長大化が顕著でないこととあわせて考えると弥生時代後期～終末期に該当するものと考えられる。20の外面調整は口縁部がヨコナデ、頸部～胸部が斜位のハケ目である。内面調整は、磨耗のため不明である。外面にはススが付着している。胎土には小礫が多く含まれている。21の調整は内外面とも磨耗のため不明である。外面にはススが付着している。胎土には小礫が多く含まれ、石英が微量含まれている。22～24は胸部片である。いずれも断面三角形の刻目突帯文を貼り付けたものであり、弥生時代中期後半～後期前葉に位置付けられる中溝式土器に該当するものと考えられる。22・23の刻目はヘラ状工具によるものである。24の刻目は布状のものを巻いた原体の押圧によるものと思われ、刻目部分には組織痕が確認できる。22の調整は内外面とも磨耗のため不明である。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれている。23の外面調整はナデ及び斜位のハケ目である。内面調整はナデと思われるが磨耗のため断定はできない。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれている。24の外面調整はナデである。内面調整は斜位のハケ目である。外面にはススが付着している。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれている。25・26は底部片である。25は平底の充実した脚台を有する。弥生時代中期前葉～中葉頃に位置付けられる入来式系の土器と考えられる。調整は内外面ともナデである。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれている。26は小さな上げ底で端部がわずかに張り出す。弥生時代中期後半～終末期頃に該当するものと考えられる。調整は内外面ともナデである。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれ、わずかながら金色の雲母片も含まれている。

壺（27～31）

27は口縁部～胸部まで残存する土器片である。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部がわずかに外反して立ち上がる。口唇部形態は平坦である。調整は内外面ともナデである。胎土には小礫が含まれている。28～31は底部片である。底部形態は28がやや上げ底で底部から胸部へ緩やかに湾曲して立ち上がる形態のもの、29・30が平底で底部から胸部へスムーズに立ち上がる形態のもの、31が平底で端部がわずかに張り出す形態のものである。28の外面調整は縦位のミガキである。内面調整は斜位のミガキである。胎土には石英・角閃石・小礫が含まれている。29の調整は内外面ともナデである。胎土には小礫が含まれている。30の外面調整は胸部が縦位のハケ目、底部がナデである。内面調整は横位および縦位のハケ目である。胎土には小礫が多く含まれている。31の外面調整は胸部が斜位のハケ目及びナデ、底部がナデである。内面調整は斜位の工具によるナデである。胎土には小礫のほか、石英・角閃石が比較的多く含まれている。

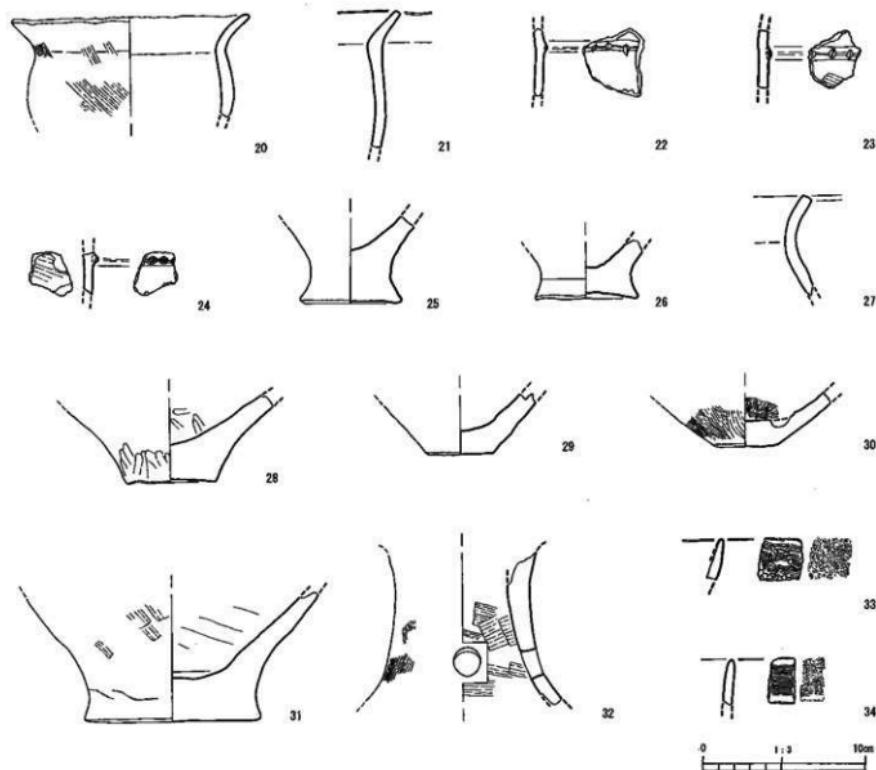
高杯（32）

32は脚部片である。残存状況から脚部が「へ」の字状に聞く形態のものと思われ、弥生時代後期に該当すると考えられる。脚部中位には円形のスカシ孔が確認できる。外面調整は縦位のハケ目である。内面調整は横位のハケ目である。胎土には小礫が多く含まれている。

鉢（33・34）

33・34は鉢の口縁部片と思われるが、残存状態が悪いため断定できない。壺の可能性も考えられる。33はやや内湾ぎみに立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。外面には櫛描波状文が施される。調整は内外面ともナデである。胎土には小礫が多く含まれている。34は直線的に立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。外面には櫛描波状文が施される。調整は内外面ともナデである。胎土には小礫が多く含まれている。

外面に櫛描波状文を施す鉢は宮崎市源藤遺跡や都城市今房遺跡など弥生時代終末期の遺構から出土している事例があり、33・34も弥生時代終末期に属する可能性が考えられる。



第21図 弥生時代遺物実測図 (S=1/3)

第3表 弥生土器観察表

経番 No.	器種	施青部位	出土地点	層次	寸法 (cm)			色調	表面	調査		備考
					口径	底径	高さ			外側	内側	
20	瓶	口縁部-側面	HPC	Ⅲ	(14.10)			にぶい青	にぶい青	ヨコナデ・ハケ目	手形(摩滅)	外側にスス付着、瓦軒復元
21	瓶	口縁部-側面	三河区	Ⅱ				にぶい青	にぶい青	不規(摩滅)	手形(摩滅)	外側にスス付着
22	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	越日突進文・不規(摩滅)	不規(摩滅)	
23	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
24	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形突進文・ハケ目	ハケ目(摩滅)	
25	甕	底部	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
26	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
27	甕	口縁部-側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
28	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
29	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
30	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形(摩滅)	手形(摩滅)	
31	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形突進文・ハケ目	ハケ目(摩滅)	
32	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形突進文・ハケ目	ハケ目(摩滅)	
33	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形突進文	手形突進文	手形(摩滅)
34	甕	側面	SE-13					にぶい青	にぶい青	手形突進文	手形突進文	手形(摩滅)

第3節 古代～中世の成果について

1 遺構および遺構内出土遺物

古代～中世に該当する遺構は掘立柱建物跡3軒、土壙墓1基、土坑2基、溝状遺構4条、土器集積遺構1基のほか、多数のピットが確認された(第26図)。以下、各遺構の詳細について述べていくこととする。

(1) 据立柱建物跡 (第22~24図)

【S-B-7】 グリッドA区に位置する。主軸方位はN-52° 30' -Wである。身舎の規模は桁行3間(約6.30m、柱間1.87~2.25m)、梁行2間(3.84m、柱間1.8~2.04m)、面積24.19m²である。柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形である。柱穴の規模は直径28~42cm、検出面からの深さ8~32cmである。柱穴の埋土中から古代の土師器甕の胴部と布痕土器の胴部と思われる土器片が出土したが、小破片であったため図化しなかった。

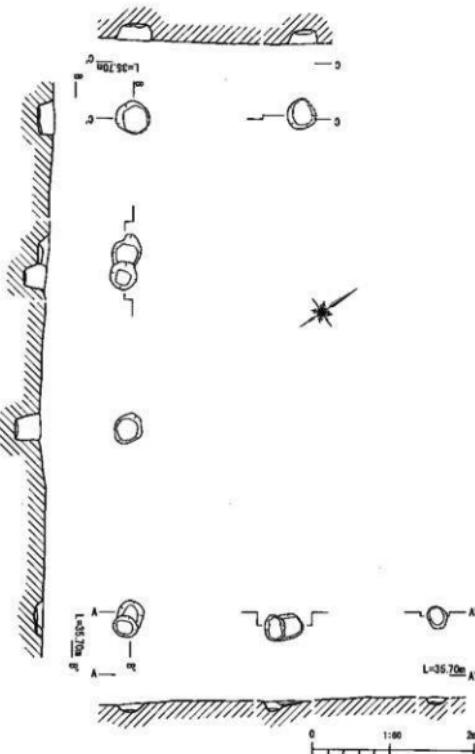
【S-B-18】 グリッドF区に位置する。主軸方位はN-56°Wである。身舎の規模は桁行2間(約4.2m、柱間2.1m)、梁行2間(約2.56m、柱間1.02~1.34m)、面積10.75m²である。梁間中央の柱穴は棟持柱状に突出している。柱穴の平面形態は円形もしくは梢円形である。柱穴の規模は直径22~50cm、検出面からの深さ20~40cmである。柱穴の埋土中から土師器杯もしくは楕の口縁部片(35)が出土した。

【SB-19】 グリッドF区に位置する。主軸方位はN-56°-Wである。身舎の規模は桁行3間(約5.38m、柱間1.52~2.12m)、梁行1間+ α (約1.9~2.16m+ α)である。柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形である。柱穴の規模は直径32~48cm、検出面からの深さ10~42cmである。柱穴の埋土中から古代の土師器杯もしくは椀と思われる口縁部片(36)と輪高台が付く土師器椀と思われる土器片(37)が出土した。SB-18とSB-19は主軸方位が同じである。そのため、両者は近接する時期に建造された遺構の可能性が高いと考えられる。

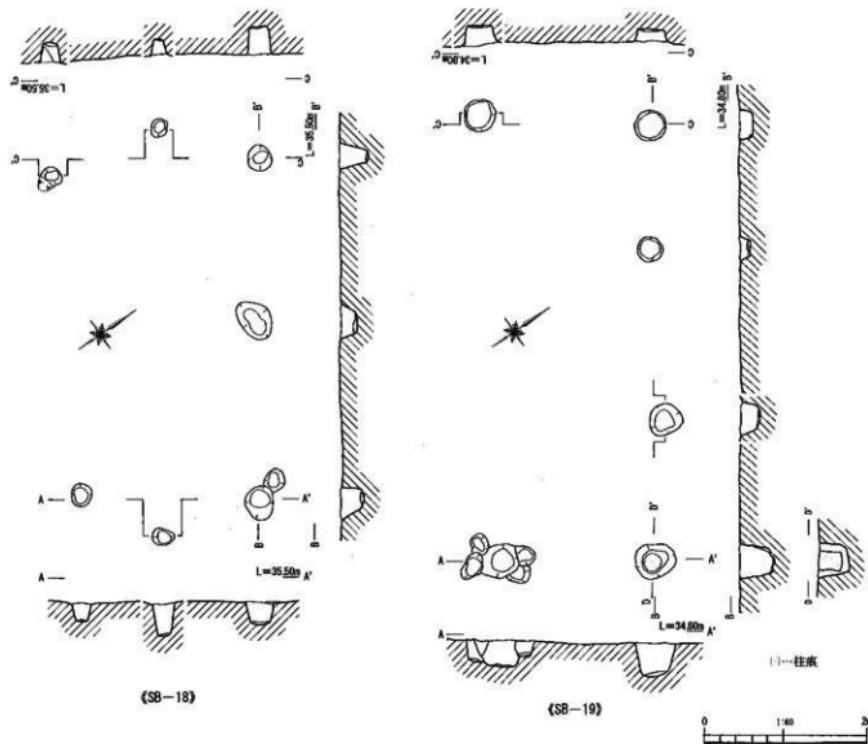
(2) ピット (第24~25図)

調査区内から多数のピットが確認された。しかし、先述の遺構以外は掘立柱建物跡として抽出し得なかった。ピットから出土した古代の遺物は38~40である。38については下記のP-12の欄で詳述する。39は円盤状高台の付く梯の底部片である。高台端部が外側へ張り出す。40は須恵器窯の胴部片である。外面調整が格子目タタキ、内面調整が車輪当て具痕である。

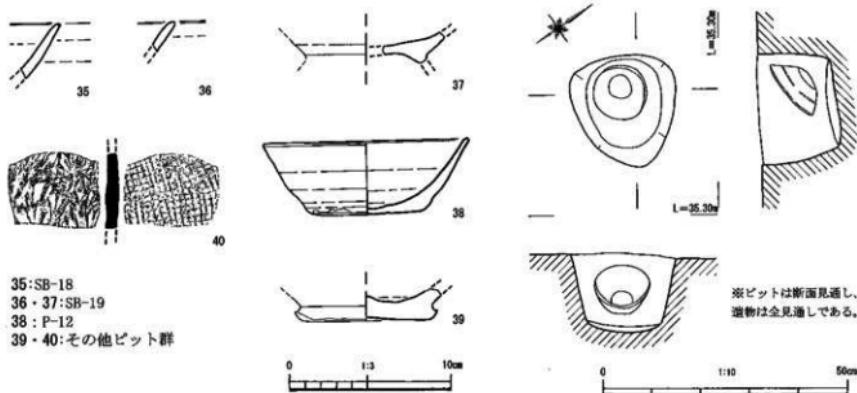
【P-12】 グリッドD区に位置する。規模は直径22cm、深さ16cmである。平面形態は梢円形である。埋土中からは完形の土器師器杯(38)が床面から約3cm上の位置で出土した。38は平底の底部から稜角をもって立ち上がり、直線的に外側へ開く形態である。



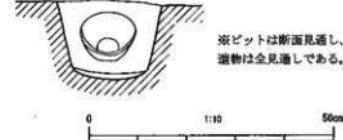
第22図 SB-7実測図 ($S=1/60$)



第23図 SB-18・SB-19実測図 (S=1/60)



第24図 堀立柱建物跡・ピット群出土遺物実測図 (S=1/3)



第25図 P-12実測図 (S=1/10)

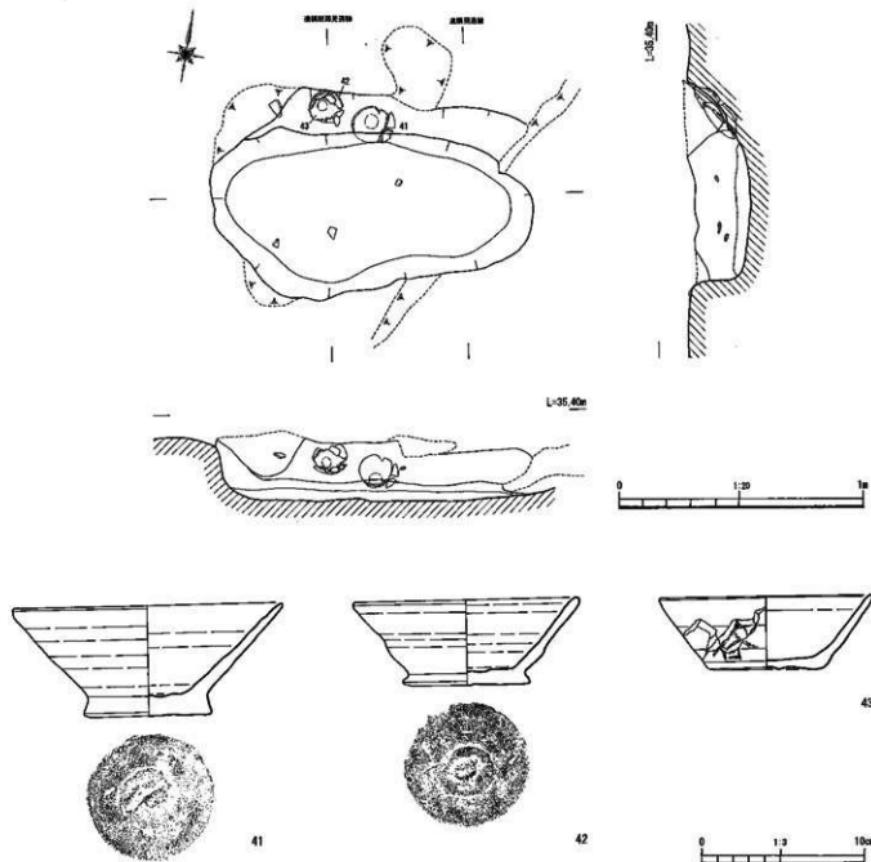


第26図 古代～中世遺構配図 (S=1/400)

(3) 土壙墓 (第27図)

【SD-14】 グリッドD区に位置する。主軸方位はS-81°-Eである。平面形態は不整椭円形、断面形態は箱形を呈する。遺構の規模は長軸1.32m、短軸0.87m、検出面からの深さ0.30mである。埋土中からは土師器杯・椀がほぼ完形の状態で確認された。43の杯が入った42の椀と、41の椀とが並んだ状態で出土した。遺構の形態及び遺物の出土状況から土壙墓と判断した。なお、木棺墓の可能性も考えられたため、土層を丁寧に観察したが棺の痕跡と考えられるような木質は確認されず、釘などの出土もなかった。出土した遺物は床面から若干浮いた位置で、斜めになった状態で出土した。このことは、木蓋の上に置かれていた土師器がその後の木蓋の腐食に伴い、棺内に落としたことを示しているのではないかと考えられる。なお、遺構の短軸の幅が東側に比べ西側が長いことから、頭位方向は西と考えられる。

41・42は円盤状高台付碗である。41・42ともに外側へ直線的に開く形態のものである。43は杯である。外側へ直線的に開く形態のもので、体部外面には「春」と思われる墨書きが記されている。

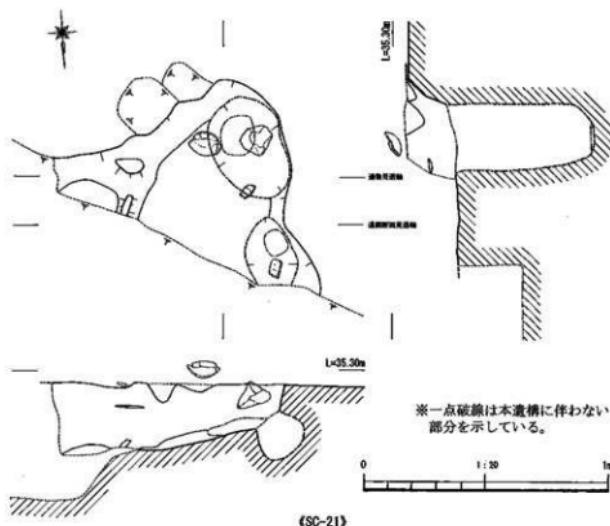


第27図 SD-14実測図及びSD-14出土遺物実測図 (S=1/20、1/3)

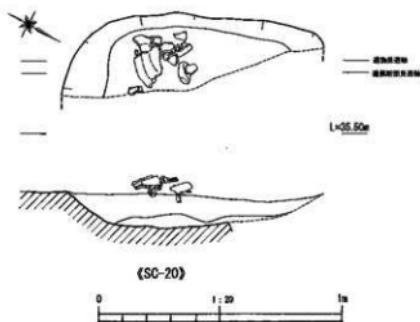
(4) 土坑 (第28図)

【SC-20】 グリッドD区に位置する。平面形態は梢円形、断面形態は逆台形と思われるが、残存状況が悪いため判然としない。遺構の規模は長軸残存長1.08m、短軸残存長0.35m、検出面からの深さ0.15mである。SE-13と切り合い関係にある。調査時SE-13より古いと判断していたが、出土した遺物の年代観から現在は本遺構がSE-13より新しいと考えている。埋土中からは土器師が数点出土した(44~47)。44は鉢である。外面にはスヌが付着している。45・46は円盤状高台付椀である。47は杯もしくは椀の口縁部片である。

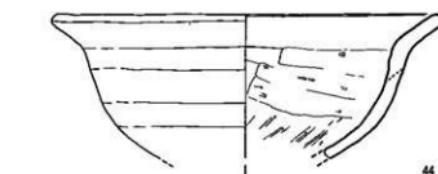
【SC-21】 グリッドD区に位置する。平面形態は不整形、断面形態は箱形と思われるが、残存状況が悪いため判然としない。遺構の規模は長軸残存長1.20m、短軸残存長0.70m、検出面からの深さ0.28mである。床面でピットを二基確認したが、埋土の観察から本遺構には伴うものではないと判断した。SE-13と切り合い関係にある。前後関係については調査に不備があったため、不明である。埋土中からは古代の土器師杯が出土している(48~50)。



《SC-21》



《SC-20》



44



45



46



47



48



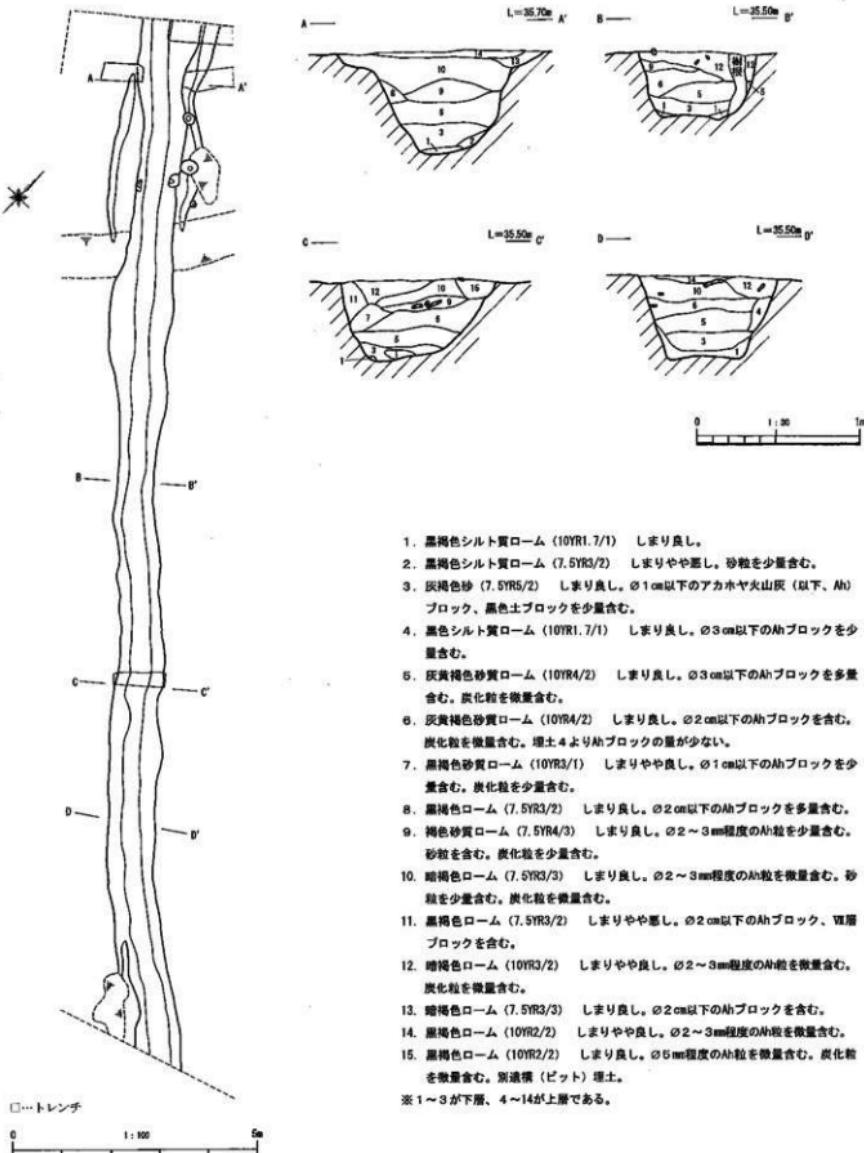
49



50

44~47 : SC-20, 48~50 : SC-21

第28図 SC-20・SC-21実測図及びSC-20・SC-21出土遺物実測図 (S=1/20, 1/3)



第29図 SE-13実測図 ($S=1/100, 1/30$)

(5) 溝状遺構

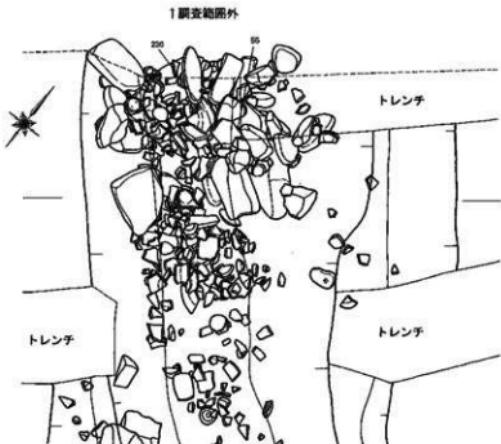
【SE-13】(第29~50図)

グリッドD区に位置する。北西-南東方向を走行する。断面形態は逆台形状であるが、北西側の残存状況の良い地点では二段掘り状を呈する。遺構の規模は最大幅1.80m、検出面からの深さは最大で0.63mである。

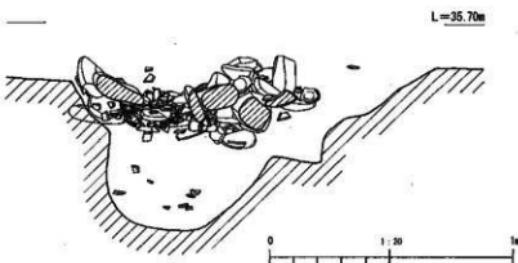
埋土下層には砂層の堆積が確認でき、床面には鉄分の沈下が認められる。これらのことから本遺構は水路として利用されていたものと考えられる。さらに本調査区の北側斜面に湧水点があることとあわせて考えると、本遺構は北側斜面の湧水点から水を引くための溝と推測される。

また、埋土中位～上位にかけては多量の土器や石器・礫などが出土している。これは、本遺構が水路として使用されなくなったある段階で「ごみ捨て場」的用途に用いられるようになったことを示唆しているものと考えられる。特に北東側で遺物の出土が多くみられたことからその中心は北東側にあったと思われる。

第31図で示している地点では「白色顔料が塗布された礫」を含む多数の礫が確認された。礫を用いた構築物の可能性を考え慎重に調査したが、規則的な礫の配置が見られなかった。そのため、これらの礫も他の遺物とともに廃棄されたものではないかと判断した。ただし、廃棄行為に至る前の「白色顔料が塗布された礫」は何かしらの構築物を構成していた礫であった可能性は充分に考えられる。第32図で示している



…白色に塗布された礫
(第31・32・34・35・36図においても同様)

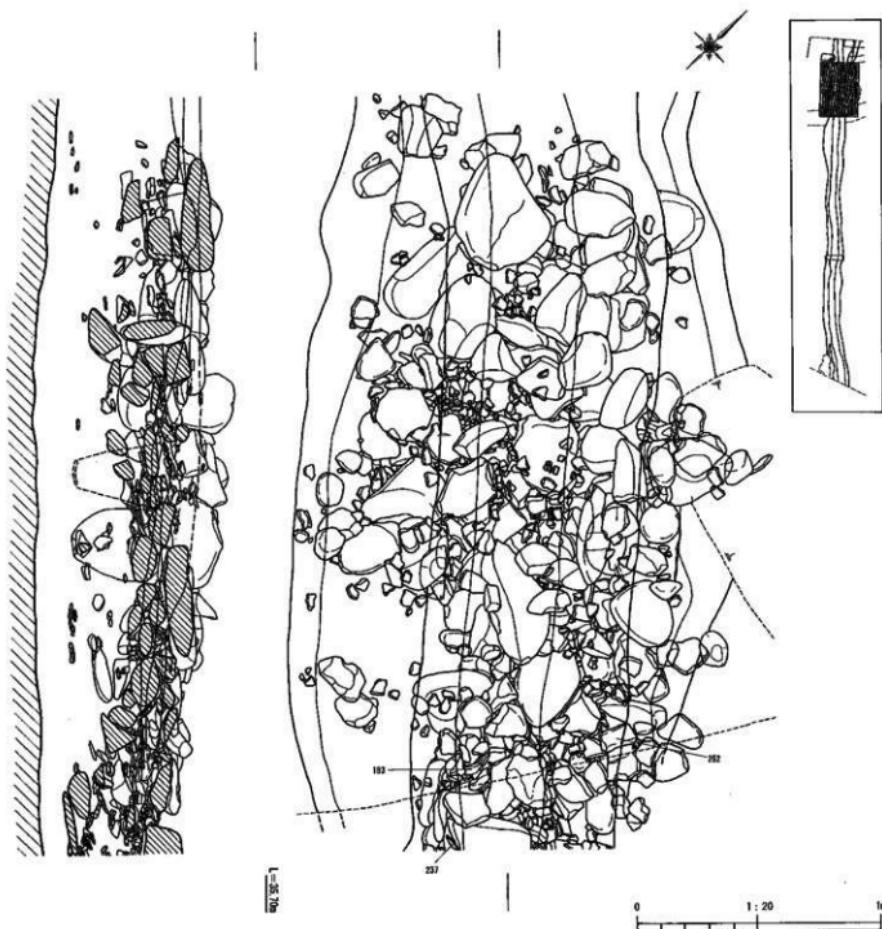


第30図 SE-13遺物出土状況図① (S=1/20)

地点では、砂層より上位、遺物の密集しているレベルより下位で完形および完形に近い土師器杯・椀と扁平な碟がまとまった状態で出土している(第33図)。出土層位から水路として使用された時期より新しく、「ごみ捨て場」的用途に使用された時期より古いものと考えられる。水路として用いられなくなった段階で水神を鎮めるような祭祀行為があったのかもしれないが、墨書き人面土器や土馬などの祭祀具が出土していないため、祭祀行為の有無については判断としない。

土層を観察すると「溝の構築時期」から「水路使用時期」に近い、砂層とその下位の層(1~3層、以下「下層」)、「水路として使用されなくなった時期」から「ごみ捨て場の用途に使用された時期」に近い、砂層より上の層(4~14層、以下「上層」)に大きく分けられる。出土遺物もこの基準に基づき取り上げを行なった。

下層からは縄文土器、弥生土器、古代土師器杯・甕などの破片が出土したがいずれも小破片であり、詳細な時期を推察できる資料はなかった。



第31図 SE-13遺物出土状況図② (S=1/20)

上層からは古代を中心とした遺物が多く出土した。以下、上層から出土した遺物について器種ごとに詳述する。なお、杯と碗についても本来であれば法量に基づき区分すべきであるが、今回は便宜上高台のつかないものを杯、つくものを碗として報告することとする。

『土師器・黒色土器』(51~227)

杯 (51~128) 出土した杯は器形や法量、調整技法から以下のようなタイプに分類できる。

I類 (51~78、93~119) …底部からスムーズに立ち上がり外方に開くもの。法量は口径11.6~13.9cm、底径4.4~7.2cm、器高4.3~5.3cmである。さらに口縁部の形態により、直口のもの(51~74)と外反するもの(75~78)に細分できる。前者をa類、後者をb類とする。

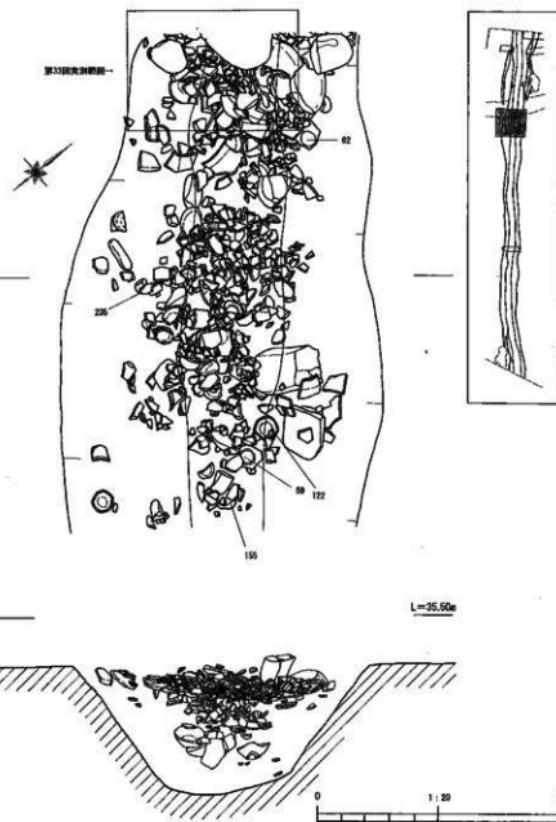
その他の特徴があるものとして、体部下半に回転ヘラケズリを施すもの(54・68・72・95・104・105・115・119)、口縁部が大きく歪むもの(59)、体部内面に墨と思われる黒色の付着物が認められるもの(70)、初殻压痕が認められるもの(119)などが挙げられる。

II類 (79~128) …底部から内湾ぎみに立ち上がるるもの。法量は口径13.8~14.8cm、底径6.8cm、器高4.5cmである。128に関しては底部が残っていないため、碗の可能性もある。

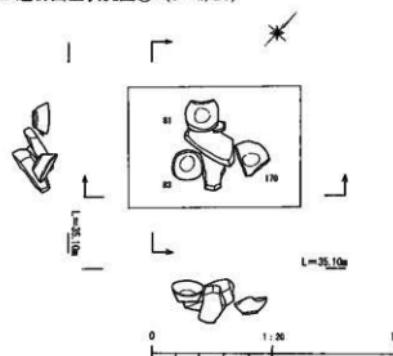
III類 (80・81) …体部下半に段を持ち、高台状を呈するものの。法量は口径13.2~13.5cm、底径6.6~7.5cm、器高4.3~5.3cmである。

IV類 (82~88、120~123) …器表面に強い回転ナデによる明瞭な凹凸があるもの。法量は口径11.4~12.9cm、底径5.4~6.6cm、器高4.4~5.8cmである。全体の器形が分かるものに関しては、全体に明瞭な凹凸があるものと(82~85)、体部下半のみ凹凸があるもの(86~88)に細分できる。前者をa類、後者をb類とする。

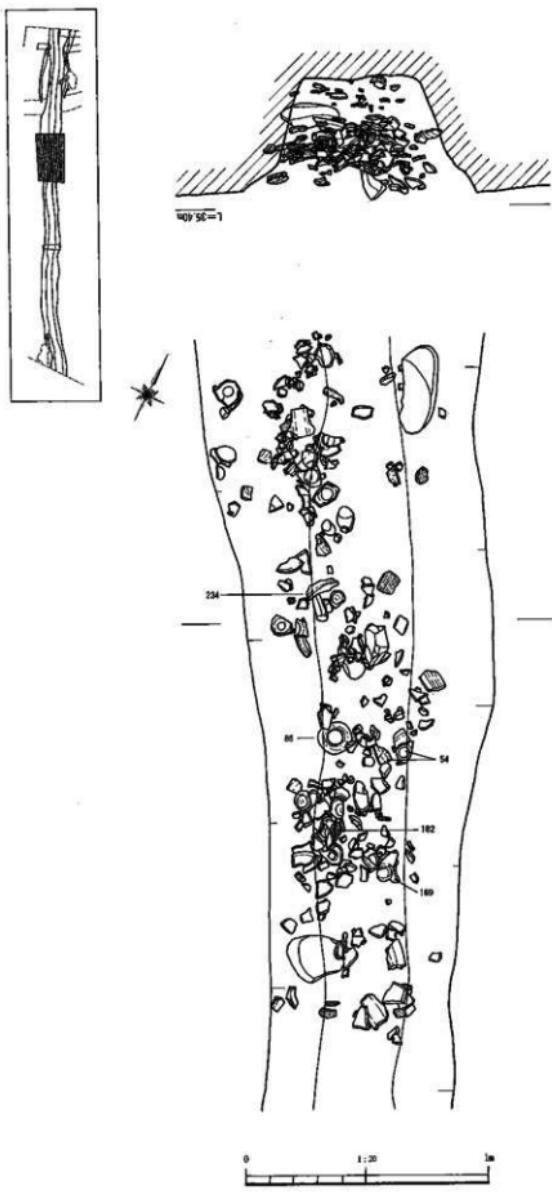
V類 (89~92) …他のタイプのものに比べ、器高の低いものの。法量は、口径12.8~14.0cm、底径6.6~8.1cm、器高3.9~4.1cmである。



第32図 SE-13遺物出土状況図③ (S=1/20)



第33図 SE-13土師器杯出土状況図 (S=1/20)



VI類 (124・125) …底部端部がわずかに張り出すもの。全体の形状が分かる資料は出土していない。底径は6.8~7.9cmである。

VII類 (126・127) …体部外面を回転ヘラケズリ、内面をミガキ調整するもの。127に関しては体部外面に回転ヘラケズリのちミガキ調整を行なっている。全体の形状が分かれる資料は出土していない。底径は6.4～7.8cmである。

円盤状高台付椀・皿 (129~167)
出土した円盤状高台付椀は器形や
法量、調整技法から以下のような
タイプに分類できる。

I類 (129~133, 143~149) …高台部が柱状もしくはそれに近い形状を呈し、端部があまり張り出さないもの。法量は、口径13.7~15.2cm、底径6.2~7.6cm、器高5.6~7.1cmである。全体の器形が分かるものに関しては、直線的に外側へ開くもの (129~131) と湾曲ぎみに立ち上がるるもの (132~133) に細分できる。前者を a 類、後者を b 類とする。

その他の特徴があるものとして、内面にススが付着しているもの(145)、底部内面に白色の化粧土のような付着物が認められるもの(149)が挙げられる。

Ⅱ類(134~141、150~167)…高台端部が大きく張り出すもの。法量は、口径11.4~17.2cm、底径6.4~8.6cm、器高4.7~6.8cmである。全体の器形が分かるものに関しては、直線的に外側へ開くもの(134~136)、湾曲ぎみに立ち上がるもの(137~138)、口縁端部が外反するもの(139~140)、他のタイプのものに比べ、底径に対する口縁部径の割合が小さいもの(141)に細分できる。前者から、
・類I類、類II類とする。

その他の特徴があるものとして、初殻圧痕が認められるもの(157)、底面に格子目状の圧痕が残るもの(164)、底面に板状圧痕が残るもの

第34図 SE-13遺物出土状況図④ (S=1/20)

(165)、底部内面に白色の化粧土のような付着物が認められるもの(165~167)が挙げられる。

上記で説明したものはすべて椀であるが、142のような皿も認められる。

輪高台付椀 (168~174) 高台の形状についてみてみると、あまり外側へ広がらないもの(168・173)、「ハ」の字状に広がるもの(169)、短く外側へ広がるもの(170・171・172)がある。

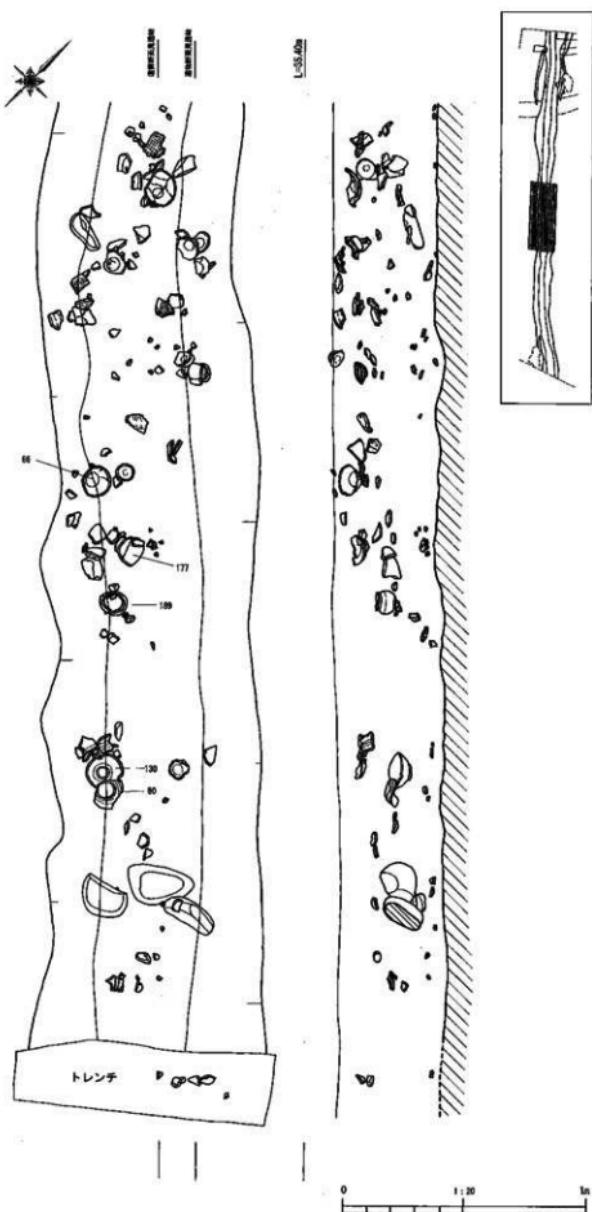
口縁部～体部の形態は外側へ直線的に開くもの(168・169・174)と内湾するもの(170)がある。

また、169のように底部高台内に放射状調整痕が認められるものも存在する。

170は高台の成形法が他のものと異なる。他のものが粘土を貼り付けて高台を作り出しているのに対し、170の資料は粘土を摘み出して高台を作り出している。

黒色土器 (175~178) いずれも内面のみ黒色となる黒色土器A類である。175は平底の杯である。口縁部が直線的に外側へ開く。176・177は輪高台の付く椀である。176は口縁部が直線的に外側へ開く。177はやや外反ぎみに外側へ開く。底部高台内には放射状調整痕が確認できる。178は口縁部～体部片である。口縁部が直線的に外側へ開く。

脚台付鉢 (179~185) 長脚の脚部を有する鉢である。底径11~12cm程度で端部が外反ぎみに開くもの(179~182)と底径14~18cm程度で端部が直線的に開くものがある(183~185)。183は脚部内面に墨と思われる黒色の付着物が認められる。185は脚部に穿孔が認められる。



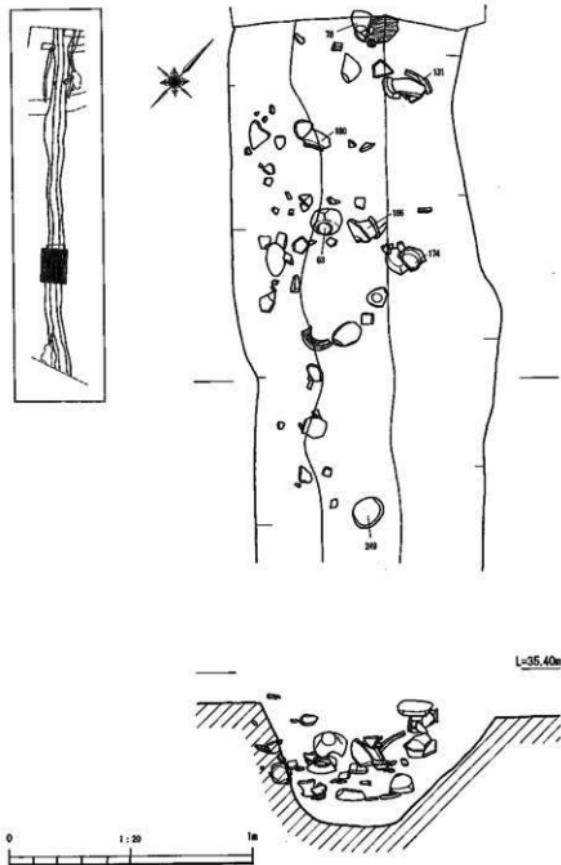
第35図 SE-13遺物出土状況図⑤ (S=1/20)

高杯 (186~188) 186は脚部である。前述の脚台付鉢に比べ、脚部が長いことから高杯に分類した。187・188は杯部である。本調査区出土の杯・椀類にはない「内面下半に縦位の板状工具によるナデ調整を行なう」という特徴がある。そのため、杯・椀類以外の器種ではないかと推測し、今回高杯の可能性がある資料として報告する。ただし、類例が確認できなかつたため、高杯と断定できる資料ではない。

壺 (189) 小型の壺である。輪轂整形であり、底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整を行なう。口縁部は短く、若干外側へ開く。

壺 (190~219) 法量についてみてみると、口径23~28cm程度の大型のもの (190・192・195・197・198)、口径17~20cm程度の中型のもの (191・193・194・196・199)、口径10~15cm程度の小型のもの (200~203) に分けることができる。

つぎに全体の器形についてみてみると。全体の器形がわかる資料は少ないが、胸部上位に胸部最大径のある球胸壺 (190・191・194・199・201・203) と胸部中位から下位に胸部最大径のある長胴壺 (192・193・195・196・197・200・202) に分けることができそうである。



第36図 SE-13遺物出土状況図⑥ (S=1/20)

口縁部形態は「く」の字状に外反するもの (193・194・199~203、209~214)、「く」の字状に外反し、口縁部外面中位に稜線をもつものの (190~192、195~198、205~208)、短く外反するもの (215~218) がある。

調整方法は口縁部がヨコナデ、胸部外面がハケメもしくはナデ、胸部内面がヘラケズリ調整のものが多い。ただし、小型のものには内外面ナデ調整のものが一定量認められる。また、頸部内面にヘラ状もしくは棒状工具による刻目を施すもの (193・194・216) や胸部内面にミガキ状の調整を施すもの (193・194・202)、胸部外面に格子目タタキを施すもの (219) もみられた。

鉢 (220・221) 220は浅鉢である。外面にススが付着している。口縁部は「く」の字状に外反する。221は大型の鉢である。口縁部が大きく内湾する。口縁部内面には棒状工具による刻目が施される。

瓶 (222~224) 222~224は瓶の下半部である。蒸気孔の形態はいずれもつつぬけタイプと考えられる。222は内面にススの付着が確認できる。

《布痕土器》 (225~227)
口縁部形態は舌状に尖るタイプである。

底部形態は尖底である。いずれも胎土中に多量の小礫が混ざり、脆い印象を受けるものが多い。

《須恵器》(228~232)

壺(228・229) 228は口縁部～胴部片である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、中位に稜をもつ。229は胴部片である。焼けひずみが著しい。調整方法は外面が平行タタキ、内面が平行当て具痕である。

鉢(230) 口縁部～胴部片である。直線的に外側へ開く形態である。調整は外面が格子目タタキのち回転ナデ、内面が回転ナデである。

壺(231・232) 231は受け口状の二重口縁を有する口縁部片である。232は胴部～底部片である。胴部中位に最大径をもつ。

《国産施釉陶器・貿易陶磁》(233~235)

緑釉陶器(233) 皿の底部片である。胎土は白色粒を含み、灰色を呈する。高台は削り出しによる輪高台である。

長沙窯(234) 水注の底部片である。胎土は灰白色である。白化粧土で覆われたのち黄釉が掛けられている。内面及び底面は無釉である。内面にススが付着する。

龍泉窯系青磁(235) 梗の口縁部片である。口縁部形態は外反である。内外面無文である。

《土製品・その他》(236~239)

236は輪の羽口と思われる。外面が灰色を呈しており、被熱を受けているように見受けられる。237は土製紡錘車である。片面には回転ヘラ切り離しのような痕跡が認められる。238は用途不明の粘土塊である。239は何かしらの胴部片ではないかと思われるが詳細は不明である。外面に纖維状の擦痕、内面に爪状の圧痕が認められる。

《墨書き器》(240~246)

全て土師器杯もしくは碗と思われる個体の外面に記されている。240は「春」、241は「口本カ」と読めるが、その他の資料については解説できなかった¹⁾。

《石器・石製品》(247~255)

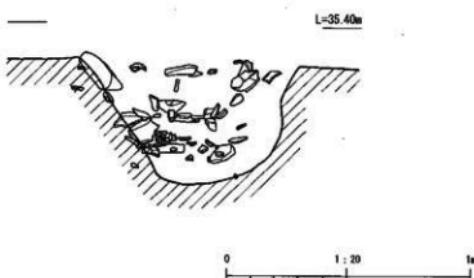
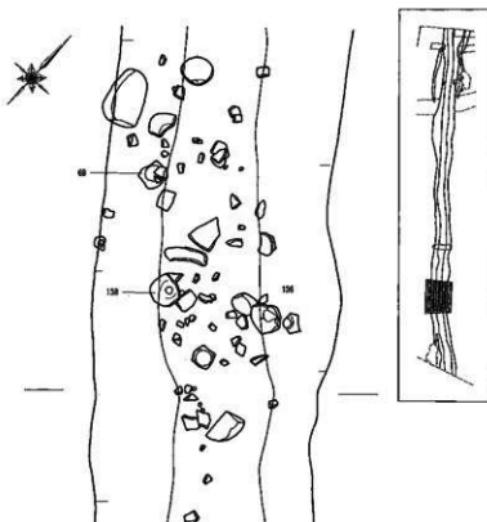
磨石(247) 砂岩製の円礫を素材とし、片面のみ平滑な面が確認できる。

敲石(248~250) 248・249は砂岩製の円礫を素材とし、両面に敲打の痕跡を確認できる。250は砂岩製の棒状の礫を素材とし、片面に敲打の痕跡が確認できる。

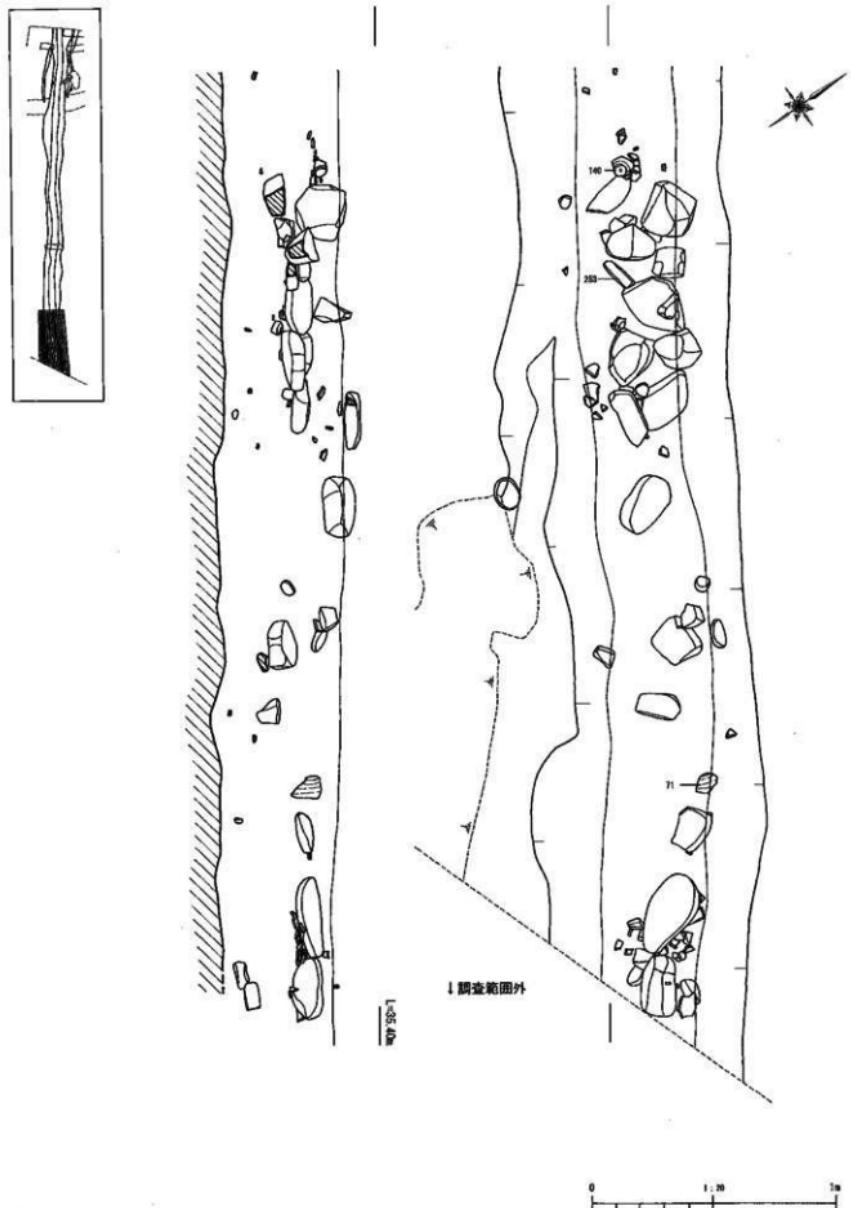
砥石(251~253) 251は頁岩製の細長い扁平な礫、252は砂岩製の柱状の礫、253は頁岩製の小ぶりな礫を素材とする。いずれも明瞭な平滑面が認められる。

石製支柱(254) 砂岩製の棒状の礫を素材とする。表面には硬質のヘラ状工具による整形痕が確認できる。

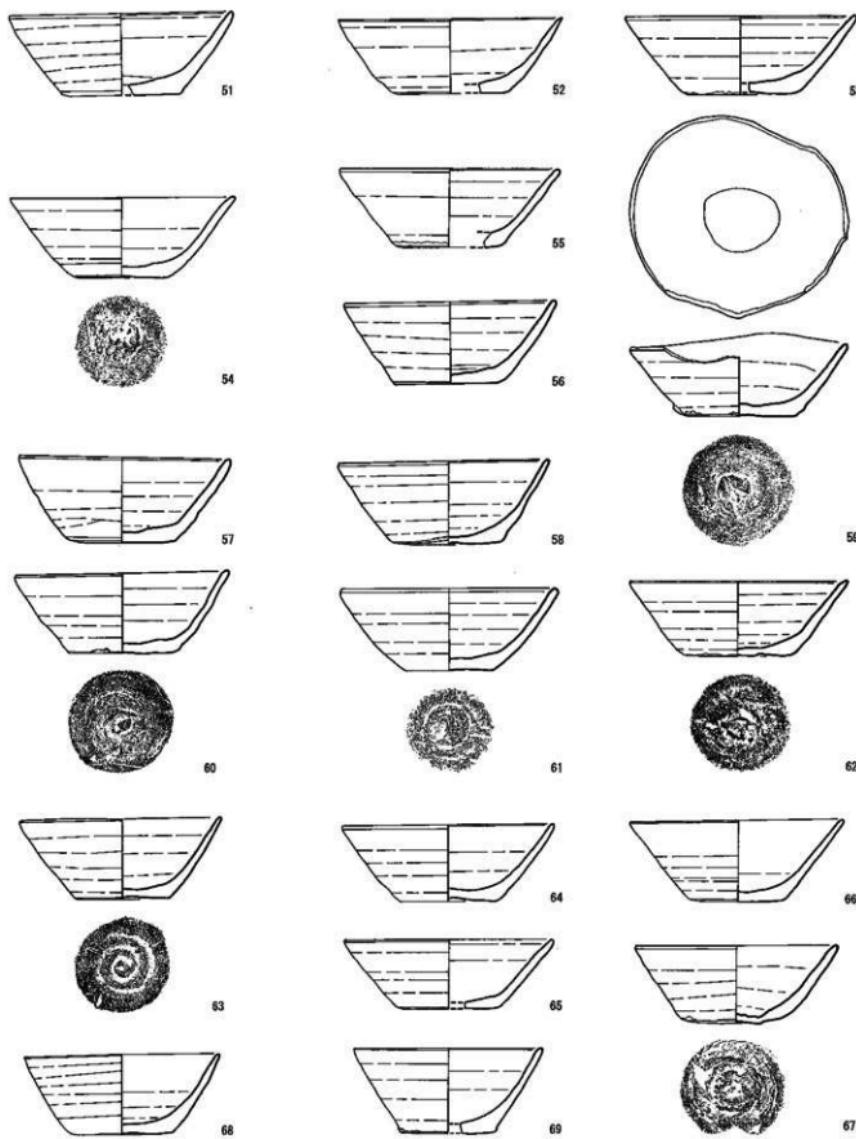
剥片(255) 黒曜石製の剥片である。



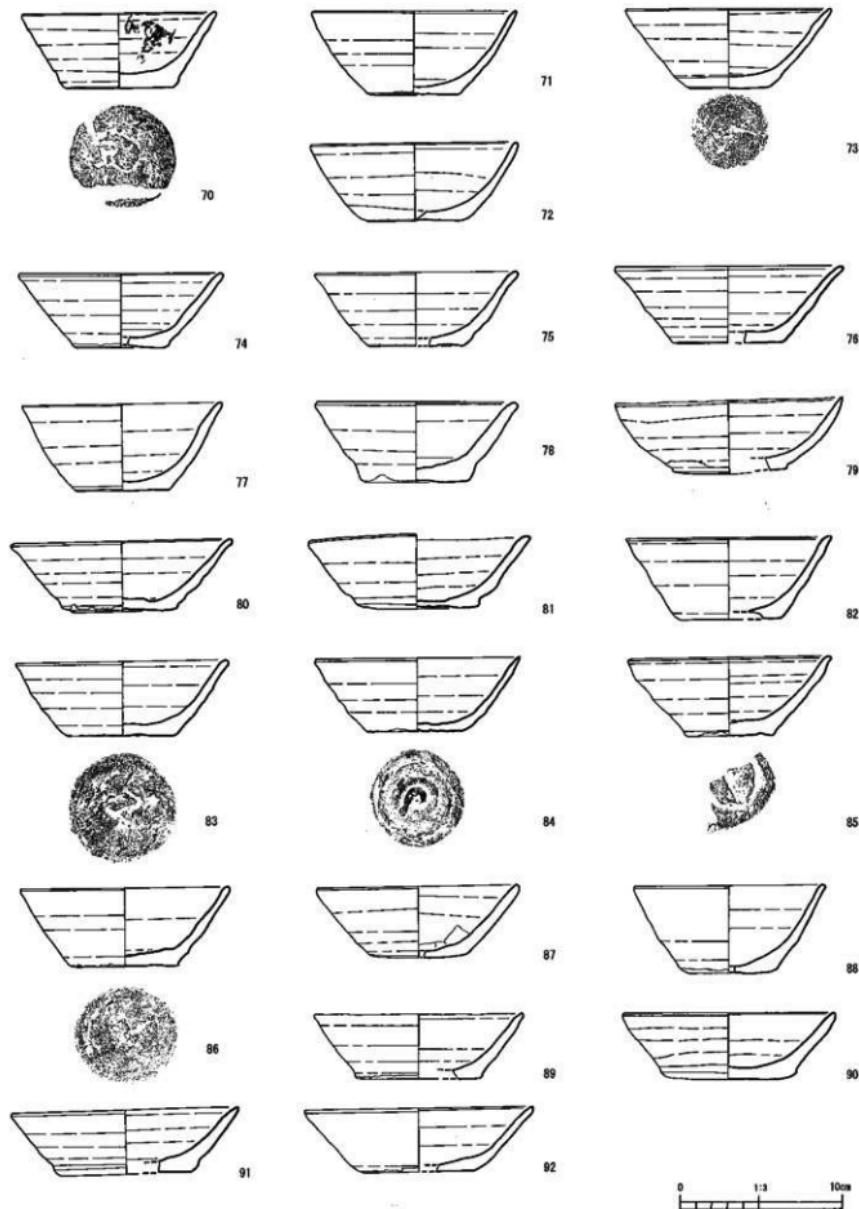
第37図 SE-13遺物出土状況図⑦ (S=1/20)



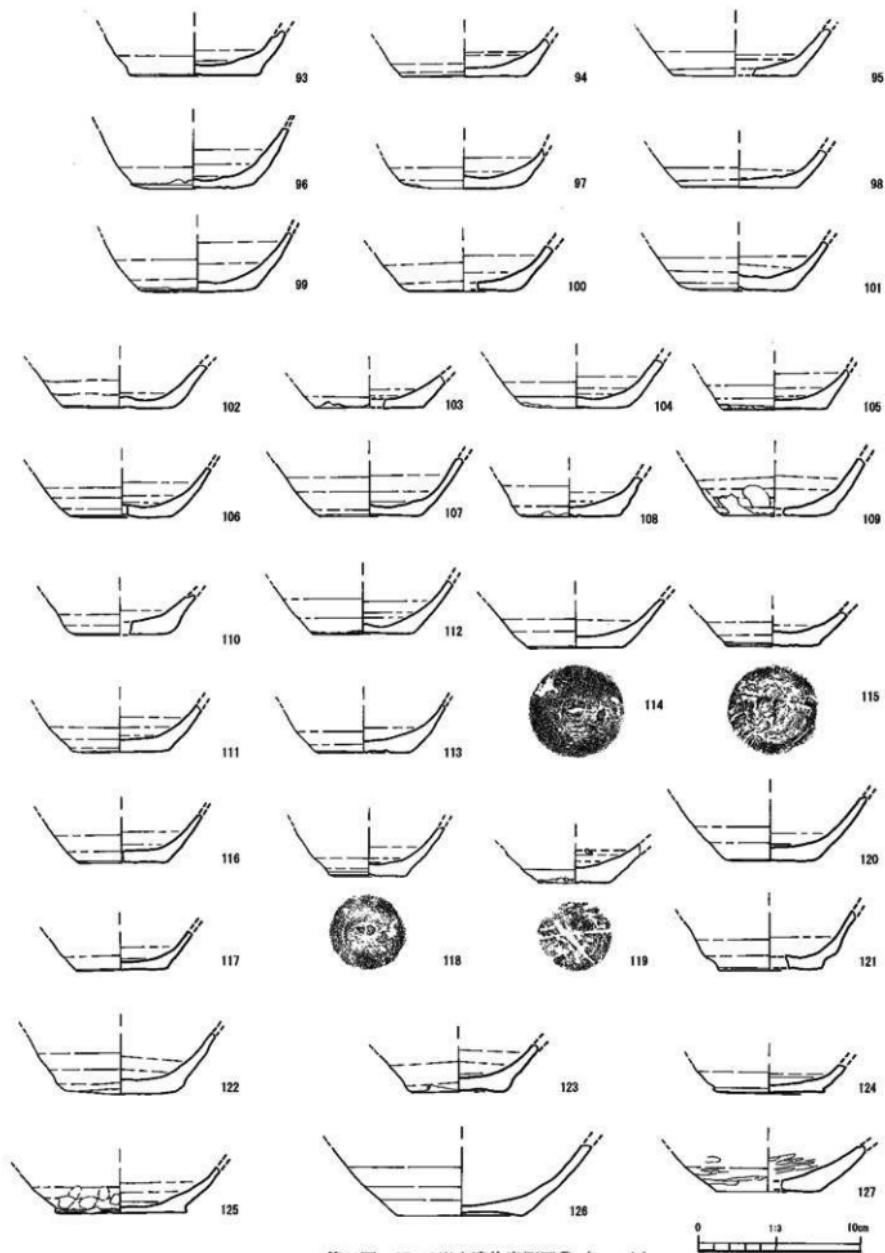
第38図 SE-13遺物出土状況図⑧ (S=1/20)



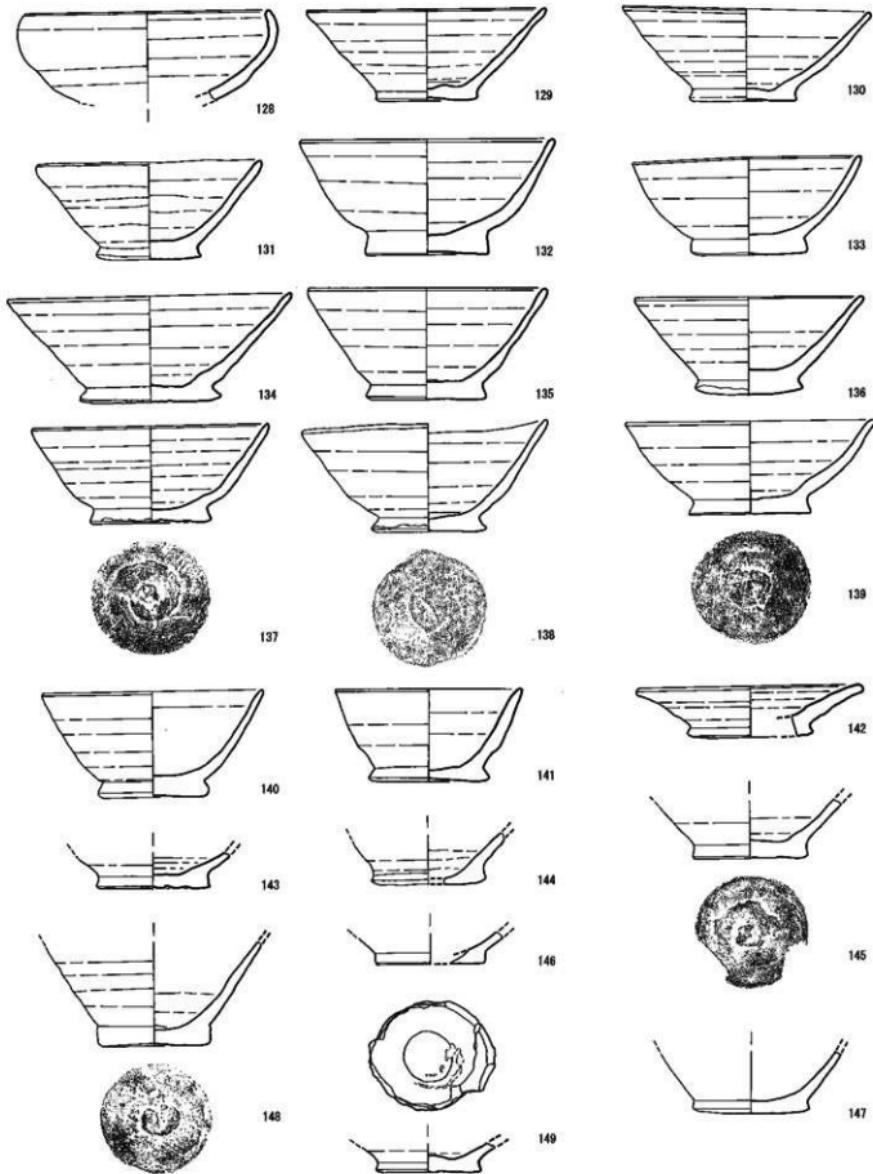
第39図 SE-13出土遺物実測図① (S=1/3)



第40図 SE-13出土遺物実測図② (S=1/3)

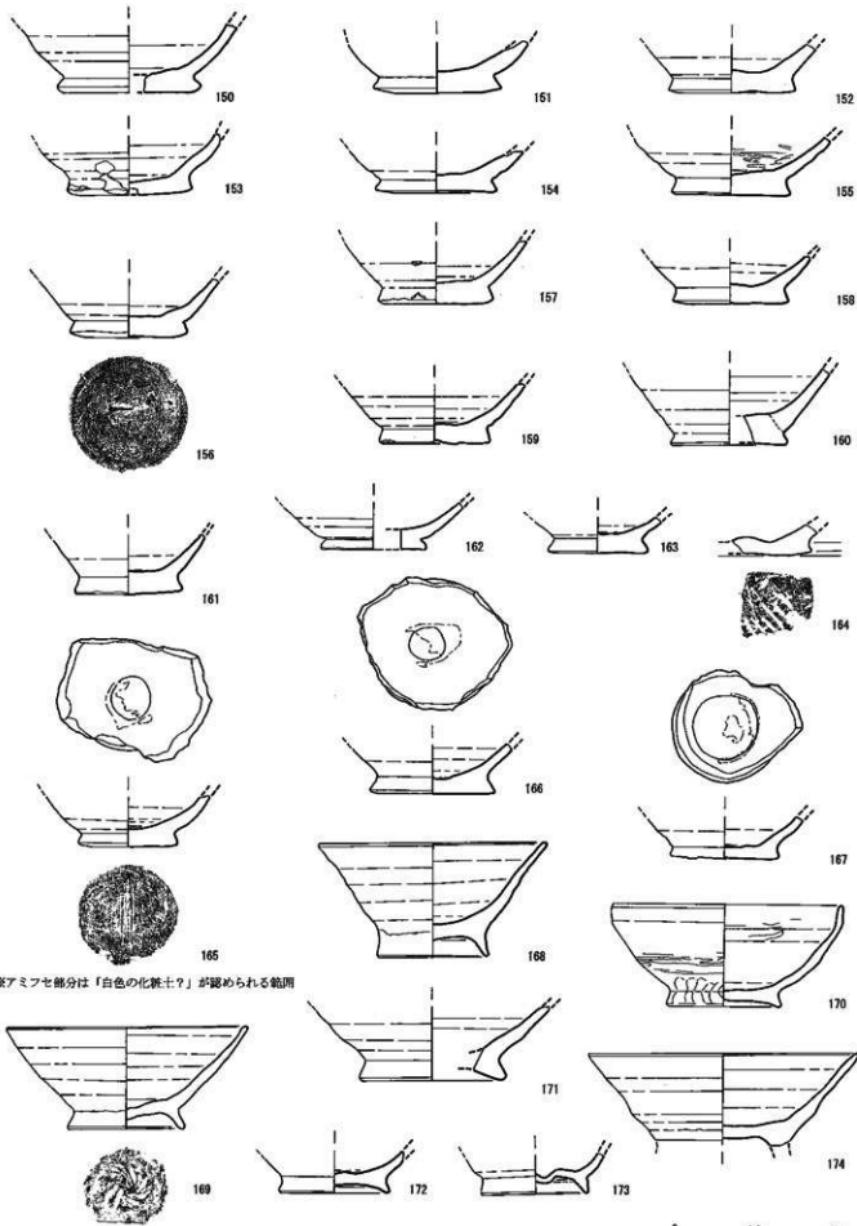


第41図 SE-13出土遺物実測図③ (S=1/3)

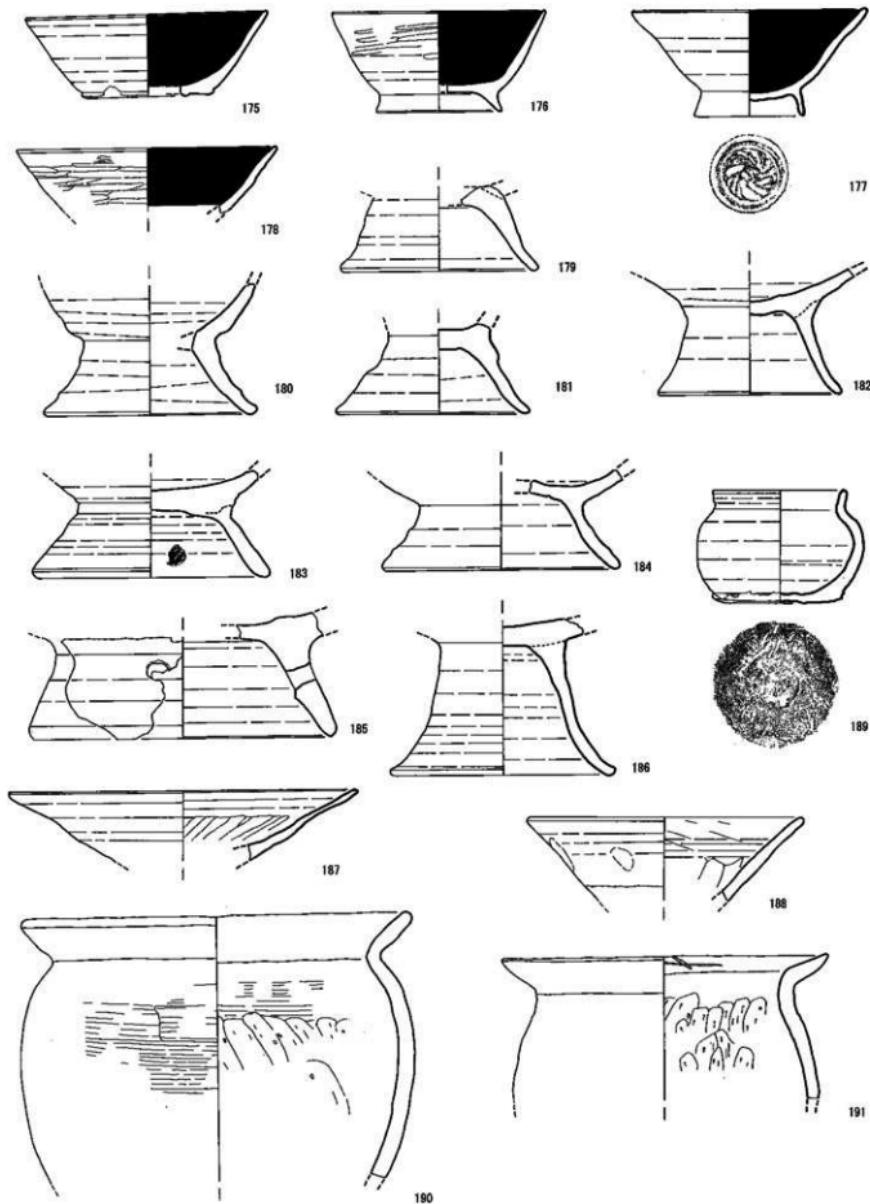


第42図 SE-13出土遺物実測図④ (S=1/3)

0 1:3 10cm

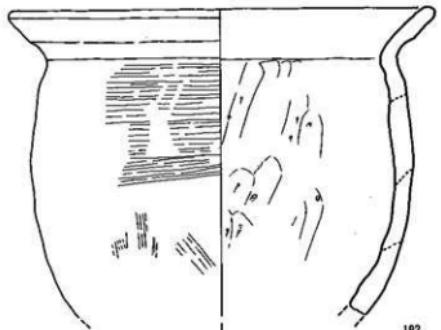


第43図 SE-13出土遺物実測図⑤ (S=1/3)

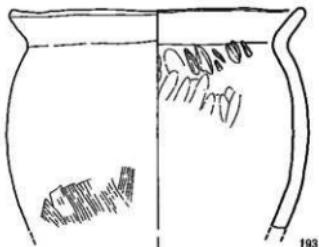


第44図 SE-13出土遺物実測図⑥ (S=1/3)

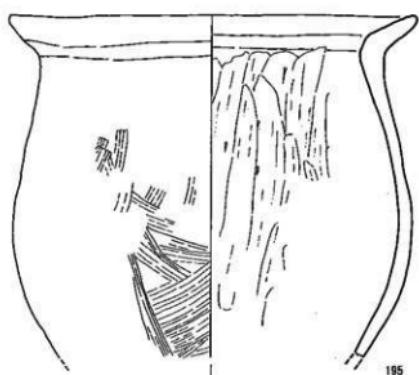




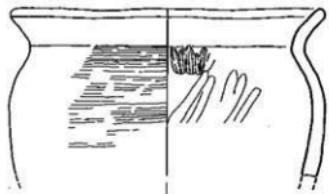
192



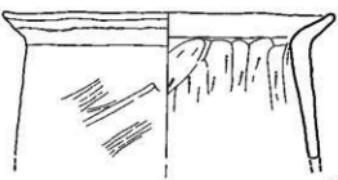
193



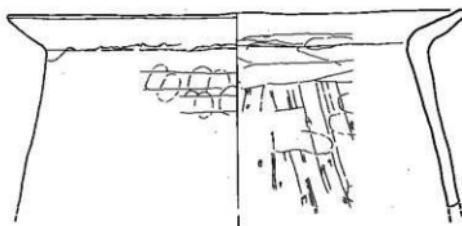
194



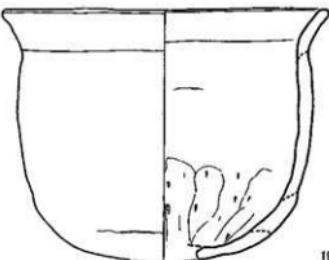
195



196



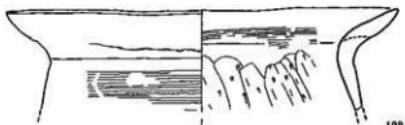
197



198



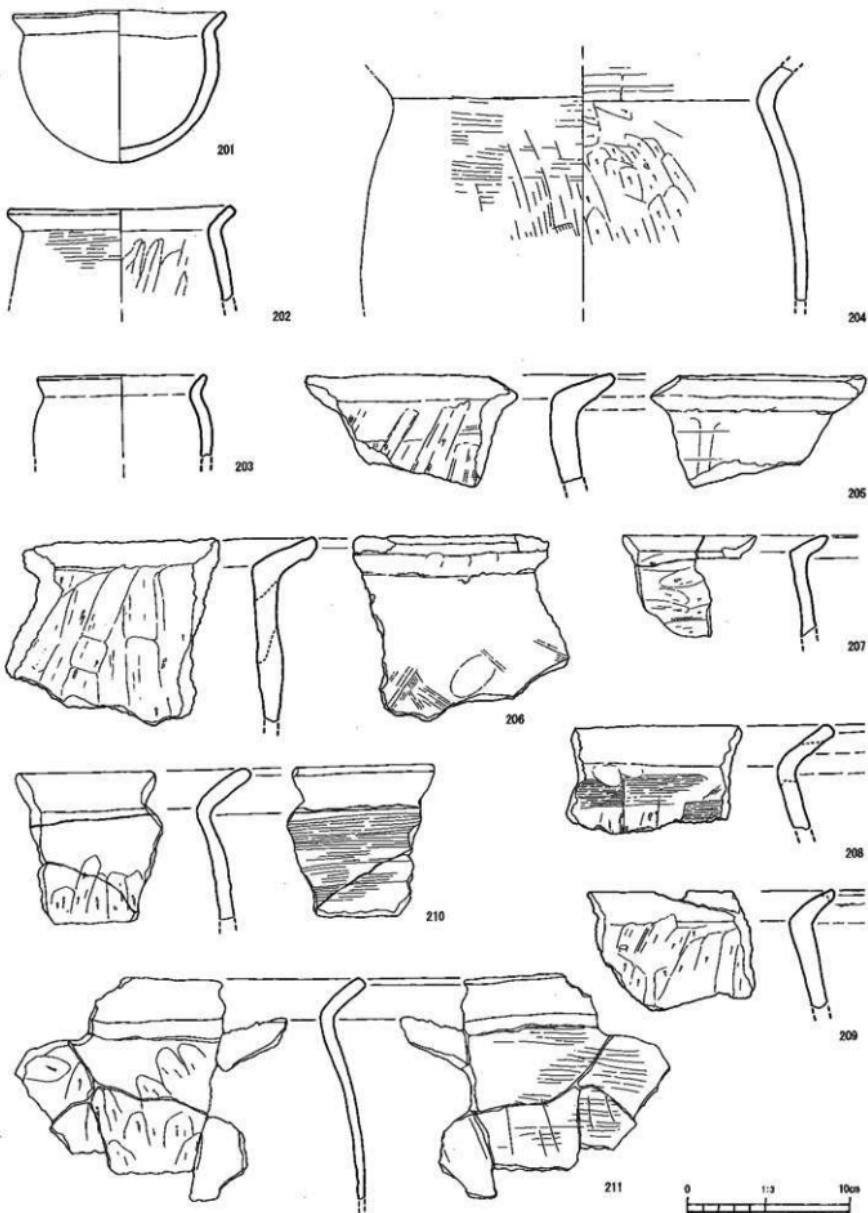
199



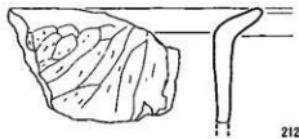
200



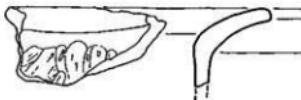
第45図 SE-13出土遺物実測図⑦ (S=1/3)



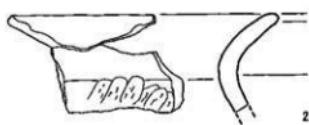
第46図 SE-13出土遺物実測図⑧ (S=1/3)



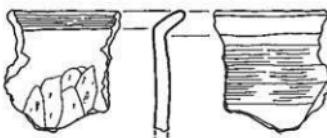
212



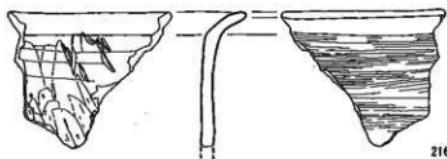
213



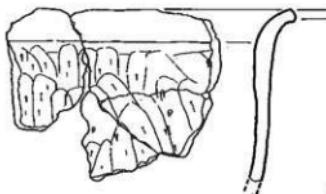
214



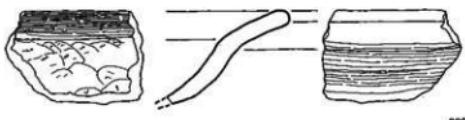
215



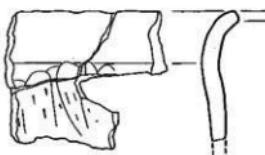
216



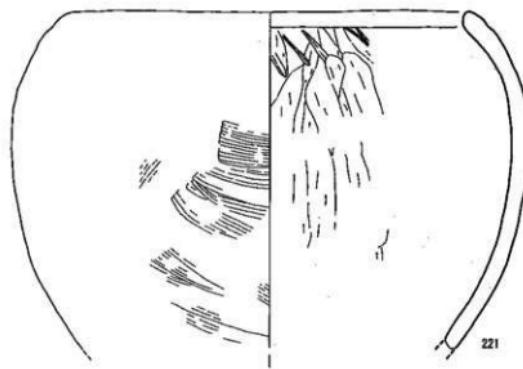
217



220



218



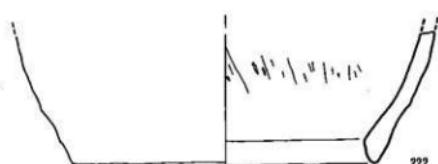
221



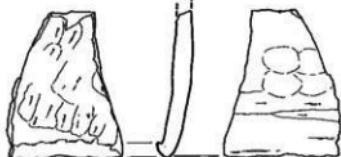
219



223

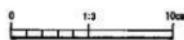


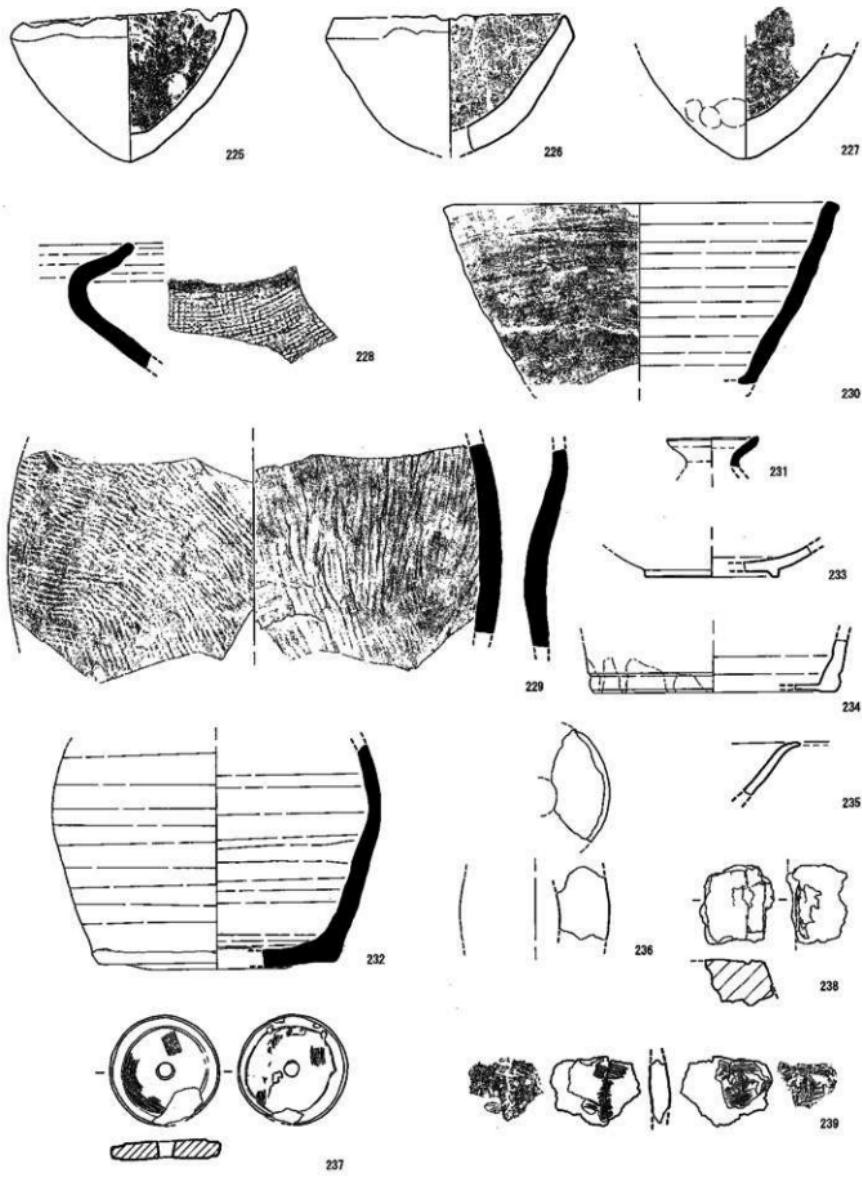
222



224

第47図 SE-13出土遺物実測図① (S=1/3)

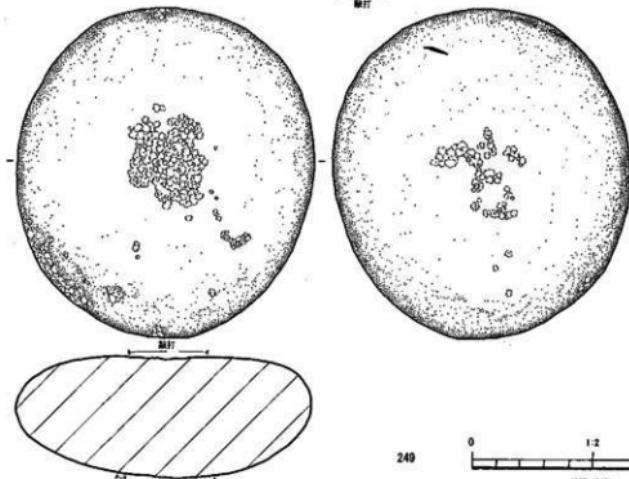
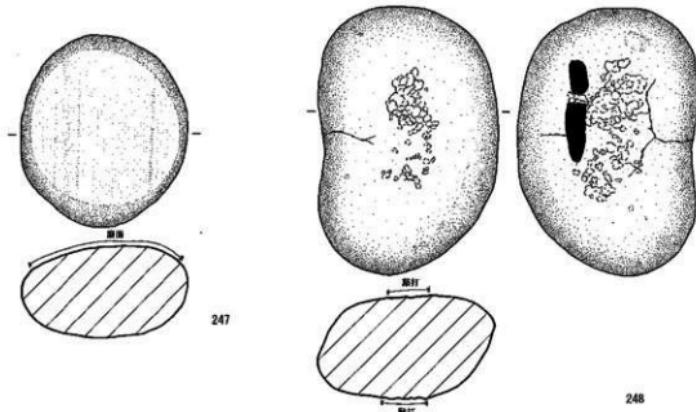




第48図 SE-13出土遺物実測図⑩ (S=1/3)

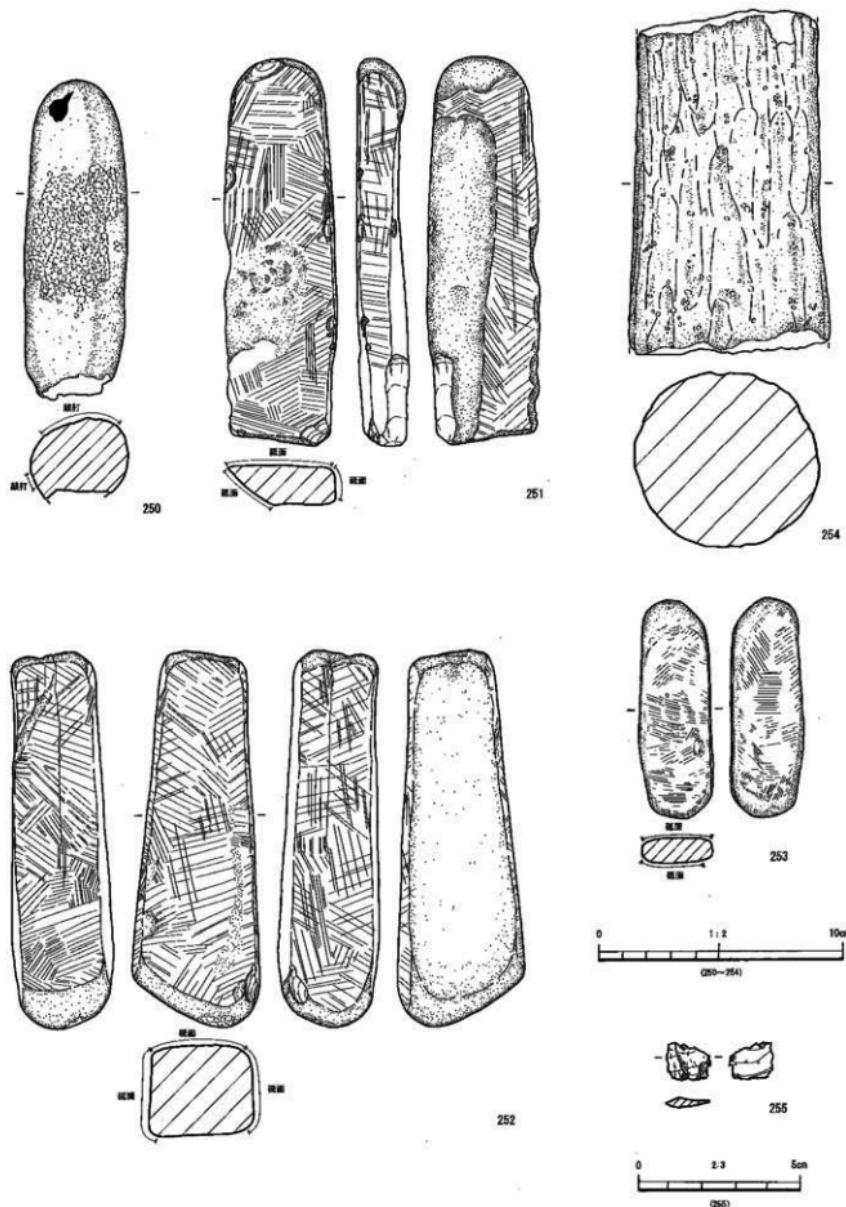


0 1:3 10cm
(249-248)



0 1:2 10cm
(247-248)

第49図 SE-13出土遺物実測図① (S=1/3、1/2)



第50図 SE-13出土遺物実測図② (S=1/2、2/3)

【SE-3】 (第51~53図) グリッドB・C区に位置する。北西-南東方向を走行し、途中で南よりに走行を変える。断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は最大幅1.60m、検出面からの深さは最大で0.47mである。

埋土下層に砂粒を多く含む層が確認できる点とSE-13の走行方向と類似する点から本遺構はSE-13同様、北側斜面の湧水点から水を引くための溝と推測される。

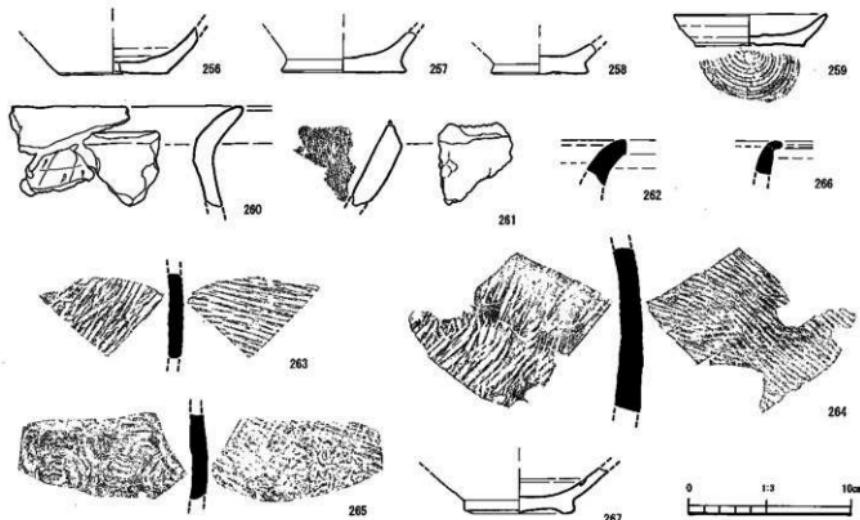
埋土中からは土師器・須恵器・貿易陶磁器が出土している。256~260は土師器である。256は杯である。底面は回転ヘラ切り離し後ナデである。257・258は円盤状高台付椀である。端部が大きく張り出す。259は小皿である。体部が丸みをもち、内湾ぎみに立ち上がる。底面は回転糸切り離しである。形態的特徴から12世紀前半~13世紀中頃に位置付けられる(柴畠2004)。260は甕である。口縁部形態は「く」の字状に外反する。261は布痕土器である。262~266は須恵器である。262は甕の口縁部片である。263~265は甕の胴部片である。266は鉢と思われる。口縁端部を短く外側へ折り曲げる。267は白磁の椀である。高台は幅広で、内面を斜めに削る。器肉も厚い。胎土は灰白色を呈する。体部内面には沈線が施される。形態的特徴から太宰府陶磁器分類の白磁椀IV類(11世紀後半~12世紀前半頃)と考えられる(山本2000)。本遺構では古代(256~258、260~266)と中世(259・267)の遺物が出土している。しかし、古代の遺物の中には後述するSZ-2出土の遺物と接合する資料が含まれることから、古代の遺物の多くはSZ-2の遺物が混入したものと考えられる。よって、本遺構の時期については259と267の資料から12世紀前半~中頃と推測される。

【SE-4】 (第52・53図) グリッドB・C区に位置する。北西-南東方向を走行する。断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は最大幅0.75m、検出面からの深さは最大で0.08mである。

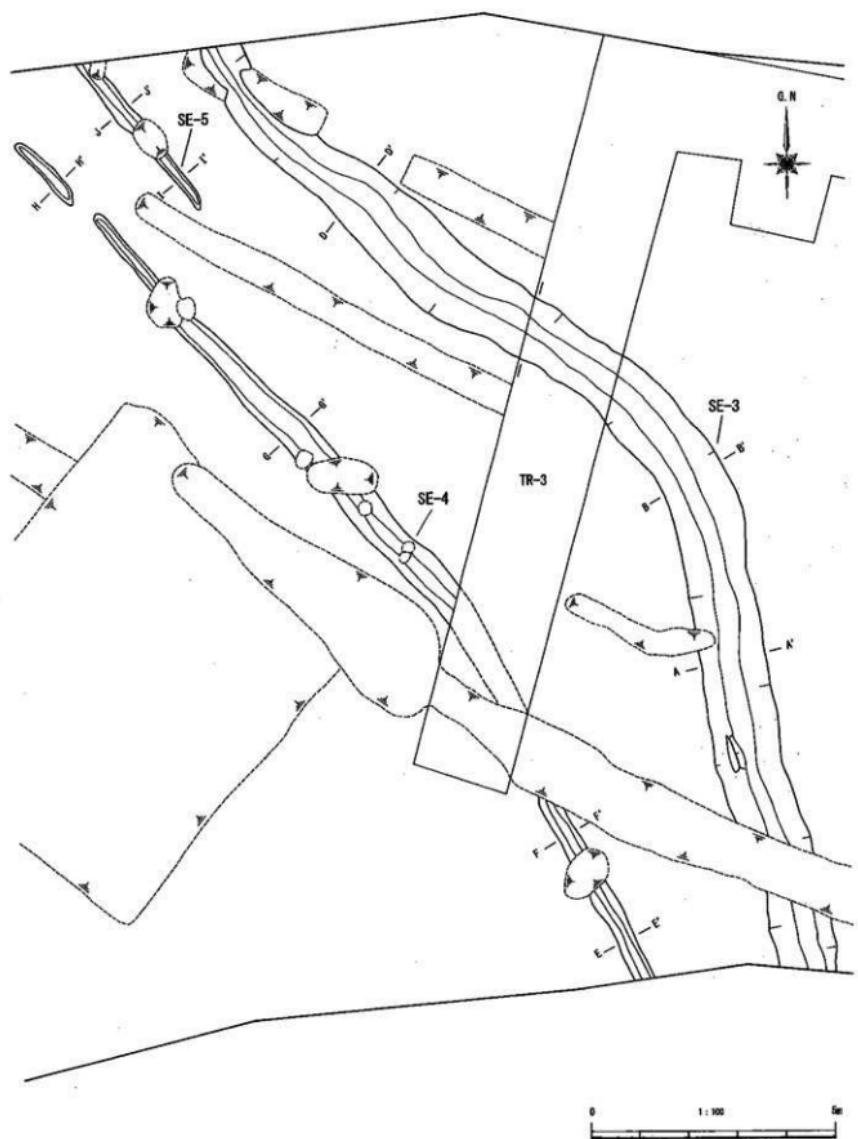
埋土下層には砂粒を多く含む層が確認できる。SE-3と同様の理由で、北側斜面の湧水点から水を引くための溝と推測される。遺物は出土していない。なお、SE-3と約3.5mしか離れておらず走行方向が類似する点から、築造時期についてはSE-3に近接する時期ではないかと推測される。

【SE-5】 (第52・53図) グリッドC区に位置する。北西-南東方向を走行する。断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は最大幅0.38m、検出面からの深さは最大で0.04mである。

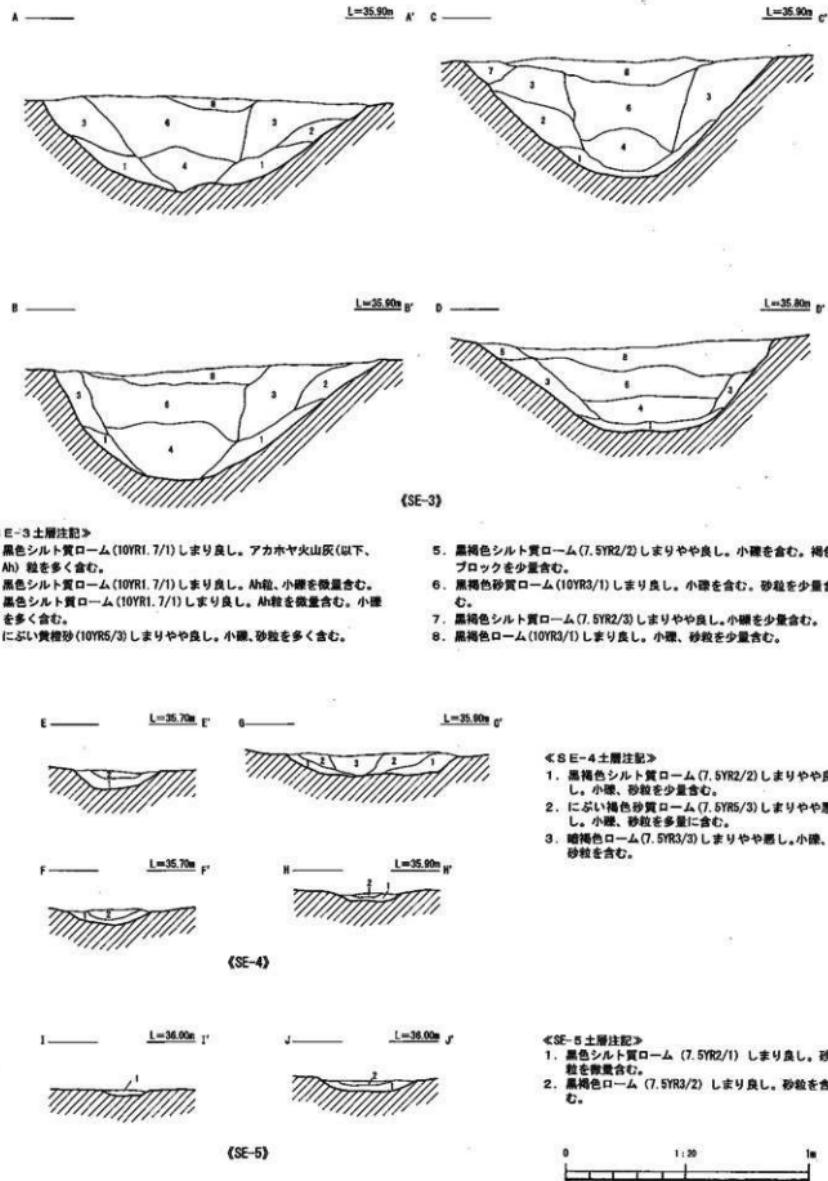
埋土下層には砂粒を多く含む層が確認できる。SE-3と同様の理由から北側斜面の湧水点の水を引くための溝と推測される。遺物は出土していない。なお、SE-3と約1.5mしか離れておらず走行方向が類似する点から、築造時期についてはSE-3に近接する時期ではないかと推測される。



第51図 SE-3出土遺物実測図 (S=1/3)



第52図 SE-3～5平面図 ($S=1/100$)



第53図 SE-3～5土層断面図 (S=1/20)

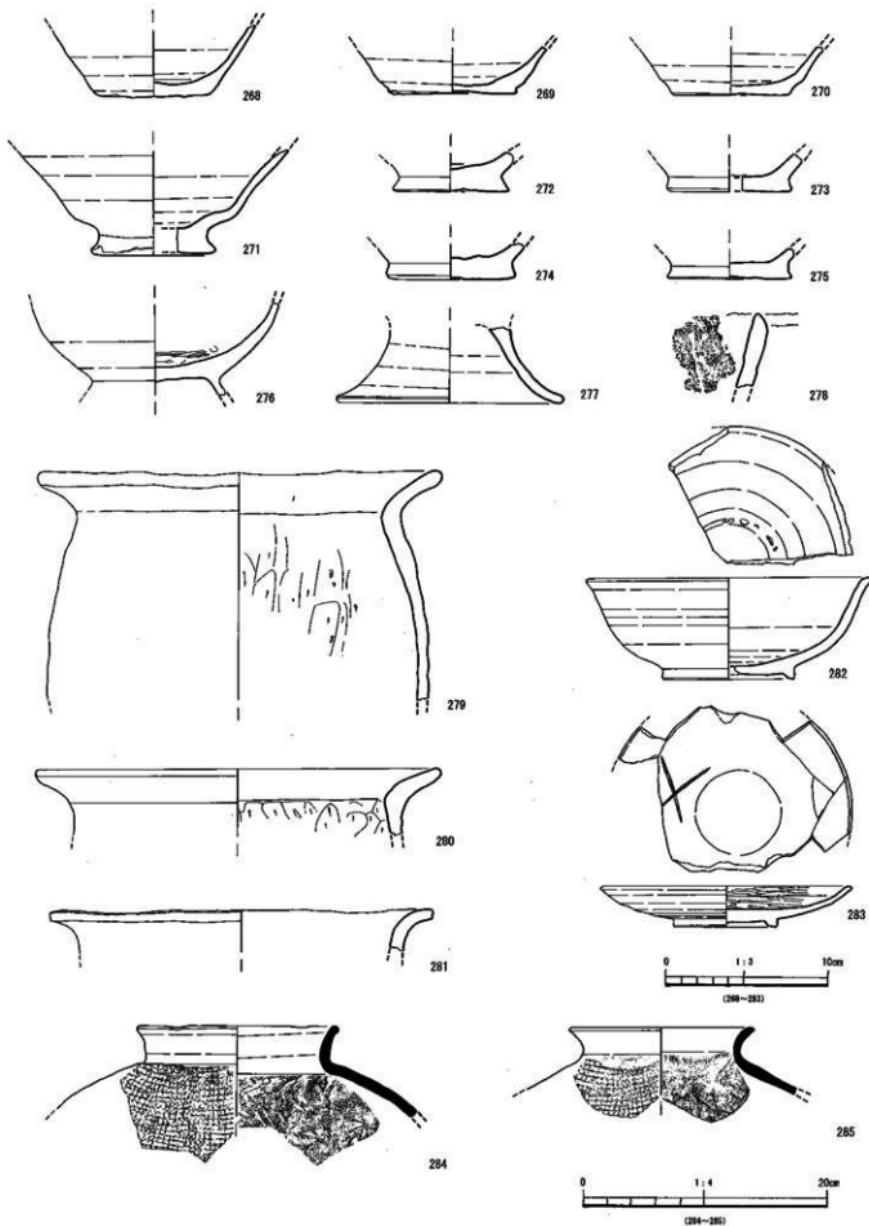
(6) 土器集積遺構 (第54~58図)

[SZ-2] グリッドB区に位置する。長さ約1.90m、幅0.60mの範囲に土器や礫が密集した状況で確認された。平面図実測終了後、西側半分のみ遺物の取り上げを行ない、精査を行なった。その結果、黒色の埋土を伴う掘り込みが確認された。掘り込みの平面形態は不整楕円形で、断面形態は皿状を呈する。掘り込みの規模は長軸2.30m、短軸0.98m、検出面からの深さ0.10mである。また、遺物の直下からは炭化物が確認された。掘り込みの平面形態と炭化物の出土から、この掘り込みは本来カマドであった可能性が考えられた。しかし、それを裏付ける焼土の検出や遺物の出土状況が認められなかつたため、判然としなかつた。

出土遺物は須恵器を中心に土師器、縁釉陶器、石器が認められた。268~281は土師器である。268~270は杯である。いずれも底面に回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。271~275は円盤状高台付碗である。271は体部下位で屈曲したち直線的に外側へ広がる形態である。276は輪高台付碗である。体部内面には赤色顔料が塗布されている。277は脚台付鉢の脚部である。278は布痕土器の口縁部である。口縁端部が舌状に尖る。279~281は甕である。279~280の口縁部形態は「く」の字形に外反する。281の口縁部は端部が短く外反する。282・283は縁釉陶器である。282は碗である。釉調は深緑色を呈する。体部中位ににぶい稜線をもち、口縁端部は外反する。高台は削り出しによる輪高台である。283は皿である。釉調は深緑色を呈する。口縁端部は短く外反する。高台は削り出しによる輪高台である。体部内面には「×」の刻書が認められる。284~299は須恵器の甕である。284~287、289は口縁部~頸部片、288は口縁部片、290~293は頸部片、294は胴部片、295~297は底部もしくは底部付近の破片、298・299は口縁部~底部まである資料である。整形方法に着目すると、「外面：格子目、内面：車輪」(284・285・297)、「外面：格子目、内面：同心円」(287・289・292・293)、「外面：格子目、内面：平行」(299)、「外面：平行、内面：同心円」(286・290・291・294~296、298)の4タイプがある。次に口縁部形態についてみてみる。284・286は頸部から口縁部へ直立ぎみに立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。口唇部は丸くまとまる。285・299の口



第54図 SZ-2実測図 (S=1/20)



第55図 SZ-2出土遺物実測図① ($S=1/3, 1/4$)



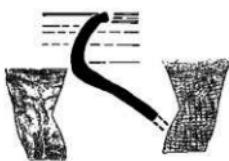
286



287



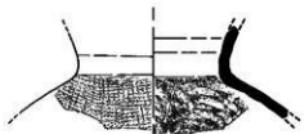
288



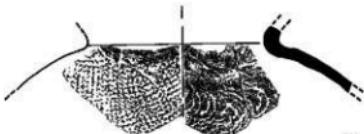
289



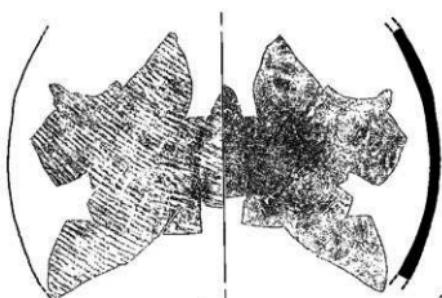
290



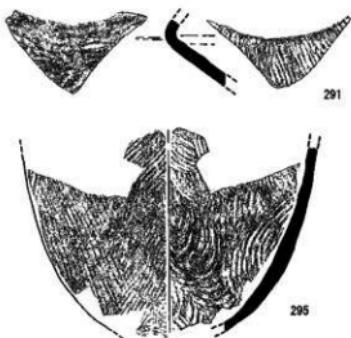
291



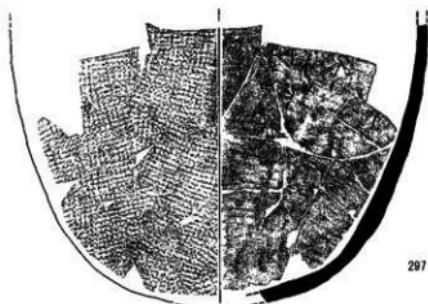
292



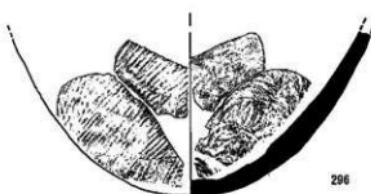
293



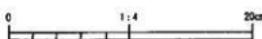
294



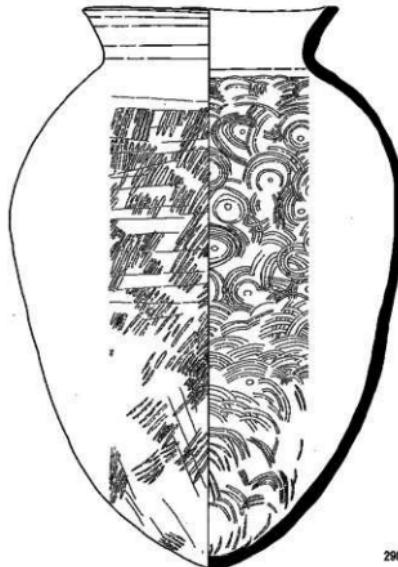
295



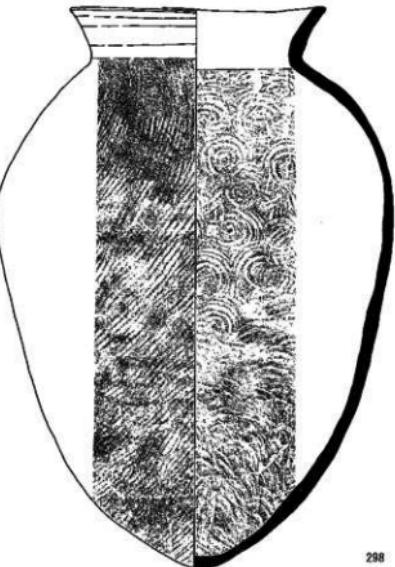
296



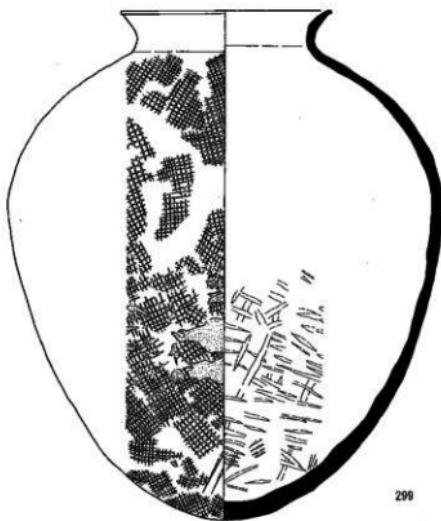
第56図 SZ-2出土遺物実測図② (S=1/4)



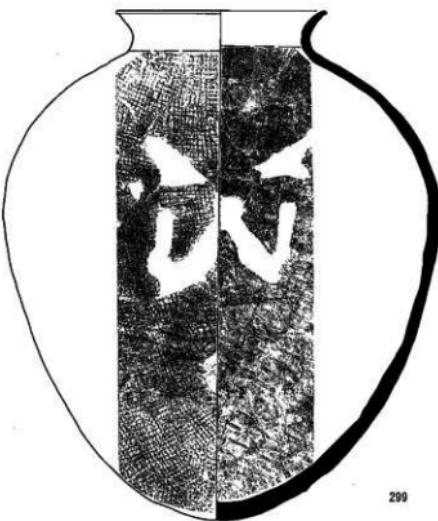
298



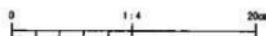
298



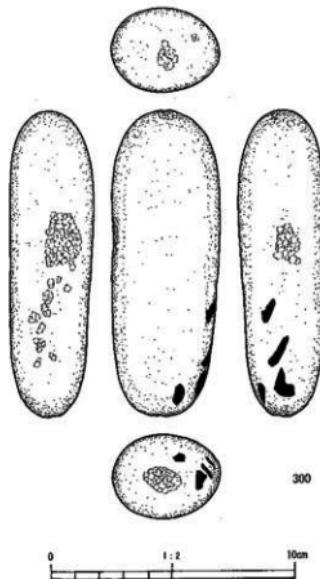
299



299



第57図 SZ-2出土遺物実測図③ (S=1/4)



第58図 SZ-2出土遺物実測図④ (S=1/2)

縁部は短く外反し、口唇部は丸くまとまる。287・298の口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は平坦面をなす。288は端部が外側へ折り曲げられている。口唇部は平坦面をなす。289の口縁部は「く」の字状に外反し、端部が外側へ折り曲げられ、口唇部は凹む。300は敲石である。砂岩製の棒状の礫を素材とする。両側面と両端部に敲打の痕跡が確認できる。

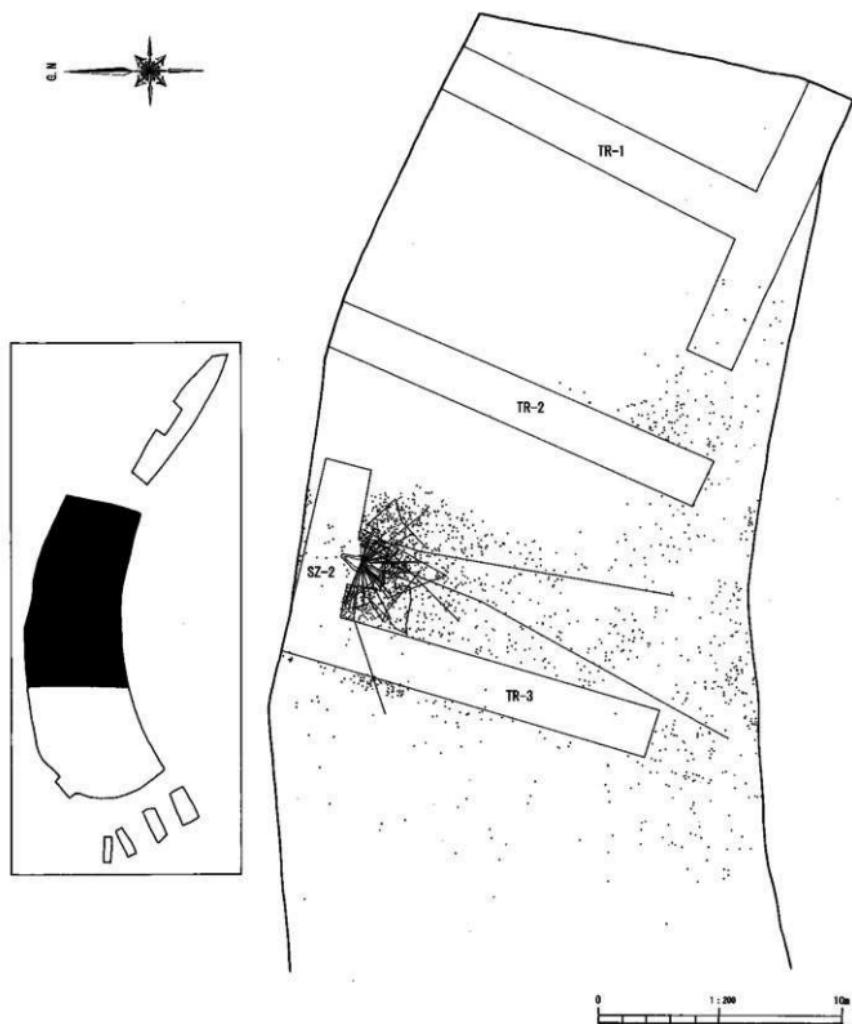
2 遺構外出土遺物 (第60~63図)

グリッドB・C区のII~III層から多量の古代の遺物と少量の中世の遺物が出土した。古代の遺物出土位置の分布状況について着目すると、SZ-2周辺に遺物の出土が多く、SZ-2から離れば離れるほど遺物の分布が希薄である状況であった。また、広い範囲でSZ-2と包含層出土遺物との接合関係が認められた(第59図)。以上のことから、B・C区の包含層から出土した古代の遺物の多くがSZ-2と関係性の強い遺物であると推測される。以下、遺構外から出土した主な古代~中世の遺物について説明する。

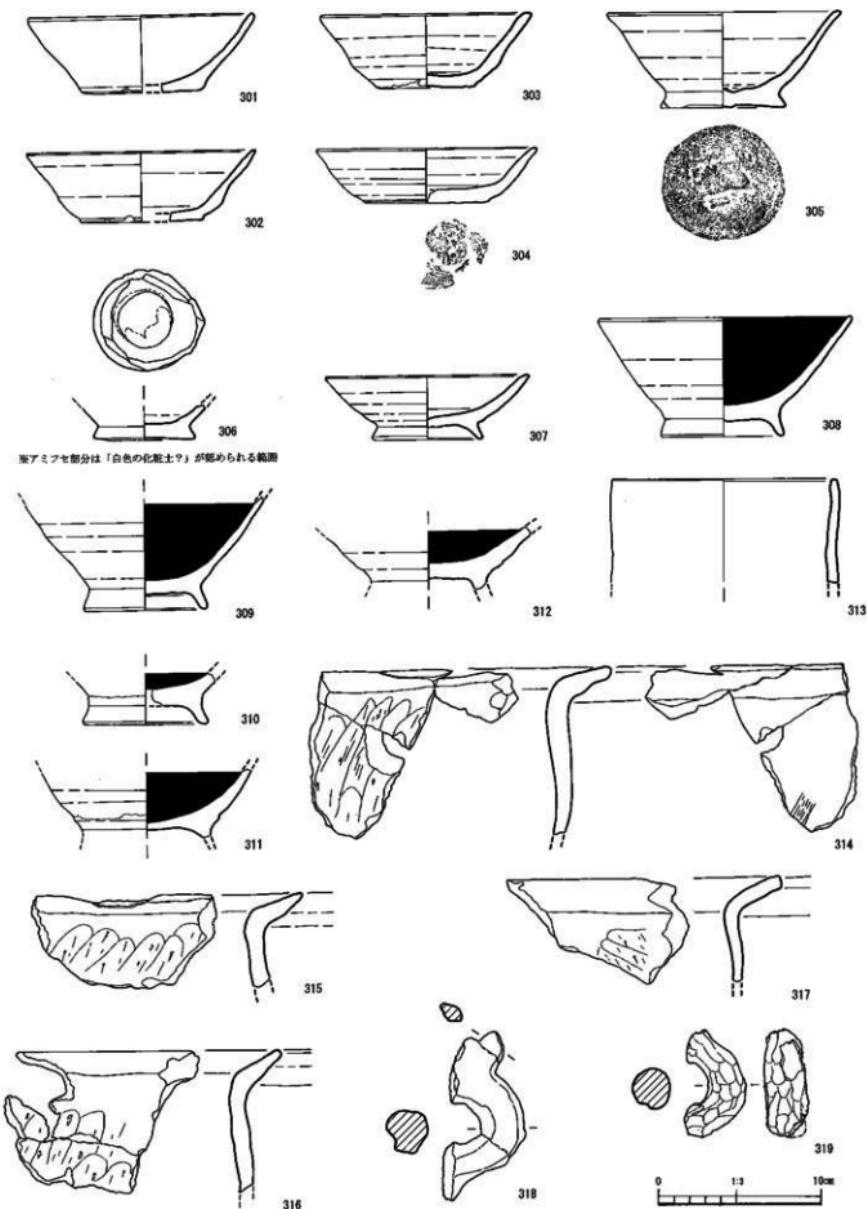
301~307、313~319は土師器である。301~304は杯である。底面は301~303が回転ヘラ切り離し、304が回転糸切り離しである。305・306は円盤状高台付椀である。306は底部内面に白色の化粧土のような付着物が認められる。307は輪高台付椀である。器高が低く、浅い。313は鉢である。底部から直立して立ち上がる形態であろう。314~317は甕である。314・317の口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は314が丸くおさめるタイプ、317が平坦面をもつタイプである。315・316の口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部外面中位に稜線をもつ。口唇部はいずれも舌状を呈する。318・319は甕もしくは瓶の把手である。318は三角形の突起をもつ資料である。319はヘラ状工具による整形痕が認められる。308~312は黒色土器である。いずれ

も内面のみ黒色となる黒色土器A類であり、かつ輪高台の付く椀である。320~327は布底土器である。320~326は口縁部片である。いずれも口縁部が舌状に尖るタイプである。327は底部片である。底部形態は尖底である。328~354は須恵器である。328は杯もしくは椀の口縁部である。外側へ直線的に開く。329は杯の底部である。330~332は椀の底部である。330は低い輪高台が付く。331は外側へ「ハ」の字状に開く輪高台が付く。332は残存状況が悪いが円盤状の高台が付くと思われる。333~344は甕である。口縁部形態は「く」の字状に外反し、口唇部を丸くおさめるもの(333・338~340)、端部が外側へ折り曲げられ、口唇部に平坦面を設けるもの(336)、端部が外側へ折り曲げられ、口唇部が凹むもの(335)、端部が上方へ折り曲げられ、口唇部が凹むもの(334・337)がある。整形方法は「外面：格子目、内面：車輪」(343)、「外面：格子目、内面：同心円」(338・339・341)、「外面：格子目、内面：平行」(344)、「外面：平行、内面：同心円」(342)がある。342は内面に末貫通の穿孔がある。345~354は壺もしくは鉢と考えられる資料である。345は短頸壺の口縁部と思われる。346・347は受け口状の二重口縁を有する壺の口縁部である。348・349は耳付き壺の胴部片と思われる。350~352は壺もしくは鉢の底部である。353は輪高台が付く壺の底部である。354は壺の頸部である。現存する口縁部上端には人為的と思われる打ち欠きの痕跡が確認できる。また、胴部には胎土の空気が十分に抜けていなかったことが原因と思われる空洞がみられる。355・356は備前系陶器の甕もしくは壺と思われる口縁部である。口縁端部が丸く折り曲げられ、玉縁状を呈する。357~366は綠釉陶器である。359は軟質、357・358・360~366は硬質で、359の胎土は黄灰色を呈するのに対し、その他のものは灰色を呈する。357~361、366は口縁部である。口縁部形態は357・360・361が直口、358がわずかに外反、359は口縁端部が短く屈曲するものである。366は耳皿の口縁部である。362~365は底部片である。362・364が輪高台、365が蛇の目高台である。363も蛇の目高台であろうか。367~369は龍泉窯系青磁である。367・368は口縁部である。367は玉縁状を呈する。368は端部が短く外反する。369は底部である。高い高台で、高台外端を広く斜めに面取りする。370は瓦器の底部である。高台は輪高台で「ハ」の字状に外側へ開く形態である。371は墨書き土器である。土師器杯もしくは椀と思われる個体の体部外面に記されているが、解説は不能である。

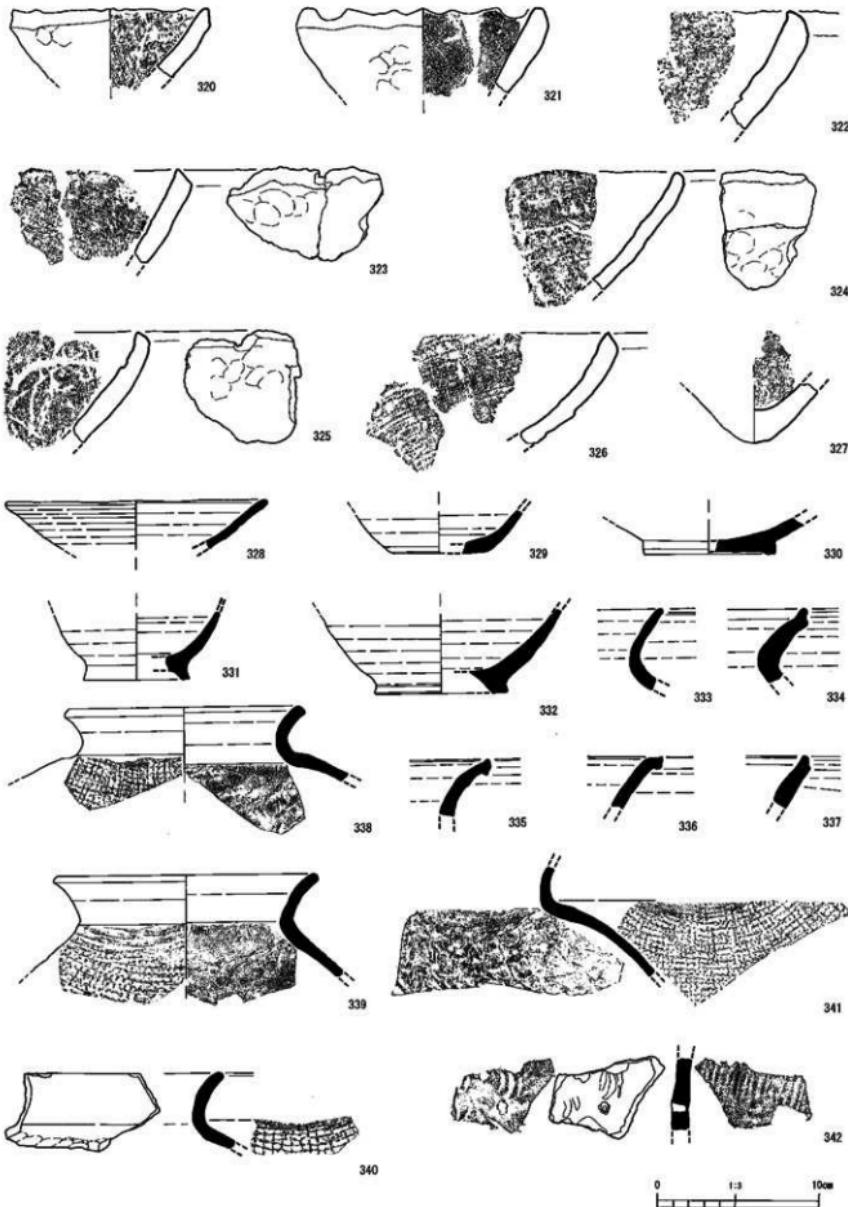
372～377は土錐である。最大幅1.5cm前後で、幅の変化があまりなく真っ直ぐなもの（372・373）、最大幅1.5cm前後で中位に最大幅をもつもの（376・377）、最大幅2.0cm前後で全体的にくびれとした印象を受けるもの（374・375）がある。378は水輪の未製品であろうか。片面のみ敲打による整形が認められる。全体の形状と整形の痕跡から水輪の未製品ではないかと考えたが、台石の可能性もある。



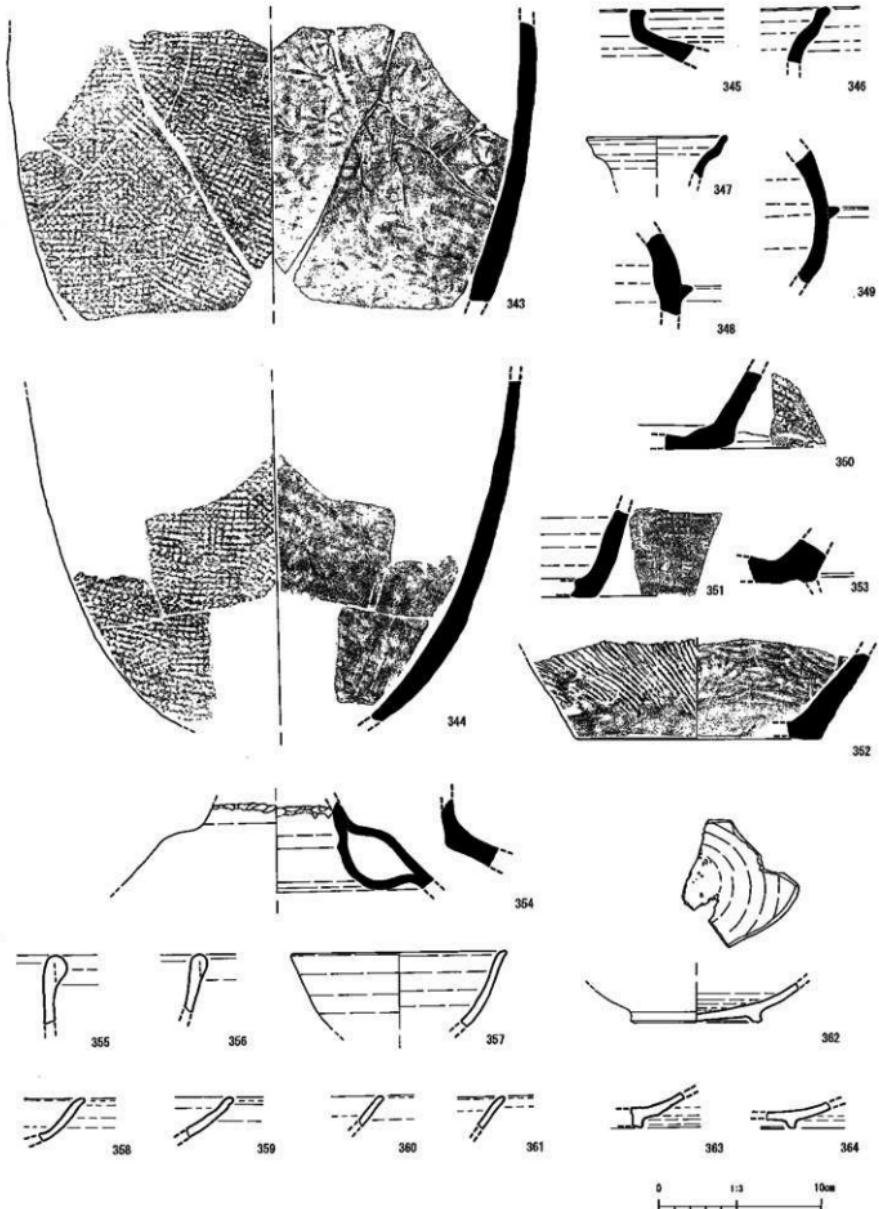
第59図 SZ-2出土遺物と包含層出土の古代遺物との接合関係図 (S=1/200)



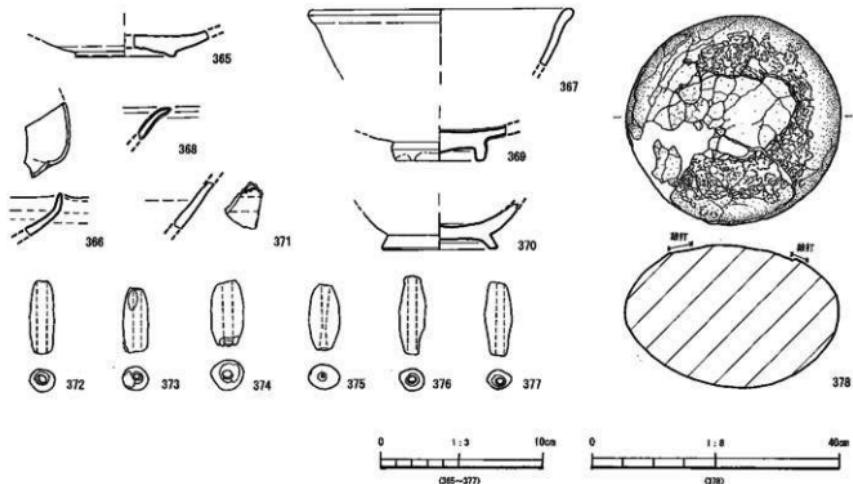
第60図 古代～中世遺構外出土遺物実測図① (S=1/3)



第61図 古代～中世遺構外出土遺物実測図② (S=1/3)



第62図 古代～中世遺構外出土遺物実測図③ (S=1/3)



第63図 古代～中世遺構外出土遺物実測図④ (S=1/3、1/8)

第4表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表①

報告書 No.	種類	器形	既存部位	出土場 所	層位	尺度 (cm)		色調		調査		報告	測量
						口部	底部	表面	内面	表面	内面		
35	土師器	杯・筒形?	口縁部	35-18				にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	田輪ナゲ	田輪ナゲ		435
36	土師器	折々筒形?	口縁部	35-19				にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	田輪ナゲ	田輪ナゲ		441
37	土師器	瓶	底部	35-19				明るい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	田輪ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	440
38	土師器	杯	先端	P-27	12.2	7.0	4.6	緑 (7.5786/4)	にぶい黄緑 (7.5786/3)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ		181
39	土師器	円錐状高台付柄 体部・底部	ビット					にぶい青 (7.5786/2)	にぶい黄緑 (7.5786/3)	田輪ナゲナダ、底: 開口 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ		442
40	須恵器	瓶	側面	P-27				黒	黒	筋子目タクシ	筋子目タクシ	差額表示具備	436
41	土師器	円錐状高台付柄 体部	底部	35-14	16.4	7.8	9.25	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ		14
42	土師器	円錐状高台付柄 体部	底部	35-14	13.7	7.8	6.3	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/2)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ		13
43	唐物七 器	杯	口縁部～底部	35-14	(12.0)	7.0	4.5	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 タケリ、底: 田輪ハーフ切妻 ナゲ	田輪ナゲ	「茶」	148
44	土師器	杯	口縁部～底部	35-20	(23.4)			にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロコナダ	ロコナダ、底: ハラクツ 青面にスリ付ける、反転復元	91	
45	土師器	円錐状高台付柄 体部・底部		35-20		(6.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	青・高: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	445
46	土師器	円錐状高台付柄 体部・底部		35-20		(7.4)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	底: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフナゲ	田輪ナゲ	反転復元	445
47	土師器	杯	口縁部	35-20				にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	田輪ナゲ	田輪ナゲ		445
48	土師器	杯	口縁部～底部	35-21	(12.0)	8.5	4.4	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ・田輪ハーフ タケリ、底: 田輪ハーフ切妻 ナゲ	田輪ナゲ	反転復元、SH-1と複合	90
49	土師器	杯	口縁部～底部	35-21	(13.0)	7.5	4.1	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ・田輪ハーフ タケリ、底: 田輪ハーフ切妻 ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	87
50	土師器	杯	体部～底部	35-21		6.7		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	底: 田輪ナゲ、底: 田輪ハーフ タケリ	田輪ナゲ	反転復元、SH-1と複合	109
51	土師器	杯	口縁部～底部	35-13	(13.0)	(7.2)	3.0	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	96
52	土師器	杯	口縁部～底部	35-15	(13.0)	(7.2)	6.55	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	104
53	土師器	杯	口縁部～底部	35-13	(13.0)	(7.0)	4.9	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ロ一休: 田輪ナゲ、底: 田輪 ハーフ切妻ナゲ	田輪ナゲ	反転復元	106

第5表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表②

報告書 No.	種類	器種	施設部位	出土地 点	層位	測量 (cm)			色調	測量			説明	参考	実測値
						口径	底径	高さ		外側	内側	外側	内側		
54	土師器	杯	八脚部～脚 部	SE-13		(13.6)	5.6	4.9	にじみ 青灰 (7.5786/4)	明灰灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 ケヌス、底：脚部～ハラリナ ナグ	内側ナグ	内側	内側復元	179
55	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.2)	(6.0)	4.5	緑 (5.5786/3)	にじみ 緑 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：平底 内側ナグ	内側復元	180		
56	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.6)	6.0	5.0	にじみ 青灰 (7.5786/4)	にじみ 青灰 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：平底 内側ナグ	内側復元	181		
57	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.7	6.0	5.3	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	182		
58	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.9	6.7	5.15	にじみ 青灰 (7.5786/4)	にじみ 青灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	183		
59	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.9	6.9	5.1	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	184		
60	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.6	6.4	5.0	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	185		
61	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.6)	6.6	5.9	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	186		
62	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.2)	6.3	4.6	青灰 (7.5786/5)	明灰灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	187		
63	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.6	6.7	5.0	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	188		
64	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.6)	(6.0)	4.7	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	189		
65	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.8)	(6.1)	4.3	緑 (5.5786/3)	緑 (5.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	190		
66	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		13.0	6.2	5.1	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	191		
67	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.2)	6.8	4.8	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	192		
68	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.0	6.2	4.9	にじみ 青 (7.5786/4)	明灰灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	193		
69	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(11.6)	(5.9)	5.2	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	194		
70	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(11.6)	5.65	4.5	緑 (5.5786/3)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側に墨付有、内側復元	195		
71	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.3)	6.7	5.3	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	196		
72	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.6)	(6.0)	4.8	にじみ 青 (7.5786/4)	明灰灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	197		
73	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.3	6.0	4.9	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	198		
74	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.4)	(6.4)	4.8	にじみ 青 (7.5786/3)	にじみ 青 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	199		
75	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.6)	(5.7)	4.6	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	200		
76	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.5)	(6.0)	4.7	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	201		
77	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.0)	(6.7)	5.3	青灰 (5.5786/3)	青灰 (5.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	202		
78	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.0)	(6.4)	4.9	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	203		
79	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.6)	(6.0)	4.9	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	204		
80	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.2)	6.6	5.3	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	205		
81	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		13.5	7.6	4.3	明灰灰 (7.5786/4)	明灰灰 (7.5786/2)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側にスコボ有	206		
82	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.4)	(6.6)	6.0	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	207		
83	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.9	6.5	4.9	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側ナグ	208		
84	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(13.4)	5.9	4.5	緑 (5.5786/3)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	209		
85	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.0)	(6.0)	4.8	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	210		
86	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		12.8	6.55	4.8	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側	211		
87	土師器	杯	口縁部～脚 部	SE-13		(12.6)	(5.9)	4.4	にじみ 青 (7.5786/4)	にじみ 青 (7.5786/4)	ローブ：内側ナグ、底：脚部 内側ナグ	内側復元	212		

第6表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表③

検査番 No.	種類	基準	縦横幅 底土量 cm	層位	寸法 (cm)			色調		構造		備考	実測元
					口径	底径	高さ	外観	内面	外觀	内面		
					(mm)	(mm)	(mm)						
88	土師器	杯	口縁部～底 部	SH-13	(11.6)	(6.6)	3.4	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	106
89	土師器	杯	口縁部～底 部	SH-13	(12.6)	(7.6)	3.85	にぶい緑 (7.5786/3)	にぶい緑 (7.5786/3)	ローベー：輪軸ナメ、底：輪軸 ローベー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	82
90	土師器	杯	口縁部～底 部	SH-13	(12.6)	(6.1)	4.1	にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ローベー：輪軸ナメ、底：輪軸 ローベー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	37
91	土師器	杯	口縁部～底 部	SH-13	(13.6)	(8.6)	3.9	にぶい黄 (7.5786/3)	にぶい黄 (7.5786/3)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	113
92	土師器	杯	口縁部～底 部	SH-13	(14.6)	(8.6)	3.9	にぶい黄 (7.5786/3)	にぶい黄 (7.5786/3)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	110
93	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		緑	緑	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	181
94	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(7.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	89
95	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(7.6)		緑	緑	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	43
96	土師器	杯	全体～底部	SH-13		7.4		オリーブ青 (7.5786/2)	オリーブ青 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	136
97	土師器	杯	全体～底部	SH-13		7.2		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	51
98	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(7.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	64
99	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(7.6)		にぶい黄 (7.5786/5)	にぶい黄 (7.5786/5)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	44
100	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい黄 (7.5786/5)	にぶい黄 (7.5786/5)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	183
101	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい緑 (7.5786/2)	にぶい緑 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	72
102	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい緑 (7.5786/2)	にぶい緑 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	66
103	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	61
104	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	40
105	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		明褐色 (7.5786/2)	明褐色 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	52
106	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(8.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	144
107	土師器	杯	全体～底部	SH-13		6.2		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	165
108	土師器	杯	全体～底部	SH-13		6.2		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	180
109	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.1)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	142
110	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	173
111	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.6)		明褐色 (7.5786/2)	明褐色 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	45
112	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.6)		にぶい緑 (7.5786/2)	にぶい緑 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	59
113	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.6)		にぶい緑 (7.5786/2)	にぶい緑 (7.5786/2)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	79
114	土師器	杯	全体～底部	SH-13		5.9		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	82
115	土師器	杯	全体～底部	SH-13		4.7		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	133
116	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.6)		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	176
117	土師器	杯	全体～底部	SH-13		3.4		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	174
118	土師器	杯	全体～底部	SH-13		4.8		緑	緑	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	168
119	土師器	杯	全体～底部	SH-13		4.4		にぶい緑 (7.5786/4)	にぶい緑 (7.5786/4)	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	内面に細網底痕	134
120	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(5.15)		緑	緑	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	177
121	土師器	杯	全体～底部	SH-13		(6.2)		灰青	灰青	ハーメー：輪軸ナメ、底：輪軸 ハーメー：輪軸ナメ	輪軸ナメ	復元復元	182

第7表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表④

観察番号	種類	器種	既存剖面	既土地点	層位	測定 (cm)	色調		質感		圖考	実測値			
							口側	底側	基部	外面	内面				
122	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		6.7	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	79		
123	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		6.6	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	139		
124	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		6.8	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	179		
125	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		7.9	緑 (7.576/4)	緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	147		
126	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		7.8	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	194		
127	土師器	杯	底部～直脚	SE-13		6.4	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	145		
128	土師器	杯?	直脚～斜脚	SE-13		14.4	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ	粗粒ナメ	反射復元	189		
129	土師器	口筒型	直脚～斜脚	SE-13		14.4	6.4	8.8	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	115
130	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		14.9	6.2	5.9	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	7	
131	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		13.3	6.3	6.6	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	85	
132	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		15.2	7.0	7.1	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	181	
133	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		13.7	7.0	6.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	68	
134	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		17.3	6.6	6.5	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	142	
135	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		14.0	7.3	6.6	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	158	
136	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		13.0	6.0	4.9	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	110	
137	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		14.3	7.4	5.9	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	121	
138	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		14.5	7.0	6.6	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	458	
139	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		15.0	7.0	4.7	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	181	
140	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		13.4	6.4	6.4	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	183	
141	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		11.4	7.0	6.65	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	122	
142	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		13.2	7.0	3.1	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	185	
143	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	135		
144	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.1	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	71		
145	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	156		
146	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		6.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	163		
147	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.6	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	78		
148	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		6.8	緑 (7.576/4)	緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	81		
149	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		6.5	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	128		
150	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	149		
151	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.7	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	132		
152	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.4	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	75		
153	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.0	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	96		
154	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.4	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	粗粒ナメ	反射復元	106		
155	土師器	円錐状直脚付瓶	直脚～斜脚	SE-13		7.2	にじみ緑 (7.576/4)	にじみ緑 (7.576/4)	青	粗粒ナメ 切削ナメ	ヘラミオキ	反射復元	120		

第8表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑤

觀察番 号	種類	縁様	出土地 点	層位	法量 (cm)		外觀		調査		備考	測定番 号	
					口径	底径	壁高	外腹	内腹	外腹	内腹		
								厚	圓底灰	底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	41
156	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			7.1	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	
157	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			7.0	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	42
158	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			7.0	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	43
159	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			6.8	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	44
160	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			(6.8)	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	45
161	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			6.4	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	46
162	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			(6.4)	上：S-H (7.076/4)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	47
163	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			(6.2)	上：S-H (7.076/3)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	48
164	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13				上：S-H (7.076/3)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	49
165	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			6.0	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	50
166	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13				上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	51
167	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			6.6	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	52
168	土師器	円盤状凸唇付碗	体部～底部	SB-13			7.0	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	53
169	土師器	縁高合付鉢	体部～底部	SB-13			(11.7) (6.8)	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	54
170	土師器	縁高合付鉢	体部～底部	SB-13				上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	55
171	土師器	縁高合付鉢	体部～底部	SB-13			(8.0)	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	56
172	土師器	縁高合付鉢	体部～底部	SB-13			6.8	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	57
173	土師器	縁高合付鉢	体部～底部	SB-13			(8.0)	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	58
174	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(10.0)	6.7	5.25	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	59
175	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(10.0)	(8.0)	5.05	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	60
176	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(10.0)	(7.0)	6.2	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	61
177	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(10.0)	6.6	4.5	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	62
178	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(10.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	63
179	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(11.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	64
180	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(12.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	65
181	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(11.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	66
182	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(11.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	67
183	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	14.2			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	縁内面に墨、灰釉復元	68
184	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(14.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ、底：圓軸ヘ 斜り後ナダ	内輪ナダ	灰釉復元	69
185	土師器	縁高合付鉢	口縁部～底部	SB-13	(16.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	縁内面に墨、反転復元	70
186	土師器	高杯	口縁部～底部	SB-13			(13.0)	上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	反転復元	71
187	土師器	高杯	口縁部～底部	SB-13	(21.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	反転復元	72
188	土師器	高杯	口縁部～底部	SB-13	(16.0)			上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	反転復元	73
189	土師器	高杯	口縁部～底部	SB-13				上：S-H (7.076/2)	下：S-H (7.076/2)	底：圓軸ナダ	内輪ナダ	反転復元	74

第9表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑥

報告書 No.	時期	器種	発存部位	出土地 名	層位	法度 (cm)		色調		説明		報告書	測定No.		
						口径	底径	高さ	外面	内面	外側	内側			
190	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(23.2)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ、脚：ナダ	外側にスス付有、灰釉微光	402	
191	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(19.7)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側にスス付有、内側に 「十」字の部分、灰釉微光	393	
192	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(25.0)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側にスス付有、灰釉微光	332	
193	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(17.5)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ヨコナ ダヘラズリ	ロ：ナダ、脚：ナダ後ミ ガキ付有	側面内側にヘラ状の工具に なる判別、内側にスス付 有、灰釉微光	280	
194	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(18.0)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	側面内側に脚付工具による 判別、灰釉微光	401	
195	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		24.8			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側明帯にスス付有、灰釉 微光	35	
196	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(19.5)			灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側にスス付有、灰釉微光	236	
197	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(27.6)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ヨコナ ダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ後ミ ガキ付有	側面内側にヘラ状の工具に なる判別、内側にスス付 有、灰釉微光	35	
198	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(23.0)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側内側に脚付工具による 判別、灰釉微光	404	
199	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(19.0)			に赤い斑模 (0.076±0)	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	外側明帯にスス付有、灰釉 微光	334	
200	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(16.4)			灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	灰釉微光	224	
201	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(12.7)	—	8.3	灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ナダ	ナダ	灰釉微光	336	
202	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(13.4)			灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ後ミ ガキ付有	外側にスス付有、灰釉微光	335	
203	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13		(10.0)			灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ	ロ：ヨコナダ	外側明帯にスス付有、灰釉 微光	196	
204	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ハケ日	ハケ日、脚：ハラズリ		392	
205	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ後ミ ガキ付有	外側にスス付有、灰釉微光	40	
206	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側明帯にスス付有、灰釉 微光	90	
207	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ナダ	ナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	225	
208	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側明帯にスス付有	39	
209	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側明帯にスス付有	391	
210	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダヘ ラズリ	外側明帯にスス付有	398	
211	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ナダ、脚：ハケ日ナダ	ロ：ナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	403	
212	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側にスス付有	397	
213	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	400	
214	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	226	
215	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	395	
216	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側内側にヘラ状工具によ る判別、外側にスス付有	396	
217	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ	ロ：ヨコナダ	外側にスス付有	394	
218	土師器	壺	口縁部～胴部	SE-13					灰釉	に赤い斑模 (0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	外側内側にヘラ状工具によ る判別、外側にスス付有	327	
219	土師器	壺	底部	SE-13					灰釉	(0.076±0)	橋子日タキ	平滑 (無味)		200	
220	土師器	底	口縁部～脚部	SE-13					灰釉	(0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ハケ日 ナダヘラズリ	ロ：ヨコナダ、脚：ハラズリ	外側にスス付有	399	
221	土師器	底	口縁部～脚部	SE-13		(34.0)			灰釉	(0.076±0)	ロ：ヨコナダ、脚：ナダ	ロ：ヨコナダ、脚：ハラズリ	側面内側に脚付工具による 判別、灰釉微光	405	
222	土師器	底	底部～底部	SE-13		(16.0)			灰釉	(0.076±0)	ナダ	ハラズリ・ナダ	外側にスス付有、灰釉微光	185	
223	土師器	底	底部～脚部	SE-15					灰釉	(0.076±0)	ナダ	ナダ・ハラズリ	外側にスス付有、灰釉微光	190	

第10表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑦

観察番号	種類	器種	器名	出土地名	層位	底面 (cm)			色調		裏面		備考	測定番号		
						口径	底径	高さ	外観	内面	外観	内面				
224	土師器	瓶	網部～底部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	黒オサエ・ヘタケヅリ・ナデ	ヘタケヅリ・ナデ		189		
225	土師器	壺	口部部～底部	山口	-	(13.05)	-	8.2	にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	ナデ	若目灰褐色	反転復元	46		
226	土師器	有柄土瓶	口部部～底部	山口	-	(14.15)	-		にぶい黄褐色 (3978/4)	明黄色 (3978/4)	ナデ	青川灰褐色	反転復元	286		
227	土師器	有柄土瓶	口部部～底部	山口	-			-	にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	ナデ後縁オヌヌ	若目灰褐色	反転復元	361		
228	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-				端縁部 (592/1)	端縁部 (592/1)	ロマロザマ、脚：勝子目タキ タケヅリナデ、脚：勝子目タキ	口：タコナデ、脚：ナデ		249		
229	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	平行タキ	平行凸て具痕	反転復元	249		
230	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-	(13.45)			灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	勝子目タキ後縁ナデ	出転ナデ	反転復元	250		
231	烈瓦器	盤	口縁部～脚部	山口	-	(13.4)			灰白ローピー (3978/4)	灰褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	内外面に自然輪、反転復元	344		
232	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-	(14.45)			灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	勝子目タキナデ、蓋：ナデ	勝子目タキナデ、蓋：ナデ	反転復元	261		
233	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-	(13.15)			灰白ローピー (3978/4)	灰白ローピー (3978/4)	勝子目タキナデ	勝子目タキナデ	反転復元	16		
234	灰少釉陶	水注	底部～底部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	灰黃褐色 (3978/4)	圓輪ナデ(端縁)	出転ナデ(端縁)	底面内外面にスベ付着、反転復元	1		
235	須恵器	盤	口縁部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	圓輪ナデ(端縁)	圓輪ナデ(端縁)		21		
236	土師器	不規	口縁部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	勝子目タキ(須縫状の跡体 から)	ナデ張り状の直痕		196		
237	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	「奉」	409		
238	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	出転ナデ	出転ナデ・不規(直縫)	「口キ」	406		
239	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-	(12.10)	(3.9)	4.4	灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	一掛・四輪ナデ、底：四輪 ハサウヘリ後ナデ	四輪ナデ	反転復元	414		
240	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	411		
241	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字不規	410		
242	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	414		
243	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	411		
244	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字不規	410		
245	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字不規	411		
246	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	412		
247	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	413		
248	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	文字斗形	412		
249	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	435		
250	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-	(6.0)			にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	底：田輪ナデ、面：圓輪ナ デ後ナデ	田輪ナデ	反転復元	435		
251	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-	(7.4)			灰褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	底：不明(黒褐色)、面：四輪 ハサウヘリ後ナデ	小形(黒褐色)	反転復元	436		
252	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ(端縁)	圓輪ナデ	反転復元	438		
253	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	434		
254	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-	(9.3)	6.6	1.9	にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	四輪ナデ	四輪ナデ	反転復元	435		
255	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	435		
256	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	435		
257	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				灰褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	四輪ナデ(端縁)	四輪ナデ	反転復元	436		
258	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				灰褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	438		
259	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	四輪ナデ	四輪ナデ	反転復元	434		
260	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ	反転復元	435		
261	土師器	杯	口縁部～脚部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	ナデ後縁オヌヌ(黒褐色)	若目灰褐色	反転復元	437		
262	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				灰褐色 (3978/4)	灰褐色 (3978/4)	ヨコナデ	ヨコナデ	反転復元	436		
263	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	平行タキ	平行凸て具痕	反転復元	432		
264	須恵器	杯	口縁部～脚部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	平行タキ	平行凸て具痕	反転復元	437		
265	須恵器	盤	口縁部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	中央凸出直輪・同心凹凸て 具輪ナデ	外周自然輪		431		
266	須恵器	盤	口縁部～脚部	山口	-				灰 (3978/4)	灰 (3978/4)	圓輪ナデ	圓輪ナデ		430		
267	白磁	碗	全体～底部	山口	-				灰 (3978/2)	灰 (3978/2)	四輪ナデ(端縁) タケヅリ、底：四輪ヘアリ後ナ デ(端縁)	四輪ナデ(端縁)	反転復元	446		
268	土師器	杯	全体～底部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	底：四輪ナデ、底：圓輪ヘア リ後ナデ	四輪ナデ(端縁)	反転復元	436		
269	土師器	杯	全体～底部	山口	-				にぶい黄褐色 (3978/4)	にぶい黄褐色 (3978/4)	ナデ	ナデ	反転復元	436		

第11表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑥

監査番号	種類	種類	種類	出土地點	層位	法面 (cm)			色調	調査		備考	測量員	
						口径	底径	厚さ		外側	内側			
279	土師器	杯	体部～底部	S2-5		(7.2)			灰褐色 (10YR5/5)	灰黃色 (10YR5/5)	体：細縫ナメ、底：輪郭ヘア 切妻後ナメ	田舎ナメ	切妻後光	266
281	七輪器	円筒状火合 付器	体部～底部	S2-5		(7.6)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪 底：外輪ナメ	内輪ナメ	内輪復元	263
282	土師器	円筒状火合 付器	体部～底部	S2-2		(7.1)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪ナメ 底：外輪ナメ	内輪ナメ	内輪復元	267
273	土器皿	円筒状火合 付器	体部～底部	S2-5		(7.4)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪ナメ 底：外輪ヘアリ後ナ メ	内輪ナメ	内輪復元	268
274	土師器	円筒状火合 付器	体部～底部	S2-2		(7.6)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪ナメ 底：外輪ヘアリ後ナ メ	内輪ナメ	内輪復元	266
275	土師器	円筒状火合 付器	体部～底部	S2-2		7.5			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪ナメ 底：外輪ヘアリ後ナ メ	内輪ナメ	内輪復元	271
276	土師器	輪高台付器	体部～底部	S2-2					に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	体：内輪ナメ 底：外輪ヘアリ後ナ メ	内輪ナメ	内輪復元	272
277	土器皿	輪高台付器	脚部	S2-2		(13.5)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	内輪ナメ	内輪ナメ	内輪復元	269
278	土器皿	輪高台付器	脚部	S2-2					に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	内輪ナメ	内輪ナメ	内輪復元	270
279	土師器	盤	口縁部～脚部	S2-2		(24.3)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	口：ヨコナメ、底：ハラ後ナ メ	口：ヨコナメ、底：ハラ後ナ メ	内輪復元	261
280	土師器	盤	口縁部～脚部	S2-2		(24.4)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	262
281	土師器	盤	口縁部	S2-2		(23.4)			に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	263
282	輪高台付器	盤	口縁部～底 部	S2-2	(17.2)	(7.8)	6.3	灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	口：体：内輪ナメ（黒縫）、 底：ケツナメ。底：内輪ヘアリ 後ナメ	口：ヨコナメ、底：ハラ後ナ メ	内輪復元	11	
283	輪高台付器	盤	口縁部～底 部	S2-2	(18.2)	6.5	2.5	灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	口：体：内輪ナメ（黒縫）、 底：ケツナメ。底：内輪ヘアリ 後ナメ	ヨコナメ	内輪復元	12	
284	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2	(16.6)			灰褐色 (10YR5/2)	暗褐色 (10YR5/2)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	260	
285	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2	(14.6)			灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	263	
286	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2	(16.6)			灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	264	
287	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2	(17.2)			灰褐色 (10YR5/2)	灰褐色 (10YR5/2)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	267	
288	須恵器	鏡	口縁部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	279	
289	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	286	
290	須恵器	鏡	口縁部～脚部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	285	
291	須恵器	鏡	脚部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	266	
292	須恵器	鏡	脚部～鏡部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	274	
293	須恵器	鏡	脚部～鏡部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	282	
294	須恵器	鏡	脚部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	275	
295	須恵器	鏡	脚部	S2-2				灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	286	
296	須恵器	鏡	脚部～底部	S2-2	(2.13)			に近い黒 (7.5YR5/4)	深灰 (2.5YR5/2)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	276	
297	須恵器	鏡	脚部～底部	S2-2				灰褐色 (10YR5/2)	灰褐色 (10YR5/2)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	277	
298	須恵器	鏡	脚部～底部	S2-2	(29.3)	46.1		灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	271	
299	須恵器	鏡	脚部～底部	S2-2	(17.0)	1.2	41.9	灰 (7.5YR5/4)	灰 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	272	
301	土師器	杯	口縁部～底 部	AH. I	(13.6)	(7.2)	4.7	に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	273	
303	土師器	杯	口縁部～底 部	II	(13.0)	(7.6)	4.3	に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	270	
303	土師器	杯	口縁部～底 部	III	(12.8)	(6.4)	4.5	に近い黒 (7.5YR5/4)	に近い黒 (7.5YR5/4)	ヨコナメ	ヨコナメ	内輪復元	271	

第12表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑨

報告書 No.	種類	器種	既存位置	出土地 名	周辺	寸法(cm)			色調		備考	見出No.	
						口径	底幅	高さ	外壁	内壁			
						(mm)	(mm)	(mm)					
204	土師器	杯	口縁部～底 部	HOK	I	(13.15)	(7.45)	3.4	にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ロヘ体：陶輪ナゲ、底：陶輪 赤あり	灰釉復元	221
205	土師器	内盤取合式 鉢	口縁部～底 部	HOK	II	(13.15)	7.4	3.8	にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/3)	ロヘ体：陶輪ナゲ、底：陶輪 赤あり	灰釉復元	21
206	土師器	内盤取合式 付鉢	全体～底部	HOK	I		6.2		にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/2)	ロヘ体：陶輪ナゲ、底：陶輪 赤あり	灰釉内に白色の化粧土々 付帯、灰釉復元	210
207	土師器	輪高台付鉢	口縁部～底 部	HOK	I	(12.12)	(6.35)	3.5	にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 赤あり	灰釉復元	222
208	黑色土 器	輪高台付鉢	口縁部～底 部	HOK	II	(13.15)	7.4	3.5	にじる黒 (7.576/4)	にじる黒 (7.576/4)	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 黒あり	灰釉復元	22
209	黑色土 器	輪高台付鉢	全体～底部	HOK	III		(7.45)		にじる黒 (7.576/2)	底	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 黒あり	灰釉復元	208
210	黑色土 器	輪高台付鉢	全体～底部	HOK			(7.45)		底	底	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 (7.576/2)	灰釉復元	209
211	黑色土 器	輪高台付鉢	全体～底部	HOK	I				にじる黒 (7.576/2)	底	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 ヘラ付ナゲナダ	灰釉復元	206
212	黑色土 器	輪高台付鉢	全体～底部	AOK	I				にじる黒 (7.576/2)	底	ロヘ高：陶輪ナゲ、底：陶輪 ヘラ付ナゲナダ	灰釉復元	207
213	土師器	杯	口縁部～底 部	HOK	II	(11.4)			にじる赤 (7.576/4)	にじる黒 (7.576/2)	ナダ？(摩滅) ナダ？(摩滅)	灰釉復元	211
214	土師器	甕	口縁部～底 部	HOK					にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ナダ・ハケ目	ヨコナダ・ヘラケズナ	219
215	土師器	甕	口縁部～底 部	HOK	II				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ミコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ・ヘラケズナ	218
216	土師器	甕	口縁部～底 部	HOK	I-II				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/3)	ミコナダ・ナダ	ナダ・ヘラケズナ	212
217	土師器	甕	口縁部～底 部	COK	I				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ミコナダ	ヨコナダ・ナダ後ヘラケズナ	218
218	土師器	甕	把手付	HOK	II				にじる赤 (7.576/4)	-	ナダ・指付ナシ	-	実記あり
219	土師器	甕	把手付	HOK					にじる赤 (7.576/4)	-	ハラ状工具によるナダ・ナダ	-	212
220	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	III	(11.45)			青黒	明鏡灰 (7.576/2)	ナダ後オナシ	青白灰	209
221	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	III+IV	(14.25)			底	底 (7.576/5)	ナダ後オナシ	青白灰	206
222	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	II				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ナダ	青白灰	206
223	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	II				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ナダ・ナダ後オナシ	青白灰	206
224	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	III				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/3)	ナダ・ナダ後オナシ	青白灰	205
225	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	III				にじる赤 (7.576/4)	にじる赤 (7.576/4)	ロナダ・鋼・ナダ後オナシ	青白灰	205
226	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK	I				底	底 (7.576/6)	ロナダ・鋼・ナダ後オナシ	青白灰	207
227	土師器	直筒土瓶	口縁部～底 部	HOK					にじる赤 (7.576/4)	底	ナダ	青白灰	205
228	直筒甕	糸付	口縁部～底 部	HOK	II	(16.7)			底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	灰釉復元	249
229	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK		(8.45)			底灰	底 (7.576/2)	底・陶輪ナダ・初輪へラケ ナダ・真・初輪へラケ後ナダ	灰釉復元	245
230	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK		(11.45)			底灰	底 (7.576/1)	底・陶輪ナダ・ヘラケズナ ダ・真・陶輪ナダ	灰釉復元	246
231	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK	I	(6.55)			底灰	底 (7.576/1)	底・陶輪ナダ・底：不明	灰釉復元	248
232	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK	III	(6.15)			底灰	底 (7.576/2)	底・陶輪ナダ・底：ナダ	灰釉復元	245
233	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK	I				黄灰	黄灰 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
234	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK	II				黄灰	黄灰 (7.576/2)	陶輪ナダ	206	278
235	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK	II-E				黄灰	黄灰 (7.576/2)	ヨコナダ	207	287
236	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					黄灰	黄灰 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
237	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
238	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
239	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
240	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
241	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
242	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
243	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
244	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	ヨコナダ	207	287
245	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
246	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
247	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
248	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
249	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
250	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
251	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
252	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
253	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
254	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
255	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	ヨコナダ	207	287
256	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
257	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
258	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
259	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
260	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
261	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
262	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
263	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
264	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
265	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
266	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
267	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
268	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
269	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
270	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
271	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
272	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
273	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
274	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
275	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
276	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
277	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
278	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
279	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
280	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
281	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
282	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
283	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
284	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
285	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
286	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
287	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
288	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
289	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
290	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
291	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
292	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
293	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
294	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
295	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
296	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
297	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
298	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
299	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
300	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	279
301	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	277
302	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK					底灰	底 (7.576/1)	陶輪ナダ	206	278
303	直筒甕	糸付	全体～底部	HOK									

第13表 古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器観察表⑩

被災番号	種別	種類	複数登録	治山地 点	層位	流量 (cm)			地形		調査		備考	実測値	
						凸岸	底岸	深高	外縁	内縁	外縁	内縁			
338	陥没型	堆	口端部・側面 底	BK	H	(14.0)			陥没 (H)	陥没 (H)	ロ:コロナゾ、崩:底子日々 タキ	ロ:コロナゾ、崩:同心円内 て底面	陥没復元	383	
339	陥没型	堆	口端部・側面 底	BK	I	(16.0)			陥没 (H)	陥没 (H)	ロ:コロナゾ、崩:底子日々 タキ	ロ:コロナゾ、崩:同心円内 て底面	陥没復元	380	
340	陥没型	堆	口端部・側面 底	BK					オリーブ底 (BTW/H)	陥没復元	ロ:コロナゾ、崩:底子日々 タキ	ロ:コロナゾ、崩:同心円内 て底面	陥没復元	381	
341	陥没型	堆	周縁部・斜傾 B+C	I	-I				陥没 (H)	陥没 (H)	ロ:コロナゾ、崩:底子日々 タキ	ロ:コロナゾ、崩:同心円内 て底面	陥没復元	380	
342	陥没型	堆	周縁部	GK	I				陥没	陥没	平行タキ	同心円内当て基盤	内縁からの穿孔(未調査)	361	
343	陥没型	堆	側面	GK	H				陥没底 (H)	陥没	底子日々タキ	非陥没面と底面、平行打て基盤	陥没復元	364	
344	陥没型	堆	側面・底面	BK	T				陥没 (T)	陥没	にじム陥没 (T)	底子日々タキ	平行打て底面	陥没復元	368
345	陥没型	堆	口端部・側面 底	BK					陥没	陥没	底子日々タキ	底子日々	陥没復元	370	
346	陥没型	堆	口端部・側面 底	GK	I				陥没 (2.45%)	陥没	底子日々タキ	底子日々	陥没復元	342	
347	陥没型	堆	口端部・側面 底	BK	II	(3.4)			陥没 (H)	陥没	底子日々タキ	底子日々	陥没復元	343	
348	陥没型	堆	周縁部	BK	I				陥没底 (H)	陥没	底子日々	底子日々	陥没復元	372	
349	陥没型	堆	側面	BK	II				陥没 (2.5%)	陥没	底子日々	底子日々	陥没復元	377	
350	陥没型	堆?	陥没・側面	BK					陥没 (T)	陥没	崩:底子日々タキ、底:ナダ	底子日々	371		
351	陥没型	堆?	陥没・側面	A区	I				陥没 (1.07%)	陥没	崩:底子日々タキナダ、底:ナダ	底子日々	368		
352	陥没型	堆?	陥没・底面	BK	II	(14.0)			陥没底 (H)	陥没	平行タキ+ナダ	ナダ底面内当て底面+ナダ	陥没復元	366	
353	陥没型	堆?	陥没・底面	BK	I				陥没 (H)	陥没	底子日々	底子日々	369		
354	陥没型	堆	陥没・側面	BK	II				陥没底 (2.5%)	陥没	底子日々	底子日々	陥没復元	366	
355	陥没型	堆	口端部	BK	I				陥没 (2.45%)	陥没	ロ:コナゾ	ロ:コナゾ	陥没系	395	
356	曲屈	曲	口端部	AIK	I				陥没 (1.07%)	陥没	ロ:ナダ	ロ:ナダ	曲屈系	336	
357	曲屈	曲	口端部	BK	I				陥没 (2.45%)	陥没	ロ:ナダ	ロ:ナダ	曲屈系	336	
358	陥没開拓	掘	口端部・側面 底	BK	H	(13.1)			陥没底 (H)	陥没	底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	35	
359	陥没開拓	掘	口端部	BK	I				陥没 (H)	陥没	底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	28	
360	陥没開拓	掘	山斜面	CH	IV				にじ陥没 (2.45%)	陥没	底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	26	
361	陥没開拓	掘	山斜面	BK	II				オリーブ底 (BTW/H)	陥没	底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	23	
362	陥没開拓	掘	山斜面	BK					堆積 (0.95%)	陥没	底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	24	
363	陥没開拓	掘	堆積・底面	BK	II				陥没 (0.95%)	陥没	底:底子日々(陥没)、底: タキナダ、底:堆積へクリア	底子日々(陥没)	陥没復元	17	
364	陥没開拓	掘	堆積・底面	BK	I				オリーブ底 (BTW/H)	陥没	底:底子日々(陥没)、底: タキナダ、底:堆積へクリア	底子日々(陥没)	陥没復元	29	
365	陥没開拓	掘	堆積	BK					堆積 (0.95%)	陥没	底:底子日々(陥没)、底: タキナダ(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	26	
366	陥没開拓	掘	堆積	BK					陥没 (0.95%)	陥没	底:底子日々(陥没)、底: タキナダ(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	27	
367	陥没開拓	掘	口端部	BK	II	(1.5.0)			陥没 (1.07%)	陥没	底:底子日々(陥没)、底: タキナダ(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	28	
368	陥没開拓	掘	口端部	GK	I				オリーブ底 (BTW/H)	陥没	底:底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	422	
369	陥没開拓	掘	口端部	BK					陥没 (1.07%)	陥没	底:底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	34	
370	陥没開拓	掘	堆積・底面	BK	II	(2.4)			陥没 (2.45%)	陥没	底:底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	陥没復元	422	
371	陥没土砂	堆?	堆?	BK	II				にじ陥没 (2.45%)	陥没	底:底子日々(陥没)	底子日々(陥没)	土字不明	400	

第14表 土製紡錘車観察表

報告書No.	出土地 点	層位	寸法 (cm)			重量 (g)	色調		表面		備考	実測No.
			最大長	直径	最小厚		表面	裏面	表面	裏面		
336	SE-13		8.8	1.9	1.1	56.2	にじみ青 (10186/4)	にじみ青 (10186/4)	ナゲ	墨止めナゲリナゲ	表面に赤色斑状	4

第15表 繩の羽口観察表

報告書No.	出土地 点	層位	寸法 (cm)			色調	表面		裏面		備考	実測No.
			直径	最大幅	孔径		表面	内部	表面	内部		
337	SE-13		3.9	0.2	(2.3)	にじみ青 (10186/2)	にじみ青 (10186/2)	ナゲ	ナゲナゲ(深緑)	繩の羽口からどうか抜けがれる。		236

第16表 用途不明粘土塊観察表

報告書No.	出土地 点	層位	寸法 (cm)			重量 (g)	色調		表面		備考	実測No.
			保存最大長	保存最大幅	保存最大厚		表面	裏面	表面	裏面		
338	SE-13		4.8	4.6	3.7	10186/70	ナゲナゲ		ナゲナゲ			302

第17表 土錐計測表

報告書No.	出土地 点	層位	寸法 (cm)			重量 (g)	色調		表面		備考	実測No.
			最大長	直径	最小厚		表面	裏面	表面	裏面		
372	II	II	4.9	1.5	1.3	7.6	にじみ青 (10186/2)					421
373	II	II	4.9	1.6	1.4	6.6	にじみ青 (10186/2)					420
374	II	II	4.1	2.9	1.8	0.4	12.0	にじみ青 (10186/4)				418
375	II	II	4.0	1.8	1.5	0.5	2.8	にじみ青 (10186/2)	「両面穿孔」状を呈する。			3
376	II	II	4.8	1.5	1.3	0.5	4.3	にじみ青 (10186/4)				2
377	II	II	4.5	1.7	1.2	0.6	9.2	にじみ青 (10186/2)				419

第18表 古代～中世の石器計測表

報告書No.	層位	出土地 点	層位	石種	寸法 (cm)			重量 (g)	色調		備考	実測No.
					最大長	直径	最小厚		表面	裏面		
247	砂岩	SE-13		砂岩	7.9	6.8	3.75	280				456
248	砂岩	SE-13		砂岩	11.0	7.35	4.25	456				454
249	砂岩	SE-13		砂岩	13.6	13.2	5.0	1200				466
250	砂岩	SE-13		砂岩	13.2	4.2	3.2	250				465
251	砂岩	SE-13		頁岩	16.9	4.6	2.1	340				470
252	砂岩	SE-13		砂岩	15.5	5.2	4.1	570				469
253	砂岩	SE-13		頁岩	9.0	3.1	1.05	40.5				487
254	砂岩	SE-13		砂岩	14.1	8.2	7.15	900				453
255	砂岩	SE-13		頁岩	1.15	1.35	0.3	0.2				476
300	砂岩	SE-2		砂岩	12.6	4.4	3.5	285				464
378	水輪土製品	II区	IV	砂岩	34.2	34.6	23.4	29000				473

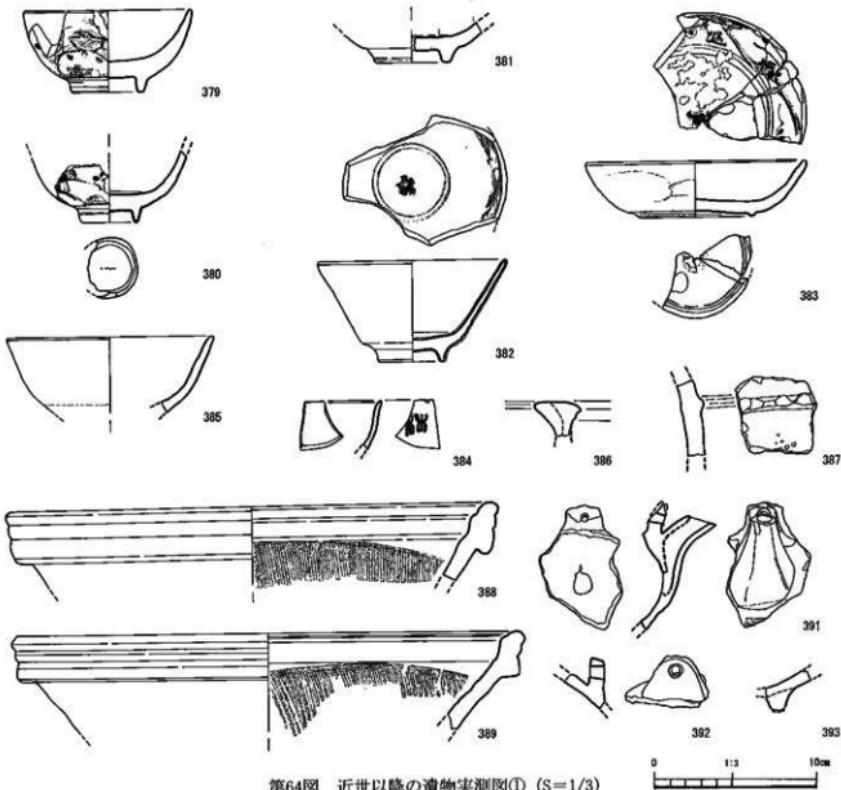
第4節 近世以降の成果について

近世以降に該当する遺構は確認されなかつた。遺物についてはII～III層から数点出土したが、主体は表土であるI層からの出土であった。以下、本調査区において出土した近世以降の遺物について説明する（第64・65図）。

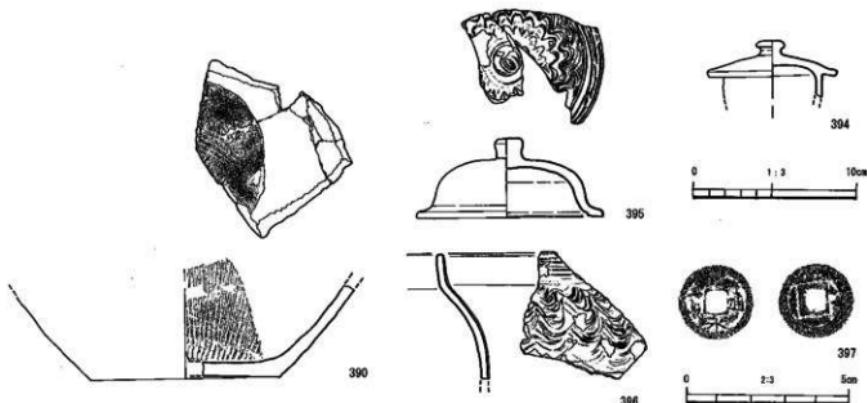
磁器（379～384） 379・380は肥前系丸碗である。底部から口縁部へやや開きぎみに立ち上がる。381も丸碗であろうか。見込部に蛇の目釉剥ぎを施す。382は肥前系朝顔形碗である。外面には青磁釉を掛ける。口縁部内面には四方攢文、見込部にコンニャク印判五弁花を施す。383は肥前系皿である。見込部にコンニャク印判五弁花を施す。底部高台内には満「福」と思われる銘款を施す。384は瀬戸・美濃系磁器碗である。外面に隸書文を施す。

陶器（385～396） 385は薩摩龍門司系碗である。赤褐色の胎土に白化粧土を掛けている。386は肥前系甕の口縁部片である。口縁端部が内外面に張り出し、全体的に丸みを帯びた形状である。387は肥前系と思われる甕の胴部片である。外面に繩状突帯が巡る。388～390は堺・明石系の攝鉢である。391～393薩摩苗代川系と考えられる土瓶である。391は注口部にため口を作る。393は足がつく底部片である。394は薩摩苗代川系の土瓶の蓋であろう。395・396は産地不明の蓋と鉢である。文様が同じであるため、セットである可能性が考えられる。

錢貨（397） 397は寛永通寶である。元禄10（1697）年初鑄の新寛永と思われる。



第64図 近世以降の遺物実測図① ($S=1/3$)



第65図 近世以降の遺物実測図② (S=1/3、2/3)

第19表 近世以降の陶磁器観察表

報告書 No.	種類	種類	残存部位	出土地點	層位	法面 (cm)			色調	調査・文鏡等			備考	実測No.	
						口徑	底径	厚さ		外壁	内壁	表面	内壁		
379	磁器	瓶	口縁部～底部	GK		(16.0)	4.4	5.0	明治時代 (18.90Y7/3)	オーバー灰 (2.50V7/1)	黒釉文、墨絵			肥前系、反転復元	326
380	磁器	瓶	全体～底部	A+C 区	I+II		(2.3)		灰白 (0.97V7/1)	灰 (0.97V7/1)	模様文、墨絵			肥前系、反転復元	325
381	磁器	瓶	全体～底部	HPC	I		(4.4)		明治時代 (2.50Y7/2)	灰白 (0.97V7/1)	模様文、墨絵			明治中期頃、反転復元	323
382	磁器	瓶	口縁部～底部	GJC	I	(11.0)	4.0	6.2	灰 (2.50V7/3)	灰白 (0.97V7/1)	黒釉文			肥前系、青磁、反転復元	324
383	磁器	瓶	口縁部～底部	AFC	I	(13.2)	(7.0)	3.4	灰 (2.50V7/1)	灰 (0.97V7/1)	模様文、墨絵			肥前系、内側に凸凹感 有り、反転復元	322
384	磁器	瓶	口縁部～全体	CES	I				灰白 (2.50V7/1)	灰白 (0.97V7/1)	黒釉文			肥戸、美濃系	343
385	陶器	瓶	口縁部～全体	A+B 区	I	(11.0)			灰黄 (2.50V7/2)	灰黄 (2.50V7/2)				御腰掛 (鎌倉中京)、日 本造形、反転復元	342
386	陶器	甕	口縁部	AEC	I				灰黄 (2.50V7/2)	灰黄 (2.50V7/2)				御腰掛	334
387	陶器	甕	口縁部		I				灰黄 (2.50V7/2)	灰黄 (2.50V7/2)	模様文等、手すきテク ニカルナード			肥前系	333
388	陶器	盆	L+縁部～全体	GKC	I	(28.2)			灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			口：御腰掛、体：模様 文、肥前系、反転復元	321
389	陶器	壺	L+縁部～全体	AEC		(36.4)			灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			口：御腰掛、体：模様 文、肥前系、反転復元	319
390	陶器	壺	全体～全体	AEC	I				灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			口：模様文、底：模様状 態、明治系、反転復元	320
391	陶器	土瓶	全体	AEC	I				灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			御腰掛 (鎌倉中京)	330
392	陶器	土瓶	全体	FUE	I				灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			御腰掛 (鎌倉中京)	331
393	陶器	土瓶	全体		I				灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			御腰掛 (鎌倉中京) ?	332
394	陶器	瓶	全体～底部	PIC	I				灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	模様文等、体・凹凸 ハラカタリ			御腰掛 (鎌倉中京)、内 側にスヌード、反転復元	333
395	陶器	瓶	全体～底部	AEC	I	(11.4)	—	4.8	灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	文鏡あり			反転復元	334
396	陶器	瓶?	口縁部～全体						灰黄 (2.50V7/3)	灰黄 (2.50V7/3)	文鏡あり				336

第20表 近世錢貨計測表

報告書No.	銭名	出土地點	層位	材質	法面 (mm)			重量 (g)	備考	実測No.
					直径	孔径	厚さ			
397	寛永通宝	CDC	I	銅	3.2	0.9	0.1	3.6		434

第5節 時期不明の遺構・遺物について

本節では帰属する時代について特定しづらい遺構・遺物について説明する。なお、本節で説明する遺構・遺物は全てアカホヤ火山灰層上位で確認されたものであるため、少なくともアカホヤ火山灰層下以降の遺構・遺物であることは判断できる。

1 遺構（第66~68図）

【SC-7】 グリッドA区に位置する。平面形態は不整梢円形、断面形態は皿状を呈する。遺構の規模は長軸1.61m、短軸1.00m、検出面からの深さ0.21mである。用途については不明である。

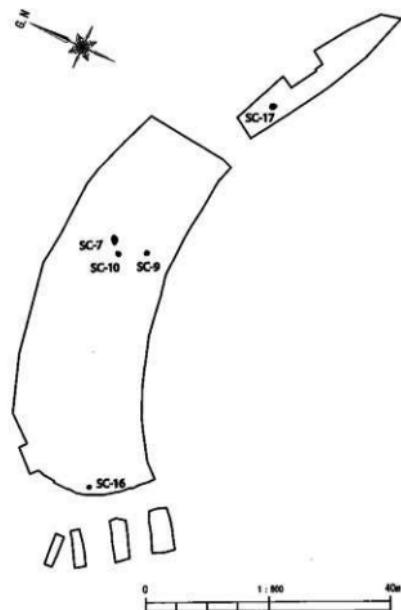
【SC-9】 グリッドA区に位置する。端部にピットを有するタイプの土坑である。平面形態は不整円形である。遺構の規模は長軸0.86m、短軸0.77m、検出面から上段平坦面までの深さ0.20m、ピット床面までの深さ0.93mである。

【SC-10】 グリッドA区に位置する。端部にピットを有するタイプの土坑である。平面形態は不整梢円形である。遺構の規模は長軸0.77m、短軸0.58m、検出面から上段平坦面までの深さ0.13m、ピット床面までの深さ0.40mである。本遺構やSC-9のような端部にピットを有するタイプの土坑は近隣の遺跡で多数確認されている。白ヶ野第1遺跡では埋土中に高原スコリアが堆積している例が確認されている。滑川第1遺跡では埋土中から採取された炭化材を放射性炭素年代測定分析にかけたところ、 880 ± 40 BPという値が得られている。これらの事例から10~13世紀に至る一定の定点があると思われる。しかし、清武士猪ノ原遺跡第1地区のようにアカホヤ火山灰層下位から検出された例もあり、特定の時期だけに存在する遺構ではないようである。また、用途についても未だ解明されていないのが現状のようである（井田2006）。

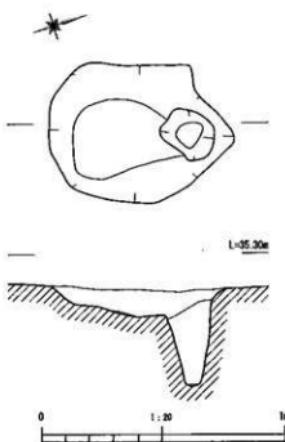
【SC-16】 グリッドD区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態は箱形を呈する。遺構の規模は長軸0.75m、短軸0.62m、検出面からの深さ0.61mである。本遺構の埋土はSD-14の埋土に類似するため本遺

構も古代に帰属する可能性が考えられたが、出土遺物がなく、特定するには至らなかった。また、用途も不明である。

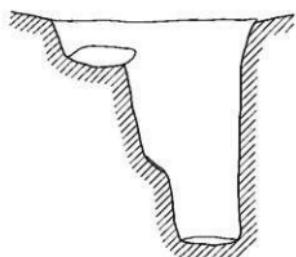
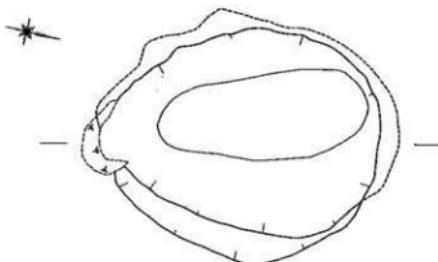
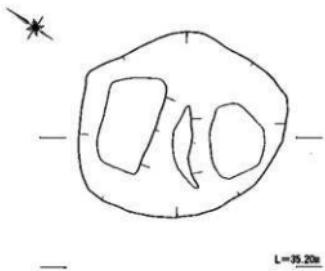
【SC-17】 グリッドF区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態は袋状を呈する。遺構の規模は長軸1.10m、短軸0.98m、検出面からの深さ0.64mである。断面形態の特徴から貯蔵穴の可能性も考えられたがそれを裏付ける炭化種子等の出土がなく、本遺構の性格を特定するには至らなかった。



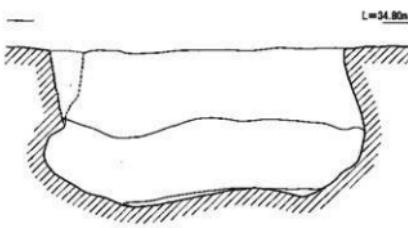
第66図 時期不明の遺構配置図 (S=1/800)



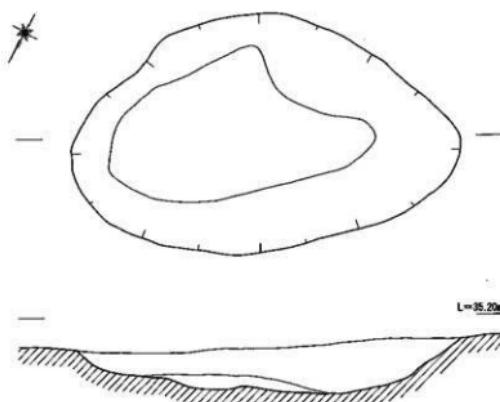
第67図 SC-10実測図 (S=1/20)



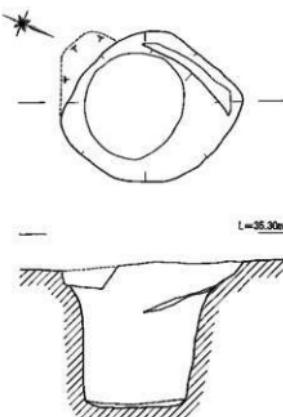
《SC-9》



《SC-17》



《SC-7》



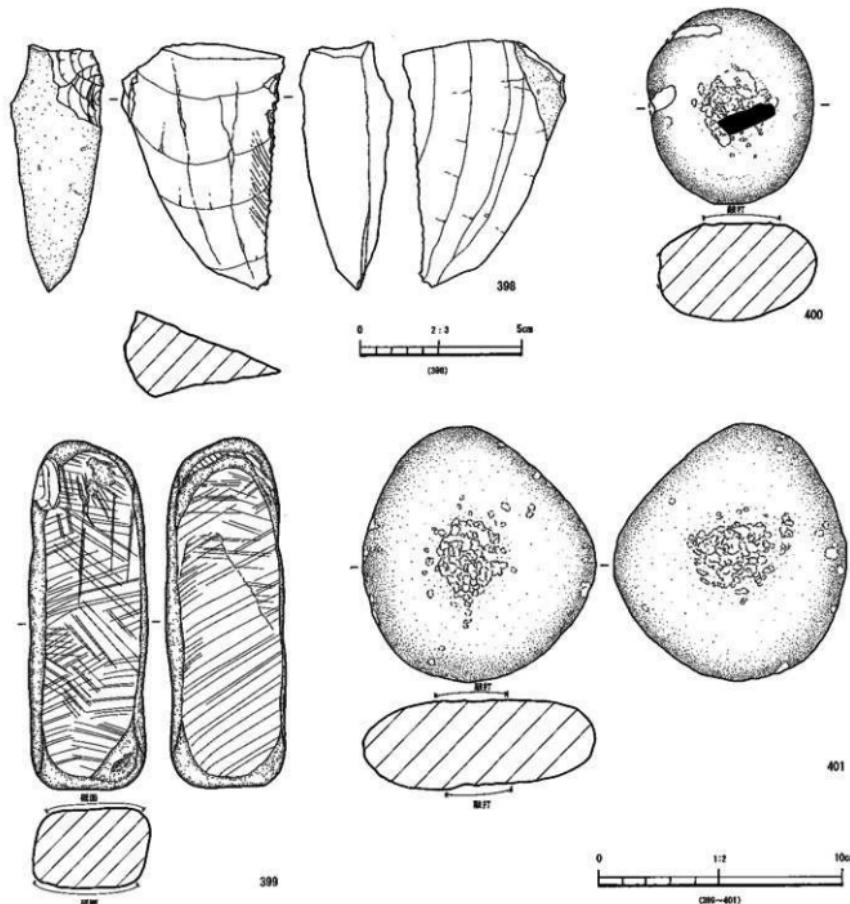
《SC-16》



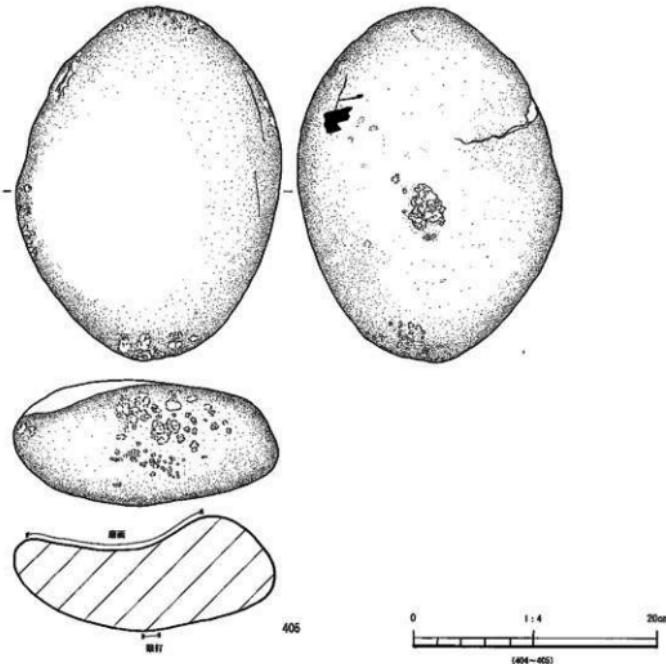
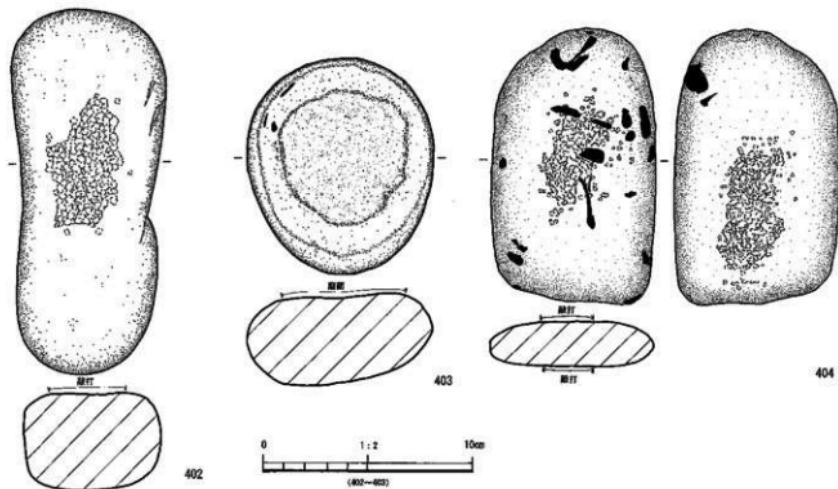
第68図 SC-7・9・16・17実測図 ($S=1/20$)

2 遺物 (第69・70図)

- 二次加工のある剥片 (398) 玄武岩製である。加工の意図が明確に読み取れず、用途については不明である。
- 砥石 (399) 砂岩製の棒状の礫を素材とし、その平坦な面の両面に明瞭な平滑な面をもつ。
- 敲石 (400～402) 400は頁岩製の円礫を素材とし、片面のみ敲打の痕跡を確認できる。401は砂岩製の円礫を素材とし、両面に敲打の痕跡が確認できる。402は砂岩製の棒状の礫を素材とし、片面のみ敲打の痕跡を確認できる。
- 磨石 (403) 砂岩製の円礫を素材とし、片面のみ平滑な面を確認できる。
- 台石 (404) 砂岩製の扁平な礫を素材とし、両面に敲打痕が認められる。
- 石皿 (405) 砂岩製の大型の礫を素材とし、凹んだ部分に平滑な面をもつ。その裏側には敲打痕も確認でき、台石の機能と兼用されていたことが窺える。



第69図 時期不明の遺物実測図① (S=2/3、1/2)



第70図 時期不明の遺物実測図② (S=1/2、1/4)

第21表 時期不明の石器計測表

報告書番号	器種	出土施設	層位	資料	法量 (cm)			重量 (g)	備考	実測値
					最大長	最大幅	最大厚			
004	二次加工のあら削片	HIC	Ⅲ	地表附近	7.6	4.80	2.8	18.0		17.1
009	破片	CIE	Ⅲ	砂質	11.2	4.6	3.3	440		440
010	破片	D10	Ⅲ	砂質	8.0	6.2	3.0	288		285
011	破片		Ⅲ	砂質	10.4	6.5	3.2	495		452
012	破片	HIC	Ⅲ	砂質	13.6	6.4	4.0	802		803
013	破片	HIC	Ⅲ	砂質	6.0	7.0	2.6	240		247
014	破片	D10	Ⅲ	砂質	22.8	13.2	3.8	2100		2111
015	石核	D10	Ⅲ	砂質	26.6	21.7	10.2	7900	けん玉・細石核	450

【第III章 注釈】

1) 萩田博子先生のご教示による。

【第III章 引用・参考文献】

- 井田篤 2004 「(2)土坑」『白ヶ野第1・第4遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第13集 清武町教育委員会
 井田篤 2006 「端部などにピットを有するタイプの土坑」『滑川第1遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第21集 清武町教育委員会
 井田篤 2008 「4. 土坑」『清武上猪ノ原遺跡-1-』清武町埋蔵文化財調査報告書第24集 清武町教育委員会
 伊東但 1987 『源藤遺跡』宮崎市文化財報告書 宮崎市教育委員会
 菊畠光博 2000 「中萬式石器の検討 一宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年における」『古文化調査』第45集 九州古文化研究会
 菊畠光博 2004 「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
 矢部喜多夫・中村友昭 2007 『今房遺跡』都城市文化財調査報告書 第80集 都城市教育委員会
 山本信夫 2000 「太宰府糸坊跡XV 一陶器器分類編-』太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会



1. 発掘調査風景① 2. 発掘調査風景② 3. 整理作業風景① 4. 整理作業風景②

第71図 発掘調査・整理作業風景

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 五反畠遺跡A地区における放射性炭素年代測定

1はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

2 試料と方法

試料名	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SZ-2	炭化材	acid/alkali/acid	AMS
No.2	SC-11	炭化材	acid/alkali/acid	AMS
No.3	SE-13	炭化材	acid/alkali/acid	AMS
No.4	SC-15	炭化材	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	歴年代 (較正年代) (2σ :95%確率, 1σ :68%確率)
No.1	243840	1300±40	-26.3	1280±40	交点: Cal AD 690 2σ : Cal AD 660-810 1σ : Cal AD 670-770
No.2	243841	3170±40	-25.8	3160±40	交点: Cal BC 1430 2σ : Cal BC 1500-1380 1σ : Cal BC 1460-1410
No.3	243842	1310±40	-25.8	1300±40	交点: Cal AD 680 2σ : Cal AD 650-780 1σ : Cal AD 660-720, 740-770
No.4	243843	3200±40	-25.6	3190±40	交点: Cal BC 1450 2σ : Cal BC 1520-1400 1σ : Cal BC 1500-1420

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB)

の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代校正にはこの年代値を使用する。

(4)暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線(IntCal10)を使用した。

IntCal10ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点は、 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の暦年代値を示し、 1σ (68%確率)と 2σ (95%確率)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

第2節 五反畠遺跡A地区における樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、A地区の土坑や溝などから採取された炭化材4点である。

3 方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。

4 結果

表22に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 (第72図)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には齧歎状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科 (第73図)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が數列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 (第74図)

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 (第75図)

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

5 所見

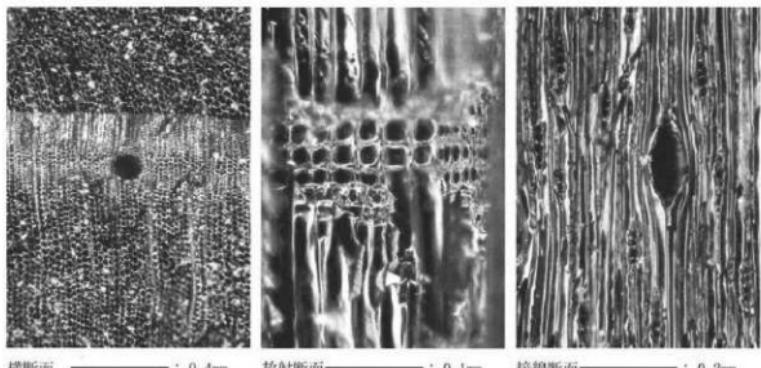
樹種同定の結果、マツ属複維管束亜属1点、クリ1点、ツブラジイ1点、コナラ属アカガシ亜属1点が同定された。

マツ属複維管束亜属は温帯を中心に広く分布する常緑針葉樹である。土壤条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツがある。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。ツブラジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。

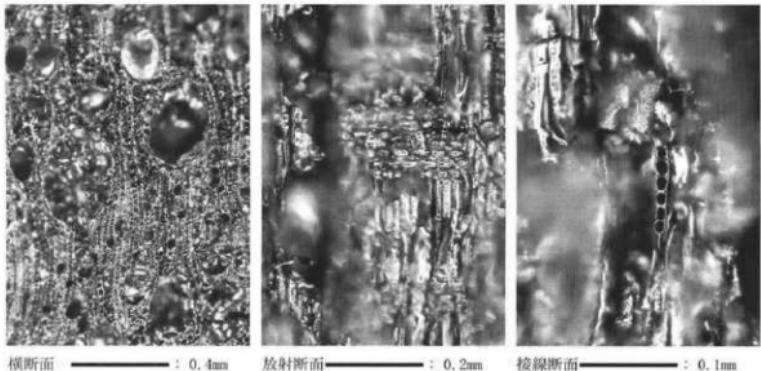
いずれも温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

【第4章 参考文献】

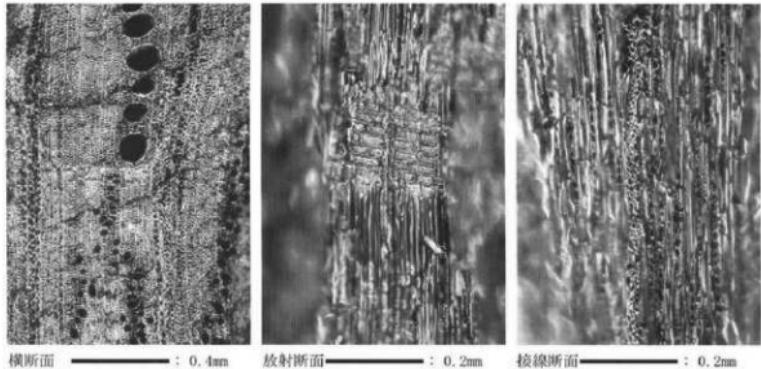
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアN-3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p. 14-15.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p. 1-36.
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版。290p.
島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。296p.
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会。242p.



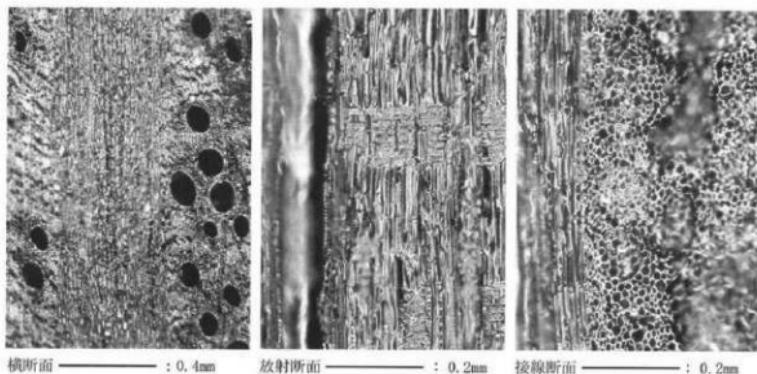
横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.1mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm
第72図 試料3 SE-13 マツ属複維管束亜属



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.2mm 接線断面 ━━━━ : 0.1mm
第73図 試料2 SC-11 クリ



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.2mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm
第74図 試料4 SC-15 ツブライ



第75図 試料1 SZ-2 コナラ属アカガシ亜属

第22表 五反畠遺跡における樹種同定結果

番号	遺構番号	同定結果（学名／和名）	
1	SZ-2	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
2	SC-11	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
3	SE-13	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属
4	SC-15	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブライ

第V章　まとめ

五反畠遺跡A地区で、最も遺物の出土量が多く、最も遺構の検出件数が多い時期は古代であった。まとめにかえ、本調査区における古代の様相をより理解するために、本章では以下の検討・考察を行ないたい。

まず第1節で、本調査区において確認された遺構の年代を明らかにするために、遺構内出土遺物の年代的位置付けについて検討する。次に第2節で、第1節の検討結果を基に古代における本調査区の利用変遷及び古代における本調査区の位置付けについて考察する。

第1節　本調査区で確認された遺構の年代について

本調査区の遺構内から出土した土師器・須恵器・施釉陶磁器・黒色土器の年代的位置付けについてそれぞれ検討し、その結果を総括することで各遺構の年代を明らかにしていきたい。

1 土師器

本調査区の遺構出土の遺物で、最も多いのが土師器である。本項では、これまでの日向における土師器の研究（岡本1991・1995）を参考に、本調査区出土の土師器の年代的位置付けについて、形態・技法的観点と法量的観点からアプローチする。その結果を受け、土師器からみた各遺構の年代について検討することとしたい。

（1）形態・技法的観点から　本調査区で出土量の多い杯・椀・甕について検討を行なう。まず、メルクマークとなるのが円盤状高台付椀と放射状調整痕をもつ椀である。円盤状高台付椀は清武町小山尻東遺跡SA-1で越州窯系青磁・窓窯系須恵器・畿内産鍼釉陶器と共に出土しており、9世紀後半から10世紀前半のきわめて限られた時期に使用されている（岡本1995）。放射状調整痕をもつ椀は宮崎市蕨野遺跡・西ノ原地区遺跡の土師器焼成土坑から出土している。蕨野遺跡6号窯・9号土坑出土遺物は佐土原町下村窯の須恵器と類似しており9世紀中頃と考えられている（岡本1995）。なお、蕨野遺跡6号窯・9号土坑からは円盤状高台付椀は出土していない。西ノ原地区遺跡の焼成土坑では円盤状高台付椀と共に出土しており、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。よって、蕨野遺跡・西ノ原遺跡の事例から放射状調整痕をもつ椀は9世紀中葉～10世紀前半に位置付けることができる。

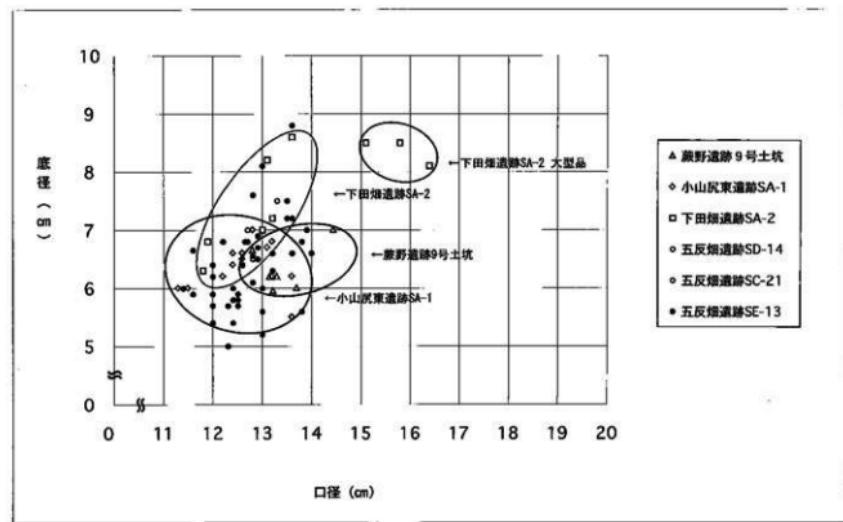
次に杯について検討する。SE-13の杯については本文中において形態・技法から大きく7つに分類を行なった。岡本武憲氏の編年（岡本1991）を参考にすると、最も出土数の多い本調査区分類のI類・IV類は9～10世紀に普遍的に存在するものであるため、詳細な時期については不明である。II類は薩摩・大隅で10世紀後半～11世紀前半に位置付けられている杯に類似する（中村2006）。III類に類似する資料は前述の西ノ原地区遺跡の焼成土坑から出土しており、9世紀後半～10世紀前半頃と推測される。円盤状高台を意識したような底部であることもこの時期に位置付けられる根拠の一つになるだろう。V類は器高の低いタイプである。時期が下るにつれ器高が低くなるとの指摘もある（岡本1991）が、詳細な時期は不明である。VI類は底部の端部が張り出すタイプである。これは、粗雑な回転ヘラ切りによって、端部が張り出るようにみえるものである。ヘラ切りの粗雑化と考えると比較的新しい段階に位置付けられそうだが、詳細は不明である。VII類は外面に回転ヘラズリもしくは回転ヘラケズリ後ミガキ、内面にミガキを施す資料である。VII類は8世紀中頃に位置付けられている鹿児島県東市来町古城遺跡の資料（中村2006）に技法的に類似しており、近い時期に位置付けられる可能性がある。

最後に甕について検討する。本調査区から出土した甕の底部形態をみるといずれも丸底であり、平底の資料は出土していない。岡本氏の編年によると平底から丸底への転換が10世紀前後である（岡本1991）ため、本遺跡出土の甕の年代は10世紀以降と推測される。

（2）法量的観点から　杯の本調査区分類I・IV類にあたる資料は、出土量が多いものの、形態・技法的観点からは詳細な時期を特定するに至らなかった。そこで、杯に関しては法量的観点からもアプローチして年代的位置付けについて検討していきたい。9世紀中葉に位置付けられる蕨野遺跡9号土坑出土遺物の法量は、口径12.8～14.45cm、底径5.95～6.65cm、器高4.2～5.8cmである。9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる小山尻東遺跡SA-1出土遺物の法量は、口径11.3～13.6cm、底径は5.5～6.8cm、器高3.9～5.1cmであり、前段階より底径はあまり変わらないが、口径が小さく、器高も低くなっていることが窺える。10世紀後半に位置付けられる下田畑遺跡SA-2出土遺物の法量は、口径は11.8～16.4cm、底径は6.3～8.3cm、器高3.2～4.8cmである。これらのうち口径15cm以上のものは大型品の可能性があり、注意が必要である。口径15cm以上のものを除くと、口径11.8～13.6cm、底径6.3～8.3cm、器高3.2～4.6cmとなる。よって下田畑遺跡SA-2の段階には口径はあまり変わらないが、底径が大きく、

器高が低くなっていることが窺える。ちなみに、本調査区分類のV類にあたる資料の法量は口径12.8~14.0cm、底径6.6~8.1cm、器高は3.9~4.1cmである。形態・技法的観点からは詳細な年代は分からなかったが、法量的観点からは10世紀後半に位置付けられる可能性が高いと考えられる。

(3) 土師器からみた古代の遺構の年代について これまでの検討結果をもとに本調査区で検出された古代の遺構の年代について検討したい。掘立柱建物跡(SB-7・SB-18・SB-19)から出土した土師器片はいずれも小破片であり、詳細な年代を推定することはできなかった。SD-14からは円盤状高台付碗が出土しており、9世紀後半~10世紀前半頃と推測される。SC-21から出土した杯の法量をみると下田畠遺跡SA-2から出土した杯の法量と類似する(第76図)。よって、SC-21の年代は下田畠遺跡SA-2と近接する時期、つまり10世紀後半頃と推測したい。SE-1上層出土の土師器は一部10世紀後半~11世紀前半の杯II類や8世紀中頃の杯VII類が出土しているものの、主体は9世紀後半~10世紀前半の遺物である。法量的にもほぼ同様の傾向が窺えるが10世紀後半に位置付けられる可能性の高い杯V類が一定量含まれることが指摘できる。よって、SE-13上層出土物の年代、つまりSE-13が「ごみ捨て場」的用途に使用されていた時期は9世紀後半~10世紀前半が中心と推測されるが、一部小規模ながらも10世紀後半まで使用されていた可能性があるものと考えられる。SZ-2からは円盤状高台付碗が出土しており、9世紀後半~10世紀前半頃と推測される。



第76図 五反烟跡 A地区遺構内出土土師器杯と周辺遺跡遺構内出土土師器杯との法量比較

2 須恵器

須恵器の出土した古代の遺構はSE-13とSZ-2である。本項では両遺構から出土した須恵器のうち、出土量の多い甕に着目し、年代的位置付けについて検討したい。

まず、SE-13出土の須恵器について検討する。SE-13では甕の口縁部片が1点出土している(第48図228)。この須恵器は口縁部中位に縫をもち、口縁端部がわずかに外反し、丸くまとまる。外面は格子目叩き、内面はナデ消しが施されている。同様のタイプが宮崎市下村窯跡3号灰原から出土している。宮崎市下村窯跡3号灰原の時期は杯蓋・杯身の時期から9世紀後半と考えられており(今塙屋・秋成2006)、このタイプの甕も近い時期に位置付けられるだろう。

次に、SZ-2出土の須恵器について検討する。第55図284・285は口縁端部が丸くまとまり、外面に格子目叩き、内面に車輪當て具痕が認められる。このタイプは前述の下村窯跡3号灰原で出土している。第57図299は口縁端部が丸くまとまり、外面に格子目叩き、内面に平行當て具痕を施す。内面調整の違いはあるが、下村窯跡3号灰原の資料

に類似しており、近い時期に位置付けられるものと考えられる。一方でSZ-2には、8世紀中頃～9世紀初頭の宮崎市松ヶ迫窯跡の資料にはあるが下村窯跡3号灰原の資料はない、内面同心円当て具痕を施す資料や、8世紀中頃の松ヶ迫2号窯跡出土の甕と口縁部形態が類似する資料（第56図288）など一部古い様相を示す資料も含まれている。出土量を加味すると、SZ-2出土の須恵器は9世紀代の資料を中心とするが一部8世紀代の資料も含まれるということになるだろう。

3 施釉陶磁器

本調査区から出土した古代の施釉陶磁器は、長沙窯瓷と緑釉陶器である。本稿では、本調査区遺構内出土の施釉陶磁器の年代的位置付けについて検討する。

(1) 長沙窯瓷 SE-13から出土している(第48図234)。長沙窯系の製品は太宰府編年A期古段階にあたる資料であり8世紀末～9世紀中頃に位置付けられる(山本1999)。

(2) 緑釉陶器 本調査区の遺構内から出土した緑釉陶器は、いずれも削り出し高台であるため京都産と考えられる。SE-13からは輪高台をもつ底部片が出土した(第48図233)。硬陶で、全面施釉であることから、高橋編年の中～後葉(9世紀後葉～10世紀前半頃)に該当する資料と推測される(高橋2003)。SZ-2からは完形に復元できる椀と皿の一部が出土した(第55図282・283)。いずれも硬陶であり、釉調は深緑色を呈する。椀の口縁端部は外反する。皿の口縁端部は短く屈曲する。以上の特徴から高橋編年の中葉(9世紀後葉)に該当する資料であると考えられる。

4 黒色土器

本調査区で黒色土器が出土した遺構はSE-13のみであった。本稿では森隆氏の研究(森1989)を参考に本調査区遺構内出土の黒色土器の年代について検討する。

(1) 九州系黒色土器I類 1点のみ出土している(第44図175)。森氏の研究から九州系黒色土器I類は8世紀後半に遡るのは確実だが大枠9世紀代の中で捉えられる(森1989)。

(2) 九州系黒色土器II類 2点出土している(第44図176・177)。九州系黒色土器I類におとらず、古い段階から存在し、南九州では10世紀代いっぱいまで存続した可能性がきわめて高いものと推定されている(森1989)。第44図177の資料は高台内に放射状調整痕が確認できるため、9世紀中葉～10世紀前半に限定できるだろう。

5 各遺構の年代について（総括）

前項までの検討結果を基に、本調査区で検出された古代の遺構の年代とその根拠をまとめたものが下記の表(第23表)である。

第23表 五反畠遺跡A地区で確認された遺構の年代とその根拠

遺構名	年代とその根拠
【SB-7・18・19】	縦立柱跡物(SB-18・SB-19)から土師器片が出土した。古代に属するものと考えられるが、いずれも小破片であり、詳細な年代を推定することはできなかった。
【SD-14】	土師器杯・碗が出土している。円盤状高台付碗が出土していることから9世紀後半～10世紀前半頃と推測される。
【SC-21】	土師器杯が出土している。杯の法則的観点からSC-21の年代は10世紀後半と推測したい。SE-13との切り合いの前後関係は調査時の不備により不明であったが、出土遺物からはSC-21がSE-13より新しく、SE-13が埋没する過程もしくは埋没後に構築されたものと判断される。
【SE-13】	土師器・須恵器・長沙窯瓷・緑釉陶器・黒色土器などが出土している。「ごみ捨て場」の用途に使用されていた時期については、9世紀後半～10世紀前半の資料が主体を占めるようである。ただし、10世紀後半以降の資料も散見されるため、使用時期は長期間に渡る可能性がある。純粋な一括資料とは考えにくい。焼造年代から水路として使用されていた時期については、理工大学から出土した遺物が小破片であったため、詳細な時期については不明である。しかし、「ごみ捨て場」の用途に使用されていた段階の前段階であるから9世紀後半頃ではないかと推測される。
【SZ-2】	土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土している。土師器・緑釉陶器からは9世紀後半、下っても10世紀前半頃に位置付けられる。須恵器も9世紀代の資料を中心とするが一部8世紀代の資料も含まれる。しかし、8世紀代の資料は主体ではない。よって、土器が集積された時期は9世紀後半頃で、集積された土器の中に8世紀代の須恵器も混ざっていたと考えるのが妥当ではないかと思う。純粋な一括資料とは考えにくい。

第2節 古代における五反畠遺跡A地区の位置付け

本節では、古代における五反畠遺跡A地区の位置付けについて、出土遺物や検出された遺構の性格の検討、周辺遺跡での事例との比較から考察していきたい。特に、SE-13の埋土中からは墨書き器や長沙窯窓、綠釉陶器が出土しており、その意味付けが重要であると考える。そこでまず、SE-13の性格について詳しくみていくこととする。次に、第1節の検討結果を受け、古代における本調査区の利用変遷についても述べていく。最後に本節第1・2項の考察を基に、古代における五反畠遺跡A地区の位置付けについて明らかにしていきたい。

1 SE-13の性格について

第III章中においても、SE-13の性格について触れたが、本項ではさらに掘り下げてみていきたい。筆者は第III章中でSE-13を元來湧水点の水を引くための水路であったと位置付けた。では、何のための導水路であったのであるか。筆者は水田のための導水路であった可能性を指摘したい。この根拠となる2つの点について説明する。

1点目は環境である。近隣住民から本調査区の北西側、現在茶畠となっている地点は以前水田であったとの話を伺った。このことから、現在茶畠となっている地点と同じ平坦面上にある本調査区及び、本調査区周辺では水田ができる環境にあると理解できる。

2点目はSE-13から出土した「春」と記された墨書き器の存在である。ところでこの「春」という字は何を意味しているのであろうか。本調査区周辺には「春」のつく字名がなく、「春」が地名を表している可能性は低いと考える。人名を表している可能性もあるが、一文字であるため肯定も否定もできない。四季の「春」を表している可能性もあるが、四季のうち「春」だけが墨書き器に記されることが多い点に疑問が残る¹⁾。ここで注目したいのは「春」という字に似た字で「春」という字があるということである。「春」には臼で穀物をつくという意味があり、臼でひいた米をあらわす「春米」などの語句がある。「春」を墨で書くと「春」のようになるため、実際書いた人が「春」と「春」のどちらを頭において書いたかは分からない。つまり、「春」と書かれた墨書き器のうち、「春」の意味で書かれたものがあるのではないかということである²⁾。もちろんSE-13出土の「春」と書かれた墨書き器においても同様であり、「春」という字に関連する文字を示している可能性がある。このことからも近くに水田があつたことが指摘できるのではないかと考える。いさか、強引であることは否めないが上記の点を根拠にSE-13は水田への導水路と位置付けたい。本調査区で水田跡が発見されていない点、SE-13が調査区外の南東側へ伸びる点から、水田跡は調査の行なわれていない南東側にあるのではないかと推測される。

さて、SE-13はその後水路として使用されなくなり、「ごみ捨て場」の用途に使用されるようになる。水路として使用されなくなった直後に水神を鎮めるような祭祀行為があったのではないかと第III章中で述べた。この点についてSE-13から出土した長沙窯窓水注片を用いて若干補足したい。長沙窯窓の出土は県内2例目である。初例は宮崎市桜町遺跡である。桜町遺跡では2点出土しており、いずれも水注片である。2点とも井戸からの出土であり、報告者はこれらを井神(水神)祭祀の一環として混入されたものと考えている(竹中2005)。本調査区から出土した長沙窯窓は水路として使用された溝状遺構からの出土である。桜町遺跡と同様に水に関連する施設からの出土があることが非常に興味深い。ただし本調査区で出土した長沙窯窓は、第III章中で指摘した水神祭祀の可能性を指摘する根拠となった土師器杯・椀がまとまって出土したレベル(水路として使用されなくなった直後)ではなく、埋土上層(「ごみ捨て場」の用途に使用されていた時期)である。まとまって出土した土師器杯・椀と長沙窯窓の両方が水神祭祀の一環で混入された遺物と考えるならば、水路として使用されなくなった後、数次に渡り水神祭祀が行なわれていたことが指摘できる。けれども、第III章中で述べたとおり祭祀行為を裏付ける墨書き器や土馬などの祭祀具が出土していないことから、根拠が弱く、あくまで推測の域を出ないことを断っておく。今後の類例の増加を待ちたい。

2 古代における本調査区の利用変遷

第1節の成果から本調査区で検出された遺構の時期を大きく3期に分けることができる。I期はSE-13が水田への導水路として利用されていた時期である。9世紀前半頃である。II期はSE-13が「ごみ捨て場」の用途に使用された時期で、土墳墓(SE-14)や土器集積遺構(SZ-2)もこの時期にあたる。9世紀後半~10世紀前半頃である。III期はSE-13がII期ほどではないものの、小規模ながらも「ごみ捨て場」の用途に使用された時期である。この段階ではSE-13はほぼ埋没していたと推測され、SE-13を切る形で土坑(SC-20)が形成されている。10世紀後半頃である。

なお、掘立柱建物跡の詳細な時期は分からなかったが、古代において本調査区が利用された時期、つまり9世紀～10世紀にあたる可能性が高いと考えられる。

3 古代における本調査区の位置付けについて

古代における本調査区は、水田のための導水路と考えられるSE-13が存在する点、調査区の東側に水田跡の存在が推測される点、小規模の掘立柱建物跡と土墳墓が存在する点から、水田を営んだ集落跡と位置付けられるのではないかと考えられる。しかし、その中で綠釉陶器や国内でも出土例の少なく、輸入陶磁としては稀少な長沙窯の出土は違和感を覚えるものである。では、どのような契機でこれらの遺物が本調査区に持ち込まれたのであろうか。

ここで、注目したいのは本調査区から直線距離で約200mの地点にある清武上猪ノ原遺跡第4・5地区で確認された掘立柱建物跡群である。埋土に高原スコリア（10世紀～13世紀）を含む溝状造構で区画された中に、9棟の掘立柱建物跡³¹⁾が確認されている（第77図）。うち、2棟は総柱掘立柱建物跡である。溝状造構に踏橋が確認されていることは興味深く、掘立柱建物跡の規則的な配置も窺えそうである。時期は、柱穴の埋土中より土師器の円盤状高台付椀が出土していることから五反畠遺跡A地区とほぼ同時期と考えられる。ただし、掘立柱建物跡群内での切り合いで確認できるため、複数時期存在することは確実である。

現在清武上猪ノ原遺跡第4・5地区は、概要報告書しか刊行されていない段階のため、遺跡の時期や性格など今後の整理作業の成果を待ってあらためて検討すべきであるが、掘立柱建物跡の規模は本調査区に比べ明らかに大きく、長沙窯を持ちえた人物がいた可能性を指摘できそうである。近くに長沙窯を持ちえた人物が存在したことが、本調査区で長沙窯が出土した理由であると結論づけたい。

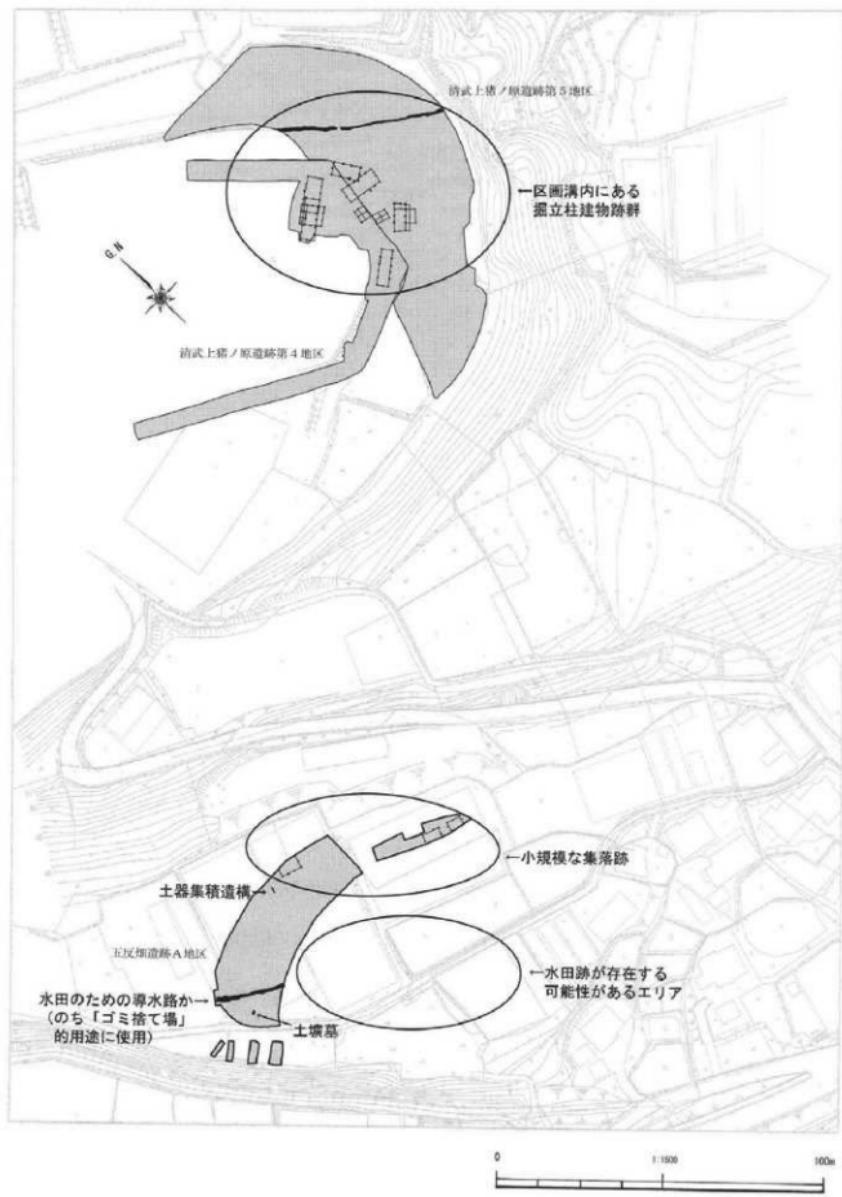
本調査区の成果だけでなく、清武上猪ノ原遺跡第4・5地区の成果とあわせて考えることで当時の空間利用のあり方や暮らしぶりなどがより明らかになってくるものと思われる。

【第V章 注釈】

- 1) 柴田博子先生のご教示による。
- 2) 柴田博子先生のご教示による。
- 3) 後述するが、清武上猪ノ原遺跡第4・5地区は概要報告書しか刊行されていない状況である。棟数や掘立柱建物跡の規模は、今後の整理作業によっては変更する可能性がある。第77図に關しても現在の案であることを断つておく。

【第V章 引用・参考文献】

- 秋成雅博・今村結記・若杉知和 2006 『上猪ノ原遺跡第5地区』清武町埋蔵文化財調査報告書第19集 清武町教育委員会
井手廣 2005 『第II章 上猪ノ原遺跡第4地区』『上猪ノ原遺跡－4－・下猪ノ原遺跡－2－』清武町埋蔵文化財調査報告書第17集 清武町教育委員会
今塙屋辰行・秋成雅博 2006 「松ヶ迫遺跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
岡本武憲 1991 「日向における古代末の土器－宮崎守園都市遺跡群を中心として－」『中近世土器の基礎研究』VII 日本中世土器研究会
岡本武憲 1995 「13. 九州南部」『鐵説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
木村明史編 1996 『下村窯跡群報告書<基礎資料編>』佐土原町文化財調査報告書第10集 佐土原町教育委員会
島田正治 1994 『蕨野遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第6集 高岡町教育委員会
高橋服彦 2003 『平安京近郊の綠釉陶器生産』『古代の土器研究－平安時代の綠釉陶器・生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会第7回シンポジウム 古代の土器研究会
竹中克繁 2006 『櫻町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第60集 宮崎市教育委員会
長津宗重・近藤協 1985 『第III章 小山尻東遺跡の調査』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会
中村和美 2006 「8 上部器と須恵器」『先史・古代の鹿児島』通史編 鹿児島県教育委員会
野間重孝編 1985 『西ノ原地区遺跡』 宮崎市教育委員会
北郷泰道・日高孝治 1985 『第II章 下田畠遺跡の調査』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会
三上次男 1993 『長沙窯官窯磁－その貿易陶磁的性格と陶磁貿易』『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
森隆 1989 『九州系黒色土器の器形的系統に関する若干の観察』『古文化叢書』第21集 九州古文化研究会
山本信夫 1999 『太宰府出土の埴輪陶器の編年について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 国立歴史民俗博物館



第77図 古代における五反畠遺跡A地区及び清武上猪ノ原遺跡第4・5地区遺跡の様相<復元案> (S=1/1500)

図 版



SE-13と発掘作業員さん（西から）

図版1 遠景及びアカホヤ上面完掘状況

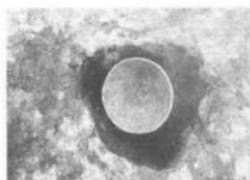


1 五反畠遺跡A地区遠景（南西から）

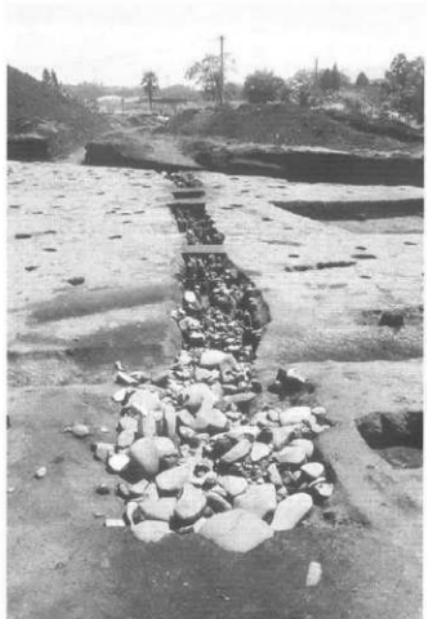


2 グリッドC・D区アカホヤ上面完掘後（北西から）

図版4 古代～中世の遺構①



- 1 SB-7完掘（南西から）
- 2 SB-18完掘（南西から）
- 3 SB-19完掘（南西から）
- 4 SB-19柱痕（南から）
- 5 SB-19柱痕ライン有（南から）
- 6 P-12遺物出土状況（東から）



1 SE-13遺物出土状況（西から）



2 SE-13完掘（西から）



3 SE-13埋土堆積状況（西から）



4 SE-13遺物出土状況アップ①（北東から）

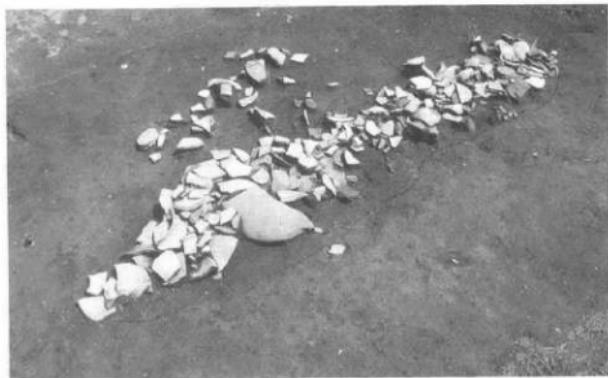


5 SE-13遺物出土状況アップ②（南東から）



6 SE-13長沙窯水注出土状況（南西から）

図版6 古代～中世の遺構③



1 SZ-2掘込検出（北西から）



2 SZ-2完掘（東から）



3 SZ-2炭化物出土状況
(北西から)



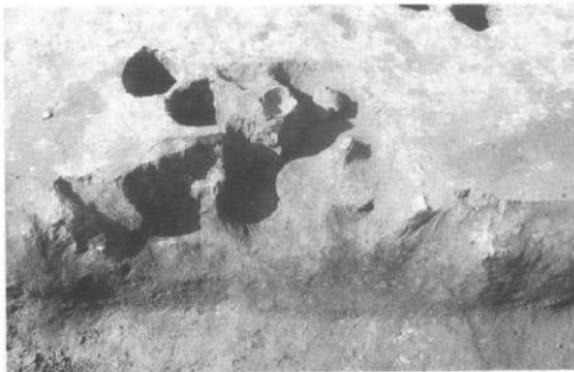
1 SD-14遺物出土状況（南東から）



2 SD-14完掘（南東から）



3 SC-20遺物出土状況（北から）



1 SC-21遺物出土状況（北から）



2 SE-3・4・5完掘（北から）

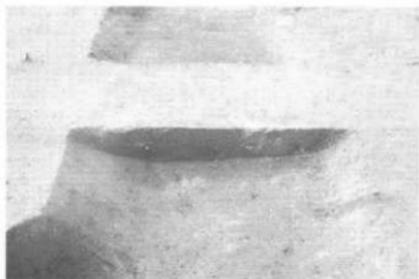


3 SE-3・4・5完掘（南から）

図版9 古代～中世の遺構⑥、時期不明の遺構



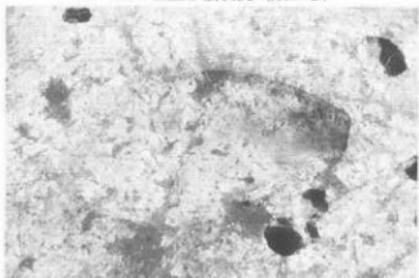
1 SE-3埋土堆積状況（南から）



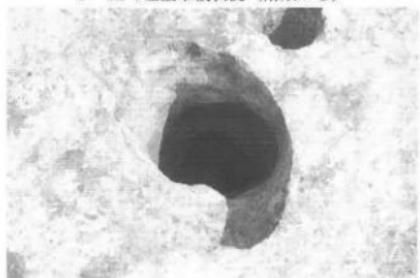
2 SE-4埋土堆積状況（東から）



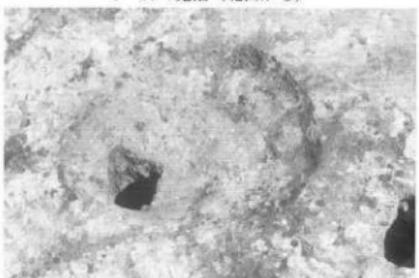
3 SE-5埋土堆積状況（南東から）



4 SC-7完掘（北西から）



5 SC-9完掘（北西から）



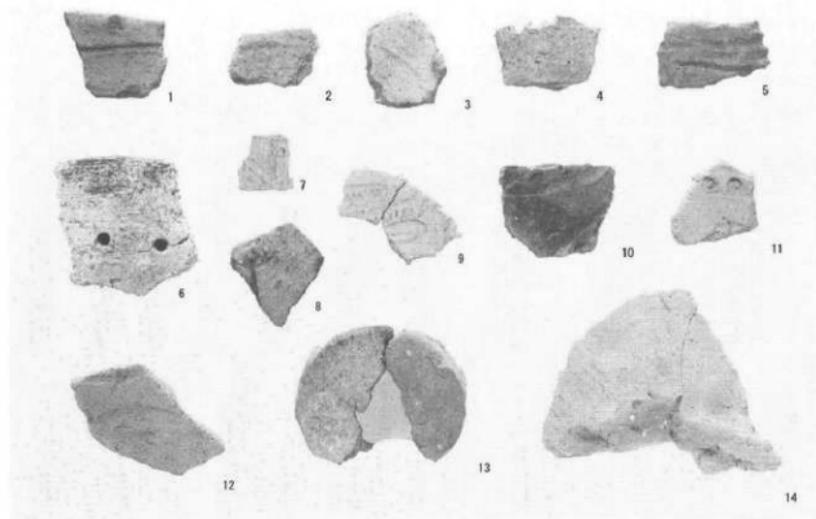
6 SC-10完掘（西から）



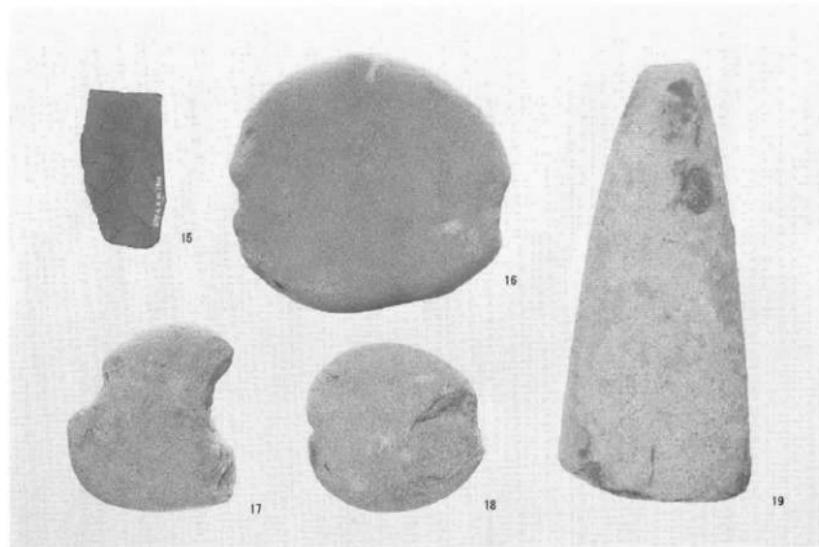
7 SC-16完掘（南東から）



8 SC-17完掘（西から）

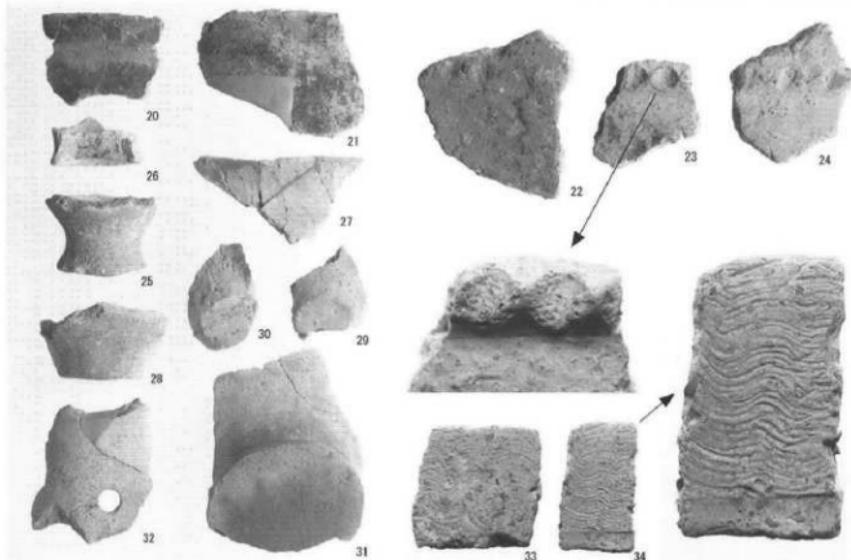


1 繩文土器



2 繩文時代の石器

図版11 弥生土器、古代～中世の遺物①



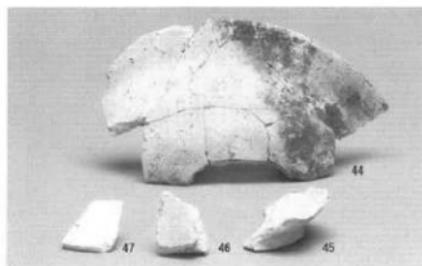
1 弥生土器



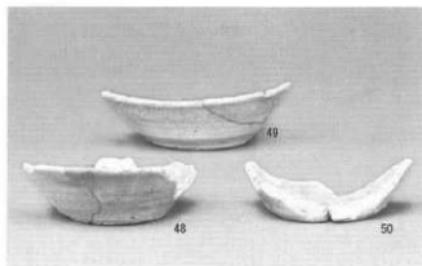
2 掘立柱建物跡・ピット郡出土遺物



3 SD-14出土遺物



4 SC-20出土遺物



5 SC-21出土遺物



1 土師器杯 I a類



2 土師器杯 I b類



3 土師器杯 II類



4 土師器杯 III類



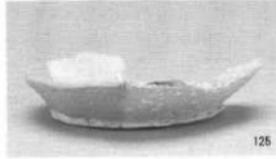
5 土師器杯 IVa類



6 土師器杯 IVb類



7 土師器杯 V類



8 土師器杯 VI類



9 土師器杯 VII類



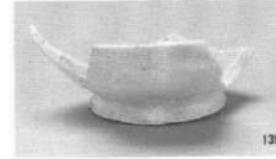
10 円盤状高台付椀 I a類



11 円盤状高台付椀 I b類



12 円盤状高台付椀 IIa類



14 円盤状高台付椀 II c類



15 円盤状高台付椀 II d類



16 円盤状高台付皿



13 円盤状高台付椀 II b類



17 輪高台付椀①



18 輪高台付椀②



1 SD-14墨書き土器



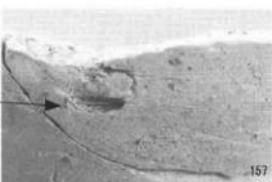
2 墨?が付着する杯



|



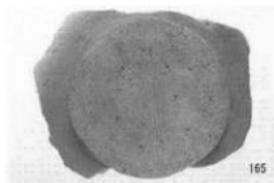
3 初穀圧痕のある椀



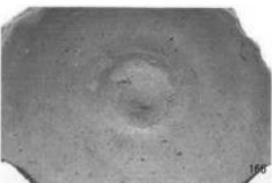
157



4 放射状調整痕



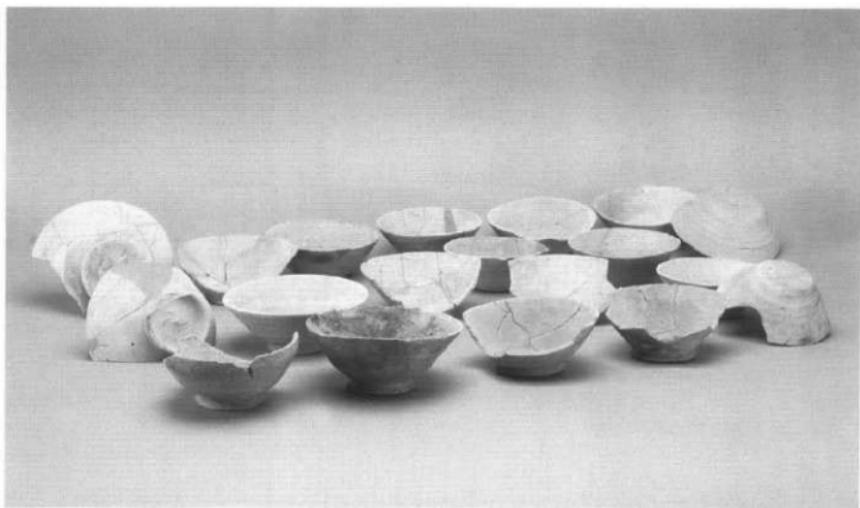
5 底部の板状圧痕



6 白色の化粧土?



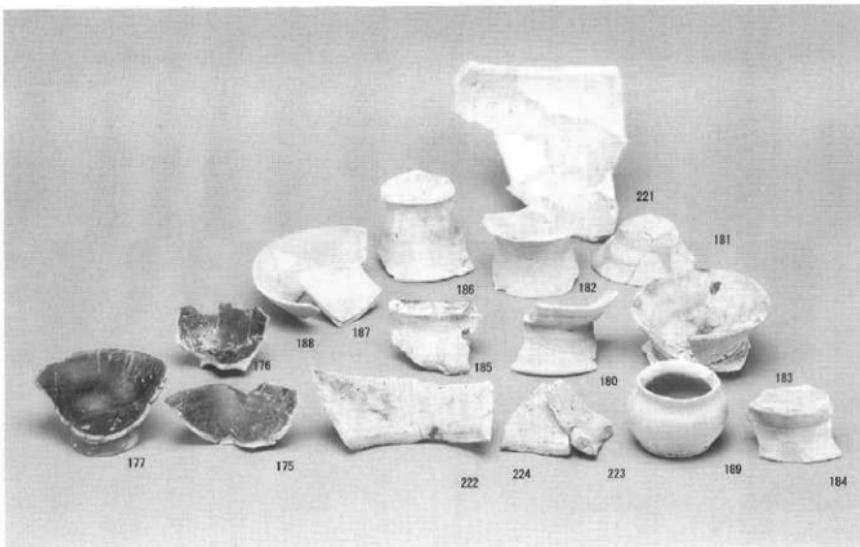
7 格子目状の圧痕



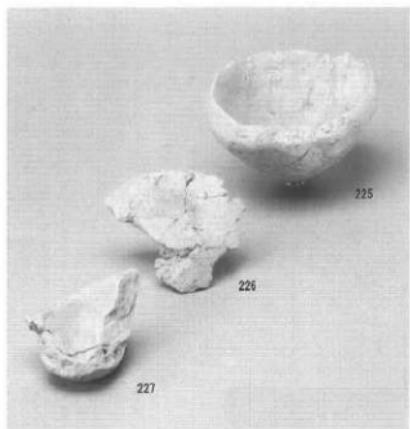
8 SE-13出土の杯・椀



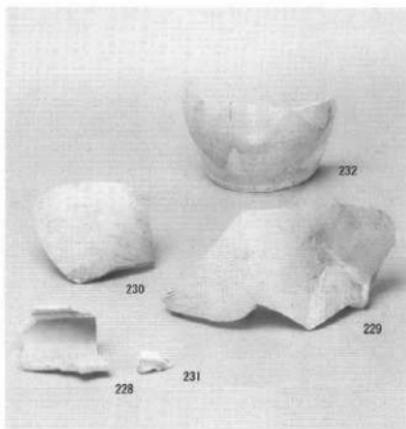
1 SE-13 出土の壺形土器



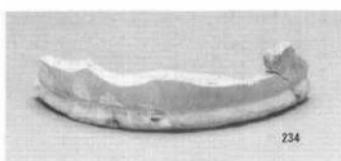
2 SE-13出土の杯・椀・壺以外の土師器及び黒色土器



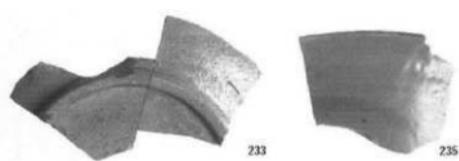
1 SE-13出土の布痕土器



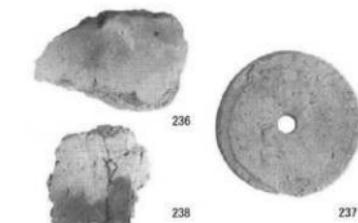
2 SE-13出土の須恵器



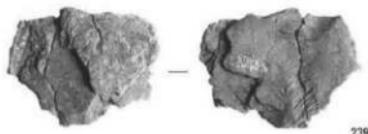
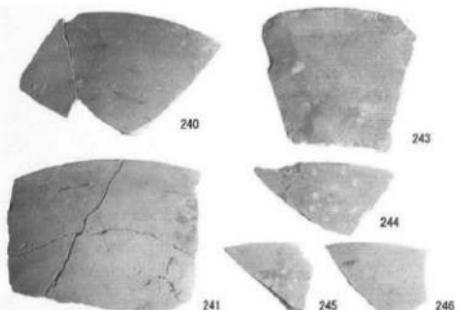
3 SE-13出土の長沙窯壳



4 SE-13出土の緑釉陶器



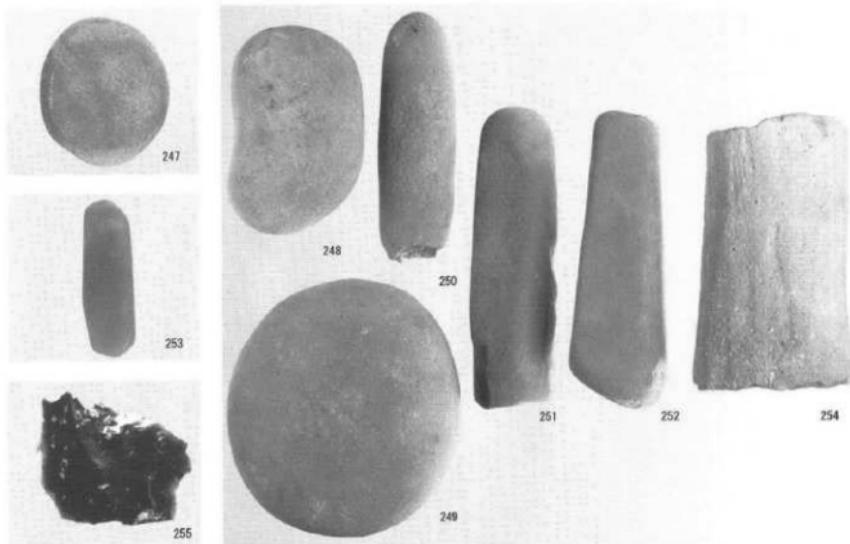
5 SE-13出土の土製品



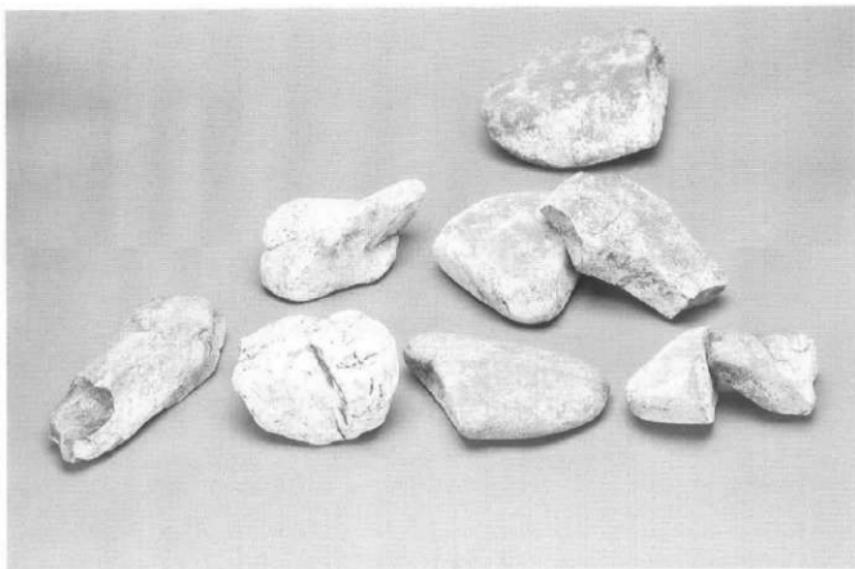
7 SE-13出土の不明土器片



6 SE-13出土の墨書き土器



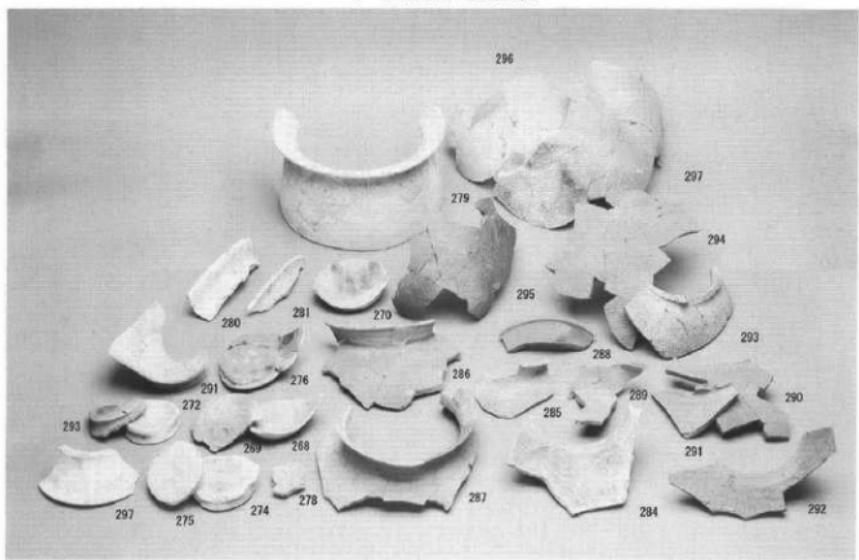
1 SE-13出土の石器



2 SE-13出土の白色顔料が塗布された礫



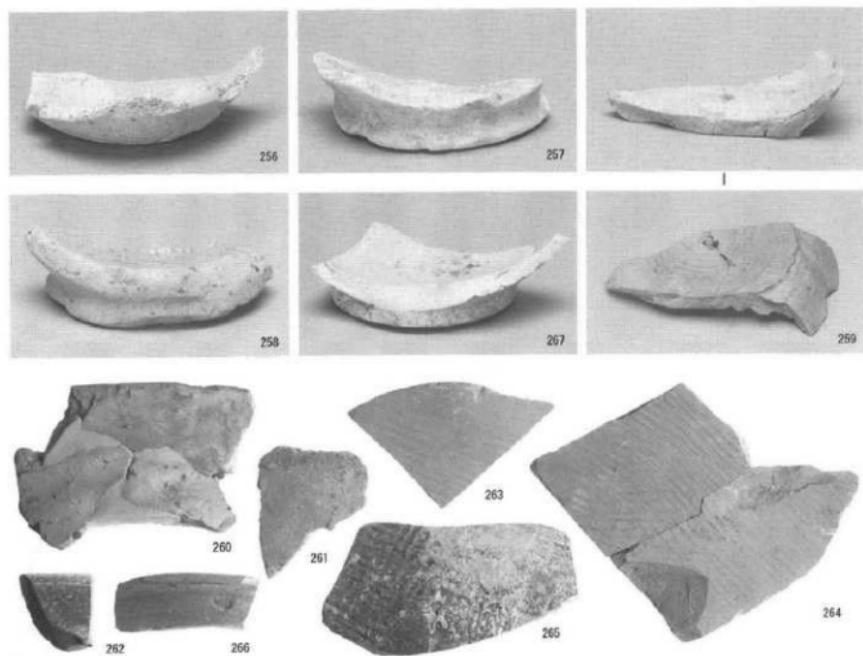
1 SZ-2出土の須恵器壺



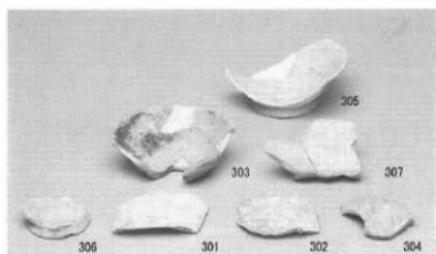
2 SZ-2出土の須恵器・土師器



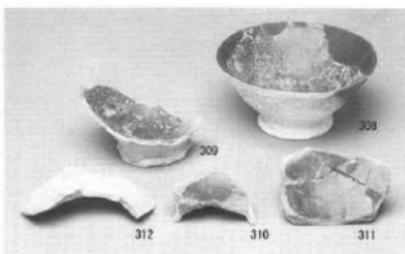
1 SZ-2出土の綠釉陶器



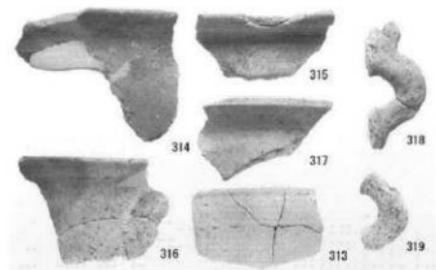
2 SE-3出土遺物



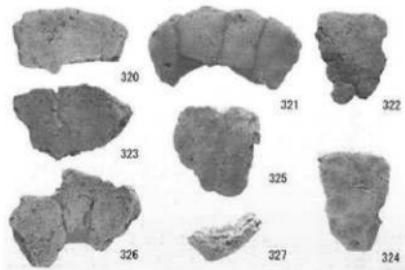
1 遺構外出土の土師器杯・椀



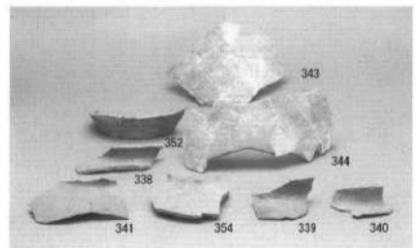
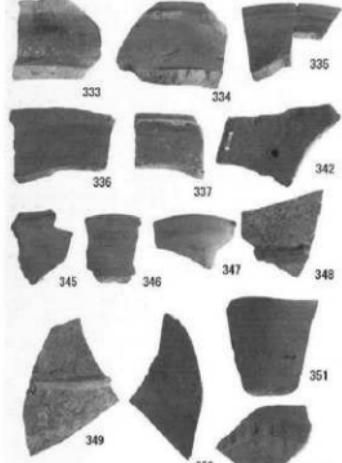
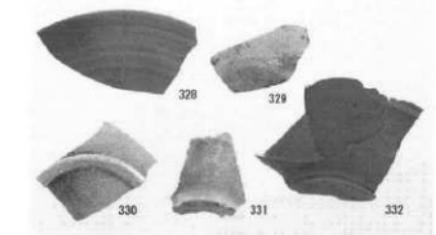
3 遺構外出土の黒色土器



2 遺構外出土の土師器甕・鉢・把手

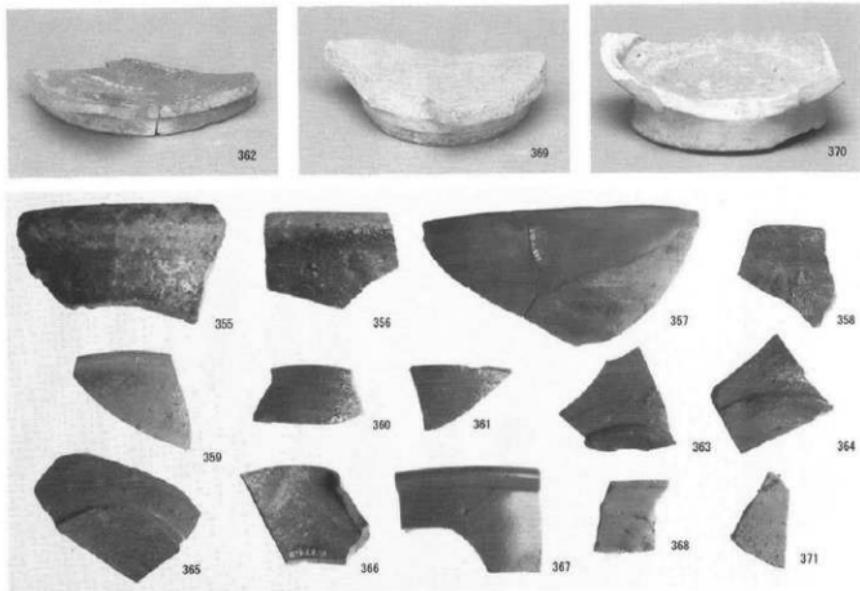


4 遺構外出土の布痕土器

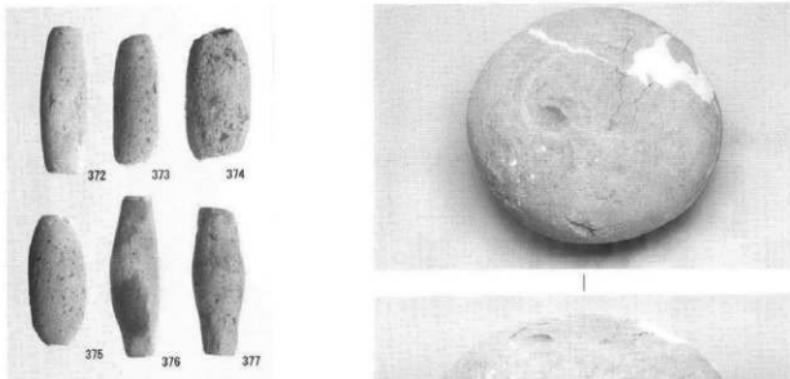


5 遺構外出土の須恵器

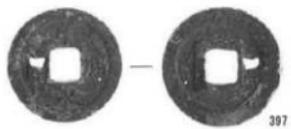
図版20 古代～中世の遺物、近世の錢貨



1 遺構外出土の古代～中世の陶磁器・瓦器・墨書き土器



2 遺構外出土の土錐



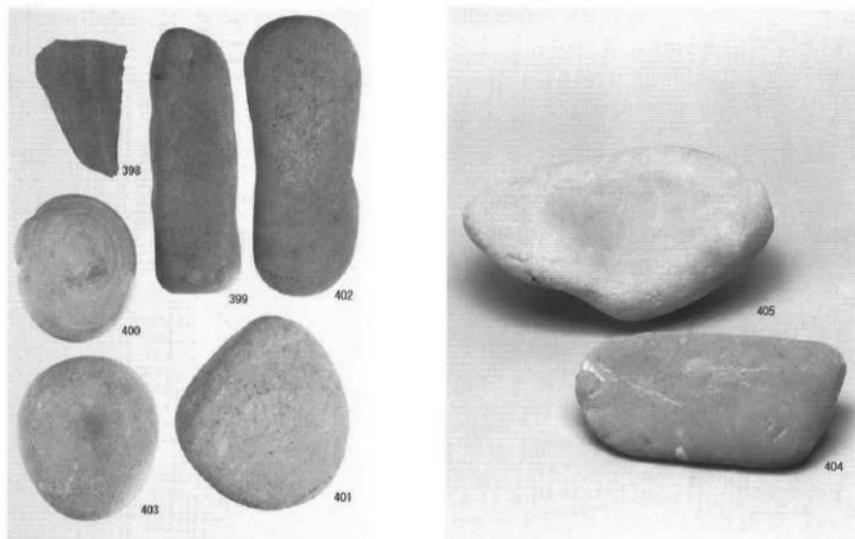
4 寛永通寶

3 水輪未製品？

図版21 近世以降の陶磁器、時期不明の石器



1 近世以降の陶磁器



2 時期不明の石器①

3 時期不明の石器②

調査抄録

フリガナ	ゴタンバタ				
書名	五反畠遺跡A地区				
副書名	県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第28集				
編集者名	今村結記				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2009/8/31				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経	調査期間
五反畠遺跡 A地区	清武町 大字船引 字五反畠	清武町：224	31° 51' 43"	131° 22' 23"	07. 6. 1 ～ 07. 10. 18
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
1,370m ²	道路関連	集落	縄文時代 弥生時代 古代～中世 近世	貯蔵穴 掘立柱建物跡 溝状遺構 土壙墓 土器集積遺構 土坑	縄文式土器 弥生式土器 土師器 須恵器 貿易陶磁 綠釉陶器 墨書き土器 陶磁器 (肥前ほか) 錢貨
特記事項					
長沙窯壺の出土					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第28集

五反畠遺跡A地区

県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成21年8月31日

編集発行 清武町教育委員会

〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204

TEL 0985-85-1111

印 刷 株式会社 NETVision

〒889-1604 宮崎県宮崎郡清武町大字船引644-62

TEL 0985-84-4111

